

みんないっしょに。

matsuri

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お家の命で審神者になった一人の少女の話。

こちらは二次創作です。本家さまは一切関係ありませんので、予めご了承ください。オリジナル女審神者が主人公で話が進みます。苦手な方、嫌悪を感じる方は閲覧をお控えください。

セリフネタバレあります。ご注意ください。

完全妄想です。捏造です。自分の生んだ審神者を動かすために書いた作品です。

上記にご理解頂ける方の閲覧を推奨いたします。

この作品が、少しでも暇つぶしや、あわよくば貴方の楽しみの一つになりますように。

現在2週に一度、月曜日に更新しております。日付は最新話のあとがきをご確認ください。
さい。

目次

序章

はじまり | 1

第1章

1 | 4

2 | 12

3 | 21

清光さまときまりごと | 29

正国さまと猪 | 37

国俊さまとこれからのこと | 45

7 | 55

鳴狐さまと隠し事 | 62

鳴狐さまと過去の話 | 71

第2章

10 | 79

平野さまと秋田さまとお出かけ

89 | 99

小夜さまと夢見る話 | 99

乱さまと風邪 | 109

骨喰さまと初めての鍊結 | 119

初めまして前田さま | 128

厚さまとお昼寝 | 137

太郎さまと山伏さまと短刀の話

146

俱利伽羅さまといっしよの一日

157

薬研さまと宗三さまと喧嘩の話

167

1 0

—————

179

1 1

—————

186

1 2

—————

196

閑話

おまけの話と閑話休題

—————

206

第3章

今剣さまと青江さまと願い事の話

221

鯨尾さまと罰当番

—————

232

安定さまと昔馴染み

—————

239

堀川さまとお片づけ

—————

251

歌仙さまとお菓子作り

—————

261

山姥切さまと本音の話

—————

269

和泉守さまと大事なこと

—————

277

次郎さまと五虎退さまとおめかし

288

鶴丸さまとさぶらいず

—————

297

蜂須賀さまと検非違使の話

—————

309

1 1

—————

317

1 2

—————

325

序章

はじまり

涼森家の適性保持者は審神者になる。

これは、生まれるまえからの決まりごとだった。

涼森家は代々政府に組みしているため、その時代のニーズにあつた人材を派遣していた。わかりやすく言えば、裏方の人間、政府の手足、使い勝手のいい駒。逆らえないほどの理由があつたにせよ、子孫にまで蟠りを残さないで欲しいものだと思う。今更何を言えた話ではないけれど。

話を戻すと、生まれるまえから生きる道を決められていたわたしは、決められた道を決められた通り進むことを強制された。逃げようものなら折檻され、逆らおうものなら服従するまで拷問を受ける。そんな光景を横目に、わたしはつつがなく、ルールからはみ出すこともせず、今の今まで生きてきた。にっこにっこにこにここと愛想を振りまき、反感を持つ素振りを微塵も見せず、幼い頃から今日17歳になるまで、生き延びてきた。

とうとう審神者業務に関する全ての教育を終え、今日、審神者になる。昨日までに引越しの準備は全て終えてある。少ない荷物はずでに新しい住まい、本丸に送り届けられ

たはず。これから先、涼森の本家に帰ることはない。一人で本丸を切り盛りし、一人で生涯を閉じるまで働くのだ。

「お行きなさい、このか。貴方の家はもうここにはない。しっかりとやりなさい。ほら、迎えが来ていますよ」

「はい、お母様。もう貴方とお会いすることはないでしょう。いままでお世話になりました。では、お元気で」

母娘の最後の別れにしては淡白な会話が終わると、使用人によって玄関の戸が閉められ、完全にわたしはこの家の部外者となった。

政府からの迎えの車に揺られる。実は、これから先の指示はまだ受けていない。本丸の場所さえ把握していない。実は本丸なんて存在せず、別で飼育殺しにされる未来が

待っている、ということもあり得るかもしれないのだ。

幸いなことに、飼い殺しにはならず済むようだった。どこともわからない場所に連れて行かれ、適当な挨拶の後、他の審神者になる者たちと一緒に別室に移動させられた。楕円形の、変な膜の張ってある機械が置かれている。

「これから君らにはその機械を通って次元を超えてもらう。基本的にこちらと本丸を繋ぐ道はこれしかない。連絡手段には文を用いる。指示もそちらで行う。こちらに通う必要のある者は把握しているので、決まった時間に戻ってこれば、車で送迎する。説明は以上、各々、各自のゲートを通り、本丸へ行かれたし。健闘を祈る」

一方的な説明に、異論を唱える者は誰もいなかった。きつとみんなそう教育されているのだろう。わたしも何も言わず、自分の名が記されたゲートをくぐった。

第1章

1

「初めまして、こんのすけともうします。審神者殿、どうぞこちらへ」

ゲートの先には、狐が待っていた。どうにもおかしな面をして、懇切丁寧な口調でわたしを促す。

「こちらはまだ本丸ではありません。政府の一室とでもお思いください。説明は受けているでしょう、今から貴方様には初めの刀を一振受け取っていただきます」

歩きながら説明が続く。行燈の光だけで照らされた廊下は、思いの他危うかった。ゲートをくぐった障害でもあるのだろうか。

「選ぶ、ではなく受け取る、なのです。選ぶものだと思っておりましたが」
「貴方方に選択する能力はないでしょうか？」

これは、一本取られたと思った。教育を受けて審神者になるしか道がなかった者たちは、みんな『指示に従う』以外の能力を欠損させるような生活を強いられていた。それも当たり前だ。いうことを聞かない道具なんて、壊れた時計以上に役に立たないのだから。

ただ、それは自分の意思を叩き折られたやつに限るんですけどねえ？

「なら、本丸に送り届ければよかったのでは？」

「政府の人間、またはこちらの世界の人間は、本丸には基本立ち入れないのです。その時空に余所者が入るわけですから、時空そのものを歪ませかねません。ですから、審神者殿と通信役の一名のみの通行許可しか出していません」

「そうでしたか。なら、ほとんどわたしは一人で過ごすことになるのでしょうか」

「ええまあ。ただ、その時空の中にも住まう人間はおります。交流もしようと思えばできるでしょう。ただ、くれぐれも時空を超える瞬間を目視されませんよう」

「わかっていきます」

会話が途切れ、ただ足音だけが響く。行燈が揺れると、わたしの影だけが揺れた。

「こちらです。貴方には、この加州清光を受け取っていただきます。これは扱いづらい刀ではありますが、まあ貴方ならば問題ないでしょう」

薄暗い部屋の真ん中に飾られる一振の刀。手で取るように言われ、迷わずに両手で取り上げる。ずっしりとした重みが手に乗る。これからのわたしと、一番長く過ごすであろうヒト。

「では審神者殿。これより先、政府並びにわたしも直接的な干渉はできません。せいぜい国のお役に立ちますよう、健闘を祈ります」

その言葉を最後に世界がシャットアウトされる。

ああ、最後までいけ好かない言い回しの狐だった。

目を開けると、見慣れない天井だった。けれどすぐに何があつたか鮮明に記憶から読み取ることができる。まさか、ゲートをくぐるたびに気を失つてはとんでもない。仕事にも学業にも支障が出てしまう。

両手にはしつかりと加州清光が握られていた。いや、抱きしめていたという方が正しいか。ゆつくりと身を起こすと、いままでに味わつたことのない空気が肺に送り込まれてきた。ずっと澄んだ味だった。

さあこれから忙しい。なんせ歴史に余計な手を加えさせないため、戦わなければならぬ。非戦闘員である自分の代わりに戦場に出る刀にヒトの形を与えなければならぬ。新しい生活を確立しなければならぬ。

最優先は、人型を形成することか。

ぐるりと視線で部屋を一周し、縁側に出られる障子を見つめる。手をかければ先は案の定、広々とした庭園につながっていた。

きつとこの場所は置いてあるものから見てもわたしの部屋。なら、別の部屋がいい。もつと広くて、何も置いていない部屋。たしか手合わせをする道場があつたはず。そこならきつと、神棚もある。

わたしの本丸暮らしは、どうやら本丸全体の把握から始まるようだった。

かれこれ一時間は歩き回っただろうか。厨房、大広間が二つ、トイレ、風呂場、茶室、手入れ部屋、鍛刀部屋兼刀装部屋。それから小ささまな広さの個室が二十六。想像以上に広い。あまりにも広い。道場なんて、一番端にあるものだから最後にたどり着いた時には少し疲れてさえた。きっと、それだけ刀剣の種類が多いということなんだろうけれど、部屋割りは考える必要があると思った。

「あー。川の下の子です。加州清光。扱いづらいけど、性能はいい感じってね」

つつがなく具現化を成功させる。扱いつらいつて、自分で承知しているのね。

「はじめまして、加州清光さま。わたしはこの本丸を任されております、審神者でございます。これから先、貴方さまには私の代わりに戦場へ出て敵の討伐をしたり、生活を手伝っていたることにありますが、どうかよろしくお願いいたします」

両手を膝の前に着き、深々と頭を下げる。相手は自分が降ろしたとは言え神に違いない。礼を欠くことは許さない。

「えっ、ちよつと、主？だよね??なんでそんなに頭が低いのさー!」

「神様に対して頭が上がるはずもございません。これから先、わたしは貴方方付喪神様のお力無しに生きてゆくことはできません。どうか手をお貸しいただけるようお願いいたします」

「いやっ、それはそうなんだけどさー!ちゃんとわかってるよ、自分が付喪神なのも審神者の手足になって敵を潰してくのが仕事だつて先に説明もされてる。政府つてとここで説明も受けたけど!だから、あんたが審神者でしょ?つてことは主でしょ?この本丸で一番偉いのつて主でしょ!」

すでに焦りが隠せていない。加州清光はきつと、頭を下げられることに慣れていない。まあ、刀は使われるだけだったのだから、当たり前といえはそうなのだけど。もう少しだろうか。

「大体！俺たち刀剣は審神者の力がなかつたら人の形にもなれないんだから、神様って言ったって審神者のおかげでなれたんだから、だからだから、」

「では、わたしを対等に扱っていただけののですか？」

「というか審神者の方が上だと思っただけど、それじゃ折れてくれなさそうだからそうしよう。対等だよ。だから、もう頭なんて下げないでよ、主」

……なんてちよろい。こうもあつさり一人目を丸め込むことができてしまうとは。人間ごときが、神様を利用しようというのに。

ゆつくりと顔をあげれば、少し離れたところに立つ一人の青年。彼が、加州清光の付喪神か。

「では、これからよろしくお願いします、清光さま」

「ん、よろしく。堅苦しいのは苦手だから、お互い楽にいこーね」
「はい」

微笑んで頷けば、くすぐったそうに笑う清光さま。これから、この方との生活が始まるんだ。

2

「まあ、最初から上手く行くはずもありませんね」

「いてっ！ちよつと、もつと優しくやってよね」

「生憎わたしにはどうすることも」

とりあえず、物は試しに片っ端から試してみようということで、清光さま単独で戦場に出てきてもらった。まあ一步本陣から出た途端に攻撃され怪我をしながら速攻で逃げ帰ってきたのだけれど。そして今は手伝いと呼び、最速で怪我を治しているところだ。

「分かつてはいましたけど…これなら、先に鍛刀で仲間を増さないですね」

「だから最初っから言っただじゃん！」

「あ、怪我治りましたね。では一緒に行きましょう」

「無視?!」

「ぶーぶーと文句を垂れている清光さまを放置して先を歩き始める。結局文句を言いながらも付いてくるのだから、可愛らしいお方だ。」

それにしても広い本丸だ。小高い丘の上に建つこの本丸は、丘の頂上一帯に広がっていた。馬小屋もきちんと完備され、敷地内に畑もある。大きな池もある。庭園は、いつでも一、二軒家が建てられるだろう空きがある。鍛刀や刀装作りを行う作業場は少し離れた敷地の端の方に建てられていて、そこへ行くのも一苦労だ。

「ねえ主、それにしたってこの本丸、広くない？というか広すぎない？」

「いいえ。これから沢山の男士がここで暮らすんです、そのうち狭いと思えますよ。」

「いや、そうじゃなくてさ。なんというか、あの政府とかいうのが提供する本丸なんですよ？それにしては思ってたより綺麗というか……」

「ああ、」

きつと清光さま方に事前説明をしたのは、あのこんのすけとか言う狐なのだろう。あのいけ好かない、政府の回し者の。それなら、政府に好感を持ってなくても納得がいく。その政府から寄越されたわたしを信用する気になるその気持ちはさっぱりわからないけど。

「わたし、これでも、えーと、寺子屋では一番出来が良かったんですよ。その分マシな場所を提供されたんだと思います」

せめて本丸だけでも、という言葉は飲み込んだ。そうなるかはわたしの手腕にかかっている。いかに効率的に力をつけていくか、それができれば、外だつて最悪な場所にはならないのだから。

「へえ、主つて賢かつたんだ。人は見た目によらないつてホントだよね」

「どういう意味ですかそれ。それはそうと、清光さま、主つて呼ぶことで定着したんですね」

「まあ、まだ名前聞いてないし。名前つて聞いちゃいけないんでしょ？」
「別にいいですよ」

返答に返答はなく、代わりにガタガタと、多分尻餅をついた音がした。その反応を、わたしはどう対処したらいいのか。

「大丈夫ですか？まだひとの体に慣れませんか」

「いや、いやいや、だって主、名前つて大切なものでしょ？俺たちだって同じ名前と同じものから作られているから同じ姿になれるんだよ？」

「ああ、まあ、神様なら言霊に乗せて名前で縛ることも可能でしょうけど、別に縛られても構いませんし、対抗手段も持っていますし、それに清光さま、わたしを縛り付けたんですか？」

立ち上がるのを手伝いながらたずねる。ふるふると横に振られる首。やっぱり、わたしの何を信用してここまで素直になれるのか。

「では改めまして、この第一三二支部を任されております、審神者のこのかと申します。姓はありません。どうぞよろしく願います、清光さま」

「このか、ね。よろしく」

ぱつと放した手を開いてみせる。にこつと笑う姿はどこにでもいる最近の青年のそれと同じだ。本当に、可愛らしい方。

「ま、そうこうしているうちに着きましたよ。さあて、二振り目はどなたがいらつしやるでしょうか」

「とりあえず一番簡単なのやつてもらいなよ。最初から時間かけててもしょうがないよ」

「それもそうですね。まあ、お手伝いを呼べるので時間はかからないんですが、資材も限られていますしね」

「お願いします、と資材の量を選んで鍛刀場に住まう職人に頼む。一緒に手伝い札を渡したから、もう間もなく出来上がるだろう。」

「新しいお仲間かあ」

「そのようですな」

カチンと刀が鞘に収まる。職人に手渡されたそれは、清光さまよりだいぶ短く軽いものだった。

「オレは愛染国俊！オレには愛染明王の加護が付いてるんだぜ！」

「愛染国俊…来派の短刀ですね。初めまして、この本丸の審神者です。これからよろしく願いますね〜」

「おう、任せてくれよ!」

どういふことだろう。わたしの言葉を鵜呑みにできるのは、刀の本能?なぜ二人ともこどもも明け透けにわたしのことを信用できるんだろう。わたしは、自分以外信用していないというのに。

そう思ったら聞かずにはいられなかった。誰も信用せずに生きてきたわたしは、疑わずにはいられなかった。

「あの…お二人とも、なぜわたしなんかを簡単に主と認めてしまうのですか?だって、わたしはあなた方を利用しようとする政府から派遣されてきた人間なのに。ただの、こんな小娘を、どうして信用できると言うんです?」

唐突な問いに、国俊さまはその場に座り込みながら、清光さまはわたしの傍に立ったまま視線を合わせた。

わたしは何を言っているんだろう。なぜこんなことを思うんだろう。なぜ、なぜ、な

ぜ。疑問ばかりが浮かんでくる。

だつていままで。」

「なんでつて言われてもなあ。直感？オレは政府つてのが何かはしらねえけど、オレの目の前にいるオマエは悪い奴じゃねえつてことは分かる。やつと使われるんじゃない、意志を持つて自分の体を持つて戦えるつてんなら、その体をくれた、悪い奴じゃないオマエを信用してもいいんじゃない？ま、前の主に使われんのも悪くなかつたけどな―」

「強いて言うなら、そういうの言っちゃうとこじゃない？」

にししと笑う国俊さまはに次いで清光さまも口を開く。

「そういうの、ですか？」

「こんな小娘を、つて。たしかに生まれて間もない子どもなんだろうけど、じぶんでそれを知つてんじゃない。それに、利用しようと思つてない、刀解するつて脅せば言うことを聞かせられると思つてる審神者は嘘でも頭を下げたりしないよ。このかは低すぎると頭が低かつた。だから、信用してもいいつて思つたんだよ」

そうだ、わかった。信用されることに、いままで以上に敏感になって疑っていたのは。疑心暗鬼になっていたのは。

いままで、こんなに打算のない笑顔を向けられたことがないからだ。計算尽くの大人たちに囲まれ、この道を歩くよう強いられ、自分を押し殺して、自身も打算で動いていたのだから、慣れていないんだ。本心をさらけ出すことに。さらけ出されることに。

「……わたしは、あなた方を、刀を、使い捨ての道具として扱う政府が嫌いです。こちらの都合で人の形を与え、そのために痛みを味わうことになるのに、使えなくなったら次に行く考え方が嫌いです。審神者という職に不満はありませんが、ただ都合のいい駒として扱う、わたしを育てた人間が嫌いです。だから、わたしはここに、やっと姓を捨てることのできたから、生まれ変わるつもりでしたのです」

子どものわがままのような物言いに、二人はにいつと笑って見せた。いままでこんなに優しい顔でわたしに笑いかけたひとはいない。初めてが人ではないというのが皮肉だけけど、これから同じ生活を送る仲間と、新しい家族だから、なんにも問題ない。

「いいんじゃない？主がそうしたいのなら」

「難しいことはわかんねえけど、早く祭りに行こうぜ！」

すこし、いままで自分を押し殺して生きてきたことに感謝をした。ようやつとここで報われた気がした。いままでの自分や周りがなければ、いまこの場に誰も居ない。そう考えたら政府やあの大人たちを、少しは許せるかもしれない。…いまは無理だけど、ね。

「ねえ、この本丸にくるみんなを、家族や友人として扱ってもいいでしょうか。こんな小娘のそれになつてくれるでしょうか」

「さー、これからくるやつらはわかんないけど、俺はいいよ。家族で友達。いいね、人間にしかできないことだ」

「まあ一緒にこの本丸で暮らすんだしな。そしたらもう家族だろ！」

対等以上の関係を望んでもいいだろうか。その問いに、あつけからんと答えを出したこの二人を、ずっと大切にしようと思った。もちろん、これからくる仲間のことも。誠意を見せて、家族になろう。それが、新しいわたしの、最初の目標。

3

あれから順調に強化と刀剣回収を進め、本丸に新たな仲間が加わった。平野藤四郎と秋田藤四郎だ。二人とも粟田口の短刀で、鍛刀と戦場で清光さまが刀を拾ってきた。礼儀正しく素直で、わたしをすぐに主と認めてくれた。

「歴史が変わるということは、それによって僕たち刀も生まれていなかった世界がでる可能性があるということですよ。主君にお支えすることで消えてなくならないのであれば、全力でお支えさせていただきます」

「あなたのことはまだよくわかりませんが、僕を拾ってくれたそのお二方から察するに、悪い方ではないようです。だから、僕のことでも使ってください、主君」

この愛らしさをこっちの二人に求めるのは酷でしょうか。

ちらりと見た視線の先で、清光さまはにっこりと可愛らしく笑い、国俊さまは「そんなことより」と言いたげな視線を返してきた。違う、こうじゃない。

「わたしはこのか、この本丸を任されている審神者です。これからよろしくお願ひしますね、平野さま、前田さま」

「はい！全力でお守りします！」

「僕も頑張ります！」

あ、癒された。可愛すぎます。純粹なこどものようで、疑うことを忘れてしまう。わたしよりも、何百年も長く生きているというのに。

「国俊さま、お二人に本丸を案内してあげてもらえますか。その間にわたしは夕食を作ってしまうから。あ、清光さまは手伝ってくださいね〜」

「おおつ、今日はご馳走か！」

「はいはい〜いっと」

二手に分かれてわたしたちは厨房へと歩く。広い本丸だけれど形は単純なので迷いそうもない。

「そういえば、彼らに部屋の場所を教えるのを忘れていましたね〜」

「そんなのあとあと。どうせ夕飯食べてからなんだからいいでしょ」

「そうですね。ところで、今日の夕飯は何がいいですか？彼らを連れてきてくれたので、清光さまの食べたいものも作りますよ」

そう言うと、目を輝かせた清光さまが、今にも尻尾を降り出しそうな勢いで詰め寄ってきた。これはもしかしくなくても、この間貸した端末で調べていたようだ。

「俺、あれ！えつと、米を卵で包んだやつ、名前わかんないけど、あれが食べたい！」

「ああ、オムライスですね。よかった、フランス料理のフルコースでも言われるかと思いました」

「ん？ふら…なんだって？」

「いいえ、なんでもないですよ」

覚えられてリクエストでもされたらたまったもんじゃない。さすがにそんな料理は作れません。

冷蔵庫の中身を確認して、必要なものを取り出す。メインはオムライスでいいとして、あとはスープとサラダと簡単なデザートでも作ろうか。

「清光さま、お箸は使えるようになりました？」

「うゝあれ苦手。力加減がわかんないんだもん」

「折らないでくださいねゝ」

「これでは手伝ってもらえることがないではないか。

*** **

「これが美味しいということなんですわね！これが甘くて、これがすっぱい！人の体は面白いです！」

「僕、主君の作ったお料理大好きです！」

「ありがとうございます、二人とも。食べ終わったら、ごちそうさまでしたって言うんですよゝ」

「「ごちそうさまでした！」」

可愛らしい二人に構っている間にもう二人も食事を終えたようで、「ごっそーさん」やら「ごちそうさま」やら思い思いの挨拶が聞こえる。この二人は人の体に慣れすぎでしょう、まだ二日目だというのに。

*** **

わたしの主な仕事は、まず人間というものを教えるところからだつた。元は刀剣、物を食べることも知らない。ただ、それはわたしも一緒にできることだから手本を見せればよい。清光さまも国俊さまもそうやってなんとかしてもらつた。ただ、それは先のような見せてできることに限る。

「頭はこれで洗つて、流したら今度はこちらで整えるんです。一度だけはわたしがやりますから、次からはあなたたちが新しい仲間を教えてあげてくださいね」
「わあつ、あわあわです！ぶくぶくしています！」

「体は石鹸を泡立てて、汚れをこすり落とすんですよ」

「体が綺麗になるのがわかります！」

素直に驚いてくれるのは、こちらとしても教え甲斐がある。人の姿で過ごすためにはどうしても覚えなければならぬこと、どうせなら楽しく覚えたほうがいい。

「頭がすつきりしました！」

「しかし主君の着物を濡らしてしまいました…申し訳ありません」

「大丈夫ですよ。あなた方が出たら、そのままわたしも入ってしまいますから」

*** ** *

全員が風呂上がり、浴衣に着替えて静かに夜を待つ。

すでに二人はこれから来るであろう前田藤四郎とともに同室で過ごすことを了承し、部屋を整え終えていた。

「主君、床の用意ができました。これであっていますか？」
「はい。じゃあ、今日の最後ですよ。寝てみましょうね」

途端、二人がおずおずと居心地の悪そうな表情になった。きつとどうしたらいいのかわからないのだろう、清光さまと国俊さまもそうだった。

「じゃあこうして寝つ転がってください。お布団かけますよ」

ばさつと放り投げるように布団を掛ける。きゃーつとかわいらしい子供のそれのように喜ぶ。このままはしゃいでしまいたいところだけど、それでは意味がない。

「まだ靈力が安定しないでしょう？わたしがここで手を握っていますから、目を閉じて、ゆっくりと呼吸をしてください。明日の朝、目が覚めたら調子も良くなりますよ」

そう、人の体を保つためには自身の靈力が必要だ。わたしはただ最初の形を作る手助けをするだけ。自身の靈力の暴走は、人の体に慣れることでしか抑えられない。それは

一晩眠って器に定着することで得られる安定。つまり、最初の一晩さえうまく眠ってしまえばあとはなんとかなるものなのだ。眠るために必要な霊力の調整、最初だけなら手伝うのも辛くはない。

だんだんと二人の手の力が抜け始めた。どうやらうまく眠れたようだ。さあて、明日からはまた賑やかになりそうだ。

清光さまときまりごと

「あるじ、正国、寝た？」

ここそつと障子の向こうから影が囁いた。そつと床を離れ、障子の外に出る。清光さまが、少し離れて待つていてくれた。

あれから数日、わたしの本丸には六振りの刀が揃い、だいぶ賑やかになっていた。新しく来た二人が、わたしのことを認めてくれているのかは別として。

「眠れるのなら、先に寝ていてくださってよかったのに」

今日新しく来た青江さまと正国さまが眠つて本丸全体が静かになったものだから、もうわたしが最後だと思つていたのに。

「一応近侍だからね。あるじを守らないと。今日も屋根の上か縁側で明かすよ」

「国俊さまは？」

「自分の部屋でぐっすり。あいつ意外といびきもかかないし寝相もいいから、あとふたり来てもなんとかなりそうだね」

ふふつと顔を見合わせて笑う。

来派は三人だ。最初に清光さまと国俊さまと全員分の部屋割りを決めるとき、三人は同じ部屋で良いと了承を得ている。だから、今は国俊さま一人で広い部屋に落ち着いている。すごいんだけど皮肉なことに、あとの二人はともレアリティが高いから、なかなか部屋は埋まりそうにないけれど。

「安定さまも、早く来てくれるといいですね」

「…まーね」

口調はささくれているように聞こえるけれど、早く会いたくてウズウズしているのが良くわかる。新撰組、沖田総司のもとで清光さまと時を同じくした大和守安定。早く迎え入れられるよう、今いるみんなを鍛えなければ。

「明日の予定、清光さまには伝えておきますね」

前置きをして先ほど決めた明日の予定を思い起こしながら口にする。

鍛刀のこと、次の出陣のこと、内番を始めること、決まり事を制定すること。

清光さまは指折り数えるように聞いていて、最後には頷いたものの、引きつった口元を隠そうとしなかった。

「畑、かあ……。まあ必要なことだとはわかってんだけどさー。てか、よくそれだけを覚書もなしに決められるよね」

「そうですね？でも、ちゃんと大広間に書き起こしておきますよ。全員がわからないという意味がありませんからね。それに、決まりごとは定めておかなければ。なるべく失敗のないように、ですよ」

「そーね。ま、俺も手伝うからさ、とりあえず今日はもう寝なよ。あの二人を呼び起こすんで疲れたでしょ？」

心配、とは。されるとは思っていなかった。わたしは顔に出さないし、別段疲れていないわけでもない。刀だから人の感情は持ち合わせていないとかそんなことを思ったわけではなかったけれど、純粹に心配されるのはくすぐったいものだった。わたしは使え

る人間なのだから、と見栄を張って生きていた分、そんなこととは無縁だったのだから。くすつと笑った。自分が笑ったというのに、少し驚いた。

「わたし、そんなに疲れていないですよ。でも夜更かしは肌によくありませんし、寝ましようか。清光さまももう寝ましよう。大丈夫、わたしが気丈な限り、敵の侵入はさせませんから」

「それ、あるじがあんまり寝ないで結界を張り続けるってことでしょ。知ってるんだから。止めてよそんなこと」

「清光さま？」

「もう俺たちがいるんだよ。あるじは俺たちのことを家族だと言ってくれた。友人として扱ってくれた。人と刀なんて根本から違うのに。あるじは俺たちのことを思って、絶対に無理な出陣はしないでしょ？ たった数回しか戦場には出ていないけど、それが心配なんだってわかった。戦場なのだから多少の怪我も仕方がないって割り切っているように見せて、本当は俺たちよりも傷ついている。もっと頼ってよ。俺たちだって、このかが俺たちを心配するように、このかを心配してんだよ」

何かが決壊したようにどんどん言葉を紡いでいく。鬼気迫るものを纏いながら、詰め

寄ってくる。すでに後ずさるための空間がない。どうどうと両手で制すると、状況に気づいたのか、ぱつと身を引いてくれた。

顔、赤いかも。ああ、わたしは女だから、こういうことにも気をつけなければいけないのか。

「だからつ、友達なんだから、少しくらいわがまま言つて欲しいし、俺にも守らせてつて言つてんの！」

もう行くから！と勢いよく立ち上がり、わたしに背を向け歩き出す。少しだけ足音が大きく聞こえるのは夜の所為か、彼の心情を表しているのか。

「もう寝てよね！」

肩越しに振り返つて睨むと、すぐに飛び上がつて廂に手をかける。そのまま体を揺すつてひよいと屋根の上にながつてしまった。どうやらこのまま本当に屋根の上で夜を明かすらしい。思つたより頑固だな。

明日、きちんとルールを決めなければ。納得させ、わたしも彼らも無理をせずに行え

るルールを。

「こつちのセリフですよ、まったく」

いくらわたしが心を痛めたところで、本当に怪我をしているのは彼らの方。確かに手入れをするにも出陣するため時代を飛ぶのもわたしの霊力を使うけれど、そんなのわたしにとつたら微々たるものだ。新参のみんなを守って一番霊力を使うのも、気負っているのも、きつと清光さまの方なんだ。

まあとりあえず、今日はお言葉に甘えて寝るとしようか。

明日こそは、もう何日も睡眠時間を削って夜番をしている清光さまを寝かしつけると心に決めて。

「では、これからはこの決まりを守つての行動をお願いします。破つたからといって罰

があるわけではありませんが、責任はすべて自分が負い、果たすように。わたしも、怒りますし、怒られますから」

翌朝、清光さまが倒れた。原因は言わずもがな、睡眠不足だ。

決めたことといえは簡単な制度のみ。たったの十の事柄だけ。念のために書き起こしておこうと思う。

一、近侍は一番隊長が兼任するものとし、審神者の職務の手伝い、及び代行を行うものとする。なお、近侍は内番と同様に当番制とし、それらの当番は前日の夜掛札により審神者が示した通りにする。

二、内番は次の七つである。畑仕事、馬当番、料理番、洗濯掃除番、夜番、近侍。それらの仕事はすべて前日の夜に部隊編成とともに掲示される。また、兼任する場合もある。

三、食事は決まった時間に本丸にいる全員が揃って取る。手入れ中や病気、夜番の後、その他やむおえない事情がある場合はこの限りではない。

四、出陣、遠征、遠練、畑仕事、馬当番、手合わせの後、その他汚れるようなことがあればすぐに入浴すること。ただし審神者が入浴中に限り、出てくるのを待つこと。

五、手入れは怪我の大きさによらず、帰還次第行うこと。軽傷以上の怪我を負ったも

のは次の出陣には一切参加してはならない。部隊のうち一人でも重傷を負ったならば、何を置いても本陣に帰還すること。また、手入れ待ちに鍛錬や手合わせすることを禁ず。疲労を感じたものはすぐに申し出ること。

六、執務中の審神者の部屋には近侍以外の立ち入りを禁ず。審神者が執務中、出陣中、外出中は、代行（近侍）に本丸のすべてを任すこととする。その場合代行（近侍）の言葉は審神者と同等の価値とする。

七、生活費、必要経費以外は給料制とし、個人のもものはそれで賄うこととする。金銭の貸し借りは借用書を作成した上で両人の同意と責任のもと行うこととする。

八、手合わせや鍛錬による道場の使用は、代表者一人による予約制とする。前日まで審神者に申し出ること、また一度に使用できるのは三時間までとする。誰も使用していない場合は自由に使用してよいが、時間になり次第速やかに退出すること。

九、審神者、または代行（近侍）の指示以外のことは、すべて自らの責任のもと行動すること。ただし、本丸の外へ出る場合には審神者の許可を必ず得ること。外出時と帰宅時に必ず報告すること。

十、休暇を取る場合は必ず二日前までに申告すること。当日の休暇申し込みをする場合にはその日非番のものに交代を頼み、その旨を審神者に伝えること。

清光さまにだけは、なんとわれようと変える気はない。

正国さまと猪

起きて起きてと珍しく慌てた声に起こされた。起床時間にはまだ少し早いけれど、誤差の範疇。しかし、いつも自分で起きるわたしを起こしにくるなんてよっほどのことがあつたに違いない。

なんて寝巻きのまま慌てて秋田さまについてきてみれば。

「な、なんです、これ…」

「おつきな音がして、来てみたらこんなことにつ。主君、どうしましょう…」

本丸の中、しかも厨の中だというのにボロボロな姿の正国さま。確か、彼は鳴狐さまと夜番だったはず。ただ、ボロボロと言っても怪我をしているわけではない。服が泥で汚れて、ついでに周りのものも落ちたり散らばったりしているのだ。そんな正国さまは今、泥のように眠っている。

ええと、別に敵襲があつたわけではないようだけど…。

「秋田さま、すいませんが雑巾を持って来ていただけますか」
「はいっ」

頼んだ通りに走り出してくれる。

その間、わたしはこの惨状をどうにかしなければ。

「正国さま、正国さま、起きてください。説明してください」
「…んあ？」

間拔けな音。けれどどうにか目は覚めたようで、寝ぼけながらもどいてくれた。いや、どくのではなく説明して欲しいんですって。

血が飛んでいた。拭き取られたあとはあるけれど、きつと暗闇で気づかなかつたんだろう。でもこれは正国さまの血の匂いではないし、ほかの男士のそれとも違う。まあ、厨に血が飛んでいる時点でおかしいのだけど。

とりあえず、と灯りをつけた。暗闇では出来る作業もしようがない。

これはこれ。あまりにも酷い現場に、思わずため息が出た。

まずは血痕。布で擦られた跡が庭へ出る縁側に続いている。それを拭いたのである

うタオルも戸の脇に落ちていた。次に悪臭。血が乾ききっていない、腐った臭い。戦の本陣までは出向くにしても、ここまで凄惨な模様は見えないから、さすがに頭が痛くなる。それからシンクに溜まった血。洗い流そうとしたのだろうか。もういつそ洗剤を目一杯流し込んでやりたいくらいだ。

残念ながら今使えそうな薬品がないので、代わりに調理酒をばら撒いた。雑巾でこすればまあ何とかなるだろう。まあまだ乾いていないのはどうとでもなるだろうし、最悪、目立たなくなればいい。いつそ木造なのだから薄く削つてもいいかもしれない。そこらへんは、みんなが起きてから考えよう。

「主君、お持ちしました」

まだ眠っているものへの配慮か、小声で差し出してきた。礼とともに受けとる。こんな掃除、手伝わせるわけにはいかない。何事も自己責任とこの間決めたばかりなのだ。

「ありがとうございます。もう部屋に戻っていいですよ。あとは正国さまに話を聞いてからにしますので」

「はい。では、朝の支度を済ませてきますね」

さすが刀剣といったところか。この血塗れの部屋を見ても、ちらりとも狼狽えるそぶりを見せない。最初に呼びに来たのだから、血に驚いたわけではなく、異常事態を知らせに来ただけなのだから。

足早に部屋を出て行く秋田さまを見送って、さてどうしたものかと腕を組んだ。このまま正国さまが起きるまで待つわけにはいかない。血は固まってしまおうと、しかも木の床、落とせなくなってしまう。すやすやと気持ちよさそうに眠っているところ申し訳ないけど、起こさせてもらおう。

「正国さま！起きてください!!」

厨から声が響かないよう、声を押さえた上で耳元で叫ぶ。まだ夢を見ているかもしれないほかのみんなを起こすわけにはいかないから。

殴つてもいいのだけど、さすがに固そうで気がひける。わたしのほうが手を痛めそう
だ。

「…起きなければ明日から戦に出しませんよ」

「あ”あ”?!」

「おはようございます、正国さま。目が覚めたのなら説明していただけますか、この現
状」

怒鳴つても起きないのに呟くだけで目をさますとは。どれだけ戦狂いしているのか。
わたしはまつすぐ厨の中を指し、微笑つて尋ねた。

「これは、いったいどういうことか説明してください」

「あー…拭き取りきれでなかったのかよ。えーと、あれだ。見張りしてたんだけどよ、敵
はこなかったんだけど、塀の外に何かぶつかる音がしてさ、門からでちやいけねえと
思つて塀の上から見下ろしてみたらよ、」

なにやらゴニョゴニョといひ籠る。言いつらい理由があるとすれば無断外出だろう
けど、それをしていないという。さて、どういうことか。

「その、猪が…」

「はっ」

「だからよ、ぶつかってたのは猪だったんだよ。んで、牡丹鍋もいかなと庭におびき寄せて、ぶった切って、血抜きして……あ、見るか？」

そういつて立ち上がり、向かった先は冷蔵庫。よく見れば冷蔵庫にも血を拭き取った痕がある。まさかとは思うけど。

「食いもん持たせるにはここに入れとけばいいんだろ？」

そうして開いた冷蔵庫。大所帯になるからと政府に注文付けた特大のそれが仇になった。ぼっかり空いていたスペース、収まったのが、まさか猪の頭だなんて。

結論から言えば、わたしは腰を抜かした。そりやもう綺麗にお尻から崩れ落ちた。叫ばなかったことを褒めてもらいたい。なんせ、人間しかいない、すでに食べ物加工されていた世界を生きていたのだから、動物の死体なんて見ることもなかったのだ。

「おい、大丈夫か？」

「と、とりあえずそれを閉めてもらえますか。冷気がもつたいないので。えっと、それから、ええっと、」

ああもうなにを言ったらしい。怒ればいいのか泣けばいいのか。驚きのあまり頭が真つ白だ。いつともうこれ以上の驚きはないかもしれない。

とりあえず落ち着こう。ゆっくりと肺に残っている空気を吐き出す。そうして空っぽになったら新しい空気を取り込む。少しだけ、体が軽くなった。立てないけど。

「正国さま、ちよつと、わたしを部屋まで運んでくれませんか？言いたいことはいろいろありますが、とりあえず着替えたいのです」

「ん？おう、立てないのか？」

「誰のせいだと……って、正国さま!?まさか俵担ぎされるとは思っていませんでしたよ！」

早朝だということを忘れて騒ぎ立て、皆を起こしてしまったのは言うまでもない。

ついでに正国さまには今後一切動物への手出しを禁じ、汚したところの掃除を命じ、それ以上のお咎めはなしとした。

しかし、今回の件では必要なものが多々見つかったので、明日にでも誰かを連れて買に行こうと思う。

ちなみに、牡丹鍋は平野さまと秋田さまの頑張りによってとっても美味しくいただけました。

国俊さまとこれからのこと

夕食終わりの集会は、明日の予定を確認する恒例行事となっていた。

「今日もお疲れ様でした。二つも敵の本拠地を倒せるなんて、凄いです。新しく加わった太郎さまも歌仙さまも頑張ってくださいだったので、えらく進みが良かったですね」

「自分で刀が振るえるというのも、そう悪くはありませんね」

「そう言っていたけると助かります。では、明日の予定ですが…」

そう言つて少しだけ体をどかし、後ろの壁を晒す。部隊編成を一切していない、内番だけの掛札を。

「明日の出陣はお休みとします。わたしが必要なものを買いに出ますので、内番のみとします」

「異議を申し立てる」

「はい、歌仙さま」

「どうして僕が畑なんだ！土仕事なんて雅じゃない！」

「騒ぐ方がみつともないですよ。それに、ここに来た方々には一度、すべての内番をこなしていただきます。それからわたしが見て得意であろう仕事を中心に内番を決めていきます。何か異論は？」

うぐつと立てた足を元に戻した。まだこの本丸には馬がないから、馬当番はない。一番嫌がりそうな馬当番を先にやらせたかったのだけど仕方がない。まあ、これも仕事のうちということ。給料をきちんと支払うしね。

「あ、料理番は暫く平野さまと清光さままで固定です。そのうち誰かを見ていただきますから、それまではわたしの手伝いだけで頑張ってくださいね」

「ま、他の奴らは秋田と青江を除いてまだ箸ちゃんと使えないしね」

「お役に立てるのでしたら出来る限りの事をいたします」

「まあ気負いすぎないでいいですからね」

そんなわけで近侍も清光さまにお願いして、全員の了承を得て内番を確定する。今晚

の夜番の鳴狐さまと青江さまはすでに任についているし、明日はなんの職にも付かせていないのでいい。

「最後に、国俊さま」

「おう」

「明日のわたしの買い物、付き合ってくださいませんか？」

「俺でいいのか？」

「国俊さまがいいんですよ」

「わかった！」

元気の良い返事に少しだけ安心する。国俊さまを誘ったのには、理由があつたからだ。

全員を見回して、渋々ながらも了承した顔も見て、解散を告げる。

今日も無事、誰も失わずに終えることができた。

昼食の片付けを終え、清光さまに後のことを任せ、わたしは服を着替えに部屋へ戻った。

審神者だからと格好をつけた巫女服も、これから行く街では浮いてしまう。簡素な着物に着替えるも、やっぱりわたしはこれを好きになれないらしい。袴と違って足が擦れるので、どうしたって歩幅が狭くなる。歩きづらいことこの上ない。けれど、この本丸のある時空の街に行くならば、学校の制服を着るにしても逆に目立ってしまう。はあ、参った。現世のデパートならこんなの気にしなくていいのに。

「おーい、準備できたか？」

障子の向こうから呼びかけるのは国俊さまだ。急かされる声に慌てて巾着を掴み取り障子を開けると、縁側に腰掛けた国俊さまがこちらを見上げていた。

「お待ちせしました。行きましょ〜」

「おう！」

装備を一番軽くして、刀も懐に隠してくれている。どの時代でも、刀や防具は注目の的になってしまう。特に、一般市民の中では。

「ああ鳴狐さま。今からお休みですか？」

コクリと頷きのみが返ってくる。夜番の帰りだから普段肩に乗っているお狐さまもいない。ううむ、あの方は声を聞くのも一苦労だ。

「わたしたちこれから買い物に行きますので、なにかあったら清光さまのところへお願いしますね」

再び頷きが返ってくる。これ以上引き留めるのも悪いと思って、「行ってきます」と告げて別れた。

はじめはよい包丁を買いに刃物屋へ。次に今いる彼らとこれから来る彼らのための食器を揃えるため焼き物屋と箸屋へ。それから裁縫道具を買いに呉服屋へ。国俊さまは目移りさせながらもわたしの後ろを常に同じ距離でついてきていた。

「お嬢さん、針と糸だけでいいのかい？もしよかつたら着物も新調したらどうかしら」
「ありがとうございます。でも、連れを待たせるわけには…」

「ん？オレは待つてるぜ？どうせだから、一着ぐらい洒落たの持つてもいいんじゃないか」

粧して見せる相手もないんですけどね。

自分で選んだ道を外れないという道なのに、自分で考えていて笑えてくる。人間として一人で暮らす代わりに刀の彼らと生涯を終えると決めたのに。少しだけ惜しいことをしたなんて思うのは彼らに失礼だ。

「ま、そうですね。では、これくらい簡素な普段用と、よそ行き用を見繕っていただけ

ますか？国俊さまも一緒にですよ〜」

必要なもののついでにわたしの服まで買って、とりあえずひと段落した。

「お疲れじゃないですか？」

「まだまだ行けるぜ！」

「んー、じゃあ、わたしが疲れたので、お茶屋さんに入ってもいいですか？」

「あ、そか。そうだよな、わりい」

率先して茶屋に入っていく。戸を開けて待っていてくれるのだから、わたし彼氏なんて作らないでも全然平気じゃない。

「ありがとうございます。国俊さまはなにを食べますか？」

「団子！」

「は〜い。では、席を取っておいてください」

国俊さまが店の奥に行き、わたしは店番のお姉さんに注文を伝える。帰りに持つて帰るお土産分も忘れずに。

二人分のお茶を団子を受け取り、二人席で足をぶらつかせている国俊さまを見つけ。その国俊さまもわたしを見つけると、小走りに寄つてきて、盆を取つてわたしを席まで誘導してくれた。

ふふつ、彼氏なんていらないわ。わたしには十分すぎる現状だもの。

「いただきますーす」

「いただきますーす」

パクツと一番上の団子を口に入れる。前々からこの店にはお世話になつてはいたけど、できたてを食べる機会なんてそうそうない。ほんのりとした甘みが口に広がつて、思わず気が抜けた。

国俊さまも気に入つてくれたようで、残りの2つをパクパクと食べていく。一口お茶

をすすつてからもう一本に手を伸ばした。

「国俊さま」

「んー？」

もぐもぐと口を動かしながら返事をする。そのまま聞いてくださいねと前置きをしておわたくしもお茶で一息ついた。

「審神者というのは、刀がどこでどのようにとどの順番で来るか、なんて操作はできないんです。こればかりは鍛刀の職人の腕と資材の量と、あとは出陣した時に出会えるかの運だけ。そして、出会える可能性というのも、その刀が強ければ強いほど低いのです」

「ふーん」

「国俊さまと同じ来派の刀である蛍丸と明石国行は、そのなかなか出会えない方に属します。ですから、多分、しばらくは一人部屋になってしまおうと思います」

「ごつくん、と、最後の団子を飲み込む。そしてお茶も飲み干してしまふ。」

「ま、そりや仕方ねーな。そのうちひよいと出てくるまで待つつきやねーし。それに部屋はまだ一人だけど、オレは一人じゃねーからさ、大丈夫だぜ？ なんとたつてオレらは大家族だからな！ さみしいなんて言つてる暇ないくらい楽しいし、そんな心配すんなよ」

な？ なんてわたしの頭を撫でてくる。これじゃあわたしが慰められてるみたいじゃない。

くすくすと笑つてわたしもお茶を飲み干す。包んだお土産が届けられ、店をあとにする。

ああ、わたしはこの方々には敵わないなあ。審神者になつて、本当に良かった。

「国俊さま、荷物ありがとうございます」

「皿は届けてもらうし、着物とちつせーのだけだからそんな重くないし。土産も持つぜ？」

「いえ、わたしも持てますから」

てくてこ帰りを待つみんなの元へと歩き出す。今度は肩を並べて。夕日を背負つて、我が家へ急ぐ。

夕暮れ、歌仙さまと洗濯物を取り込む。あんなに嫌がついていた畑仕事だけれど、どうやら性にあつていたらしく、今日は当番でもないのに秋田さまを手伝っていたようだ。やっぱり、第一印象で決めるのはよくないな。

昨日帰ったあと、国俊さまはいつも通りだった。ほつとした反面、やはり早く全員を揃えたい。

それに、実はそろそろ限界なのだ。

「今日は五虎退さまも鯰尾さまもいらっしやってまた賑やかになりましたね〜」

「そうだね。そろそろ料理番の人数を増やすべきかもしれないな」

「二人で作るのは結構大変ですよね〜。歌仙さま、明日は挑戦してみます?」

「君に手ほどきして貰えるなら、喜んで受けよう」

クスクスと笑いあう。だってこの方には、わたしが実は包丁に慣れていないことがバレてしまったのだ。

調理実習に早さは求められなかったからいいんですよーっと。

「あるじ〜っ」

「あら、清光さま。どうかしましたか〜?」

清光さまが慌ててわたしを呼ぶ理由なんて限られているから、どうせまた遠征帰りの正国さまが重傷にでもなったのだらうと思ったら。

「お客人だよ！洋装だから、この時空の人間じゃないと思うんだけど…」

「ああ、通信役の方ですかね〜。入れて差し上げてください。それから…」

「まって、違う。そのお客人、大怪我してんの!」

その言葉で、わたしが次取るべき行動は決まっていた。

「歌仙さまは全員を客間の前に集めて待機、清光さまはわたしと一緒に来てください!」

これが最善の策。

することが決まってしまうえば行動は早い。全員が走り出す。わたしは追いつけない。後についていく。

「あつ、鯰尾さま！来てください、緊急事態です！」

今日顕現したばかりの鯰尾さまも、私の言葉から異常を感じとつたのか、手に持っていた木の枝を放つて走り寄つて来てくれた。

本丸の中は何事もない。歌仙さまの迅速な行動によつてすでに召集は終えているように見える。

門に着くと、先についていた清光さまと、多分清光さまが命じたのだろう、鳴狐さまが見張りに立っていた。門の外に見える影。服装や持ち物からして通信役で間違いない。

「怪我人は！」

「主殿！それが来てみればなんとということか、怪我をしている人間が門の前に……もがっ」
「外に出る許可を」

語りに入つたお狐さまの口を塞いだ鳴狐さまがわたしに訴える。
呼吸の乱れを無視して、一も二もなく大声を出す。

「許可します！清光さまは警戒、鳴狐さまは彼を引き入れて！鯰尾さまは隣に落ちているあの荷物を全て回収して下さい！」

言い終えたと同時に素早く三人が動く。倒れていたのを清光さまが抱き起こし、そのまま支えられる彼を鳴狐さまが背負った。

鯰尾さまが回収し終えたと門の中に入って来たので、その中から応急道具を探し出す。荷物は地面に置くよう言つて、取り出した方を押し付けた。

「鯰尾さま、先にこれを持って客間へ。布団を敷いておいて下さい。鳴狐さま、客間へお連れしてください！清光さまは鳴狐さまについて！」

「わかった！」

「鳴狐さま、あまり揺らさず、ゆっくりと戻ってください。わたしは後から行きます」

頷きが返ってくる。わたしも頷き返し、急いで自室に戻った。

部屋に入って左側、背丈ほどの本棚。そこから急いで必要とする本を数冊抱き、駆け出した。一目見たただけだけれど、一刻を争う状態だというのはわかつている。

客間の近くまで来れば、呻き声と慌てた様子がわかりやすく耳に入った。

「お待ちせしましたー！」

障子を開け放っている客間に駆け込む。通信役がうつ伏せに寝かされていた。怪我は多々あるようだが、背中^がの傷が一番ひどい。

深呼吸をして審神者の顔を作る。今から少しの間だけ、反論を許さぬ絶対的な存在になるのだ。

「……これから指示を出します。国俊さまを中心に短刀全員は本丸の周囲の偵察を。敵が

いれば応戦せず報告に戻ってください。何もなくとも五分で戻ってください。四人全員に外出の許可を与えます」

いつものあどけない笑顔を消し、今は戦う者の顔になっている四人が、国俊さまを先頭にこの場から離れていく。

それを見送り、顔を残った全員に戻した。

「次、青江さまと清光さまは通常通りの夕食と、簡単な粥の準備をしておいて下さい。歌仙さまはその二人の手伝いを。太郎さまと正国さまは門を張っていてください。誰か訪ねる者があれば片方がその場で留め、片方が報告に来てください。また、短刀が万が一にでも戦闘になった場合には乱入して連れ逃げてください。そしてすぐに報告。その為の外出許可を与えます」

領きのみで了承した五人がそれぞれ自らの持ち場へ行く。

そうしてその場に残ったのは、わたしと鳴狐さま、鯰尾さま、それから通信役だけだ。

「お二人にはわたしの手助けをしていただきます。お狐さまは縁側で誰かが来る気配を

真つ先に察知してわたしに教えてください」
「かしこまりました！」

部屋の中に四人だけになる。邪魔な袖をタスキで括りあげ、本と救急箱を部屋の半分に広げた。

*** **

それからのことは死闘と言つても過言ではない。慣れない作業をする三人と、怪我の痛みや薬に耐える彼。

途中報告に来た国俊さまや太郎さまの話では、この辺りに敵がいる気配はないらしい。ただ、戦闘の痕跡はあつたようだから、襲われたのは間違いない。荷物に損傷がなかつたことから、彼は荷物を庇いながら逃げていたのだらうと推測される。

どうにか全ての怪我を処置し終えた頃には、日が半分ほど向こうの山に隠れていた。

鳴狐さまと隠し事

大きなため息をついたのは誰だったのか。確認するのも億劫になる程には疲れていない。た。

一つよかったことといえば、寝ている彼の呼吸が穏やかになったことだった。

「…鳴狐さま、鯨尾さま、ありがとうございました。もう大丈夫だと思います。あとは目が覚めるのを待つだけです」

「主さんが一番疲れたでしょう。俺看てますからお二人は夕飯に行ってください。向こうにいるのも心配してるかもしれませんし」

そうですね、と鳴狐さまと目を合わせる。彼が立ち上がったのを確認してわたしも身を揺らした。

「では、願いますね。軽く食べたらずぐに交代しにきますから、少しだけ待っていてください。怪我による発熱が見られますから、たまにいいので頭の手ぬぐいを冷や

してあげてください」

「了解です」

ひらひらと振られる手に押され、わたしたちは客間を出た。日はもうこの本丸には当たらない。夕食には丁度いいくらいの時間だろう。

冷えた空気を吸い込むと、ずっと慌てていた心臓が落ち着きを取り戻してきた。

「…広間に行く前に、着替えましょうかね」

眠ってしまったお狐さまを撫でる鳴狐さまが頷く。こんな血にまみれた姿で食事をするのは忍びない。近い鳴狐さまの部屋の前で別れ、自室に戻った。

部屋に入り、本を元の棚に戻し、思う。

まさかわたしの元に来る通信役が彼だったとは。けれど、わたし以外に適任がないのだろう。いい意味でも悪い意味でも彼とは相性がいい。それは、あの教育機関にいた時からわかつていたことだ。

「主」

「…ああ、着替え終わりましたか。少し待つてくださいいね〜」

巫女服の紐をほどいてさっさと着替える。もう着付ける気力はないから、寝巻きに使っている浴衣を簡単に帯で止めた。

「お待ちせしました〜」

わざわざ迎えに来てくれた鳴狐さまに礼を言つて歩き出す。
厨からもその前の広間からもいい匂いと、囁き声が聞こえる。

「お三方とも、先に洗い物してくれてるんですか？」

「あつ、あるじ！大丈夫なの!？」

濡れた手を拭くタオルを持ったまま駆け寄ってくる。詰め寄られ縁側から落ちる寸前で鳴狐さまに支えられた。

「ええ、なんとか。お待ちせしましたが、ご飯にしましょ〜」

「よかった…」

すっかり安心した様子に言葉が詰まる。わたしは今、ちゃんと笑っているのか。すると、ああ、と清光さまが微笑んだ。

「散々人を殺してきた刀がなに言ってるんだって？そりやそうだけども、誰かが死ぬのつて、辛いもんだよ。それが自分が殺した相手でもね」

「あ…ごめんなさい。わたし、顔に出ていましたか」

「まあ表情には出ていなかったけどね、人間の考えることはなんとなくわかるんだよ」

清光さまの後ろから出てきた青江さまが言う。これも付喪神である彼らの能力だと言うのなら、わたしは嘘もつけないし隠し事もできないことになる。本当になんとなくならいいのだけど、付喪神についての研究は、まだ微々たることについてしか分かっていない。

知られたくないことはたくさんある。神とは時に厄介なものなのかもしれない。

「さっ、ご飯にしよつ、あるじ。安心したらお腹減ったよ」

「そうですね、早く食べて鯰尾さまと交代しないと。みんなにもお礼を言わないとですね。」

五人がぞろぞろと広間に入っていく。するとわたしを見つけた秋田さま平野さまが飛びつかんばかりに走ってきた。口にするのは彼の安否についてだ。

「大丈夫ですよ。多分、怪我の他は靈力を消耗しすぎた所為でしょうから、ここで一晩寝れば明日には紹介できると思います。皆さま、手伝ってくれてありがとうございます。」

「あんくらいどーってことねえよ！それよりメシー。腹減った！」

「はい、国俊さま。さあ食べましょ。」

安心したのかみんなに笑顔が見える。わたしは刀剣に恵まれているようだ。人間でもこうはいかないことがあるのに…。

自分は軽く食事を済ませ、客間で待つ鯉尾さまと交代する。静かな寝息を立てる彼が、小さく唸った。

「鳴狐さま、隠れなくてもいいですよ〜」

カタンと障子が開かれる。闇夜に光る双眼がわたしを捉えた。

障子が閉められると、足音もなく鳴狐さまが隣に座った。刀を隣に置くと、こちらを振り返る。

「何が聞きたいんですか？」

わたしは目も合わせず、寝ている彼に視線を置いたまま尋ねた。

門の前にいたときから様子がおかしいのはわかっていた。普段以上に話そうとしないのは何かをこらえているから。そして、正国さまが運んでおいてくれた荷物を先ほど確認したところ、わたしが注文していた本が一冊だけ入っていなかった。

その本が、わたしの足元に差し出される。

「…何故、主は名を教えた」

「名乗るのは礼儀であり当然のことですよ」

「それは違う。人間同士ではそうでも、付喪神は名で縛り、名さえわかれば神隠しに遭わせることもできる。何故、それがわかっていて教えた」

応えない。

鳴狐さまは普段に似合わず口を止めなかった。

「目を隠すこともしていない。目を奪われれば、人間は抵抗ができなくなる。審神者とは霊力があるものしかできない。それは、付喪神にとって、好物であるということ。それなのに」

「鳴狐さまが聞きたいのは、本当にそれですか？」

顔を上げる。苦々しい顔をした鳴狐さまがこちらを見下ろしていた。わたしは微笑んできちんと思据える。

話を聞きながら白昼夢を見た気がした。数年前、審神者を育成する教育機関に入学して一年たった頃を。

「…貴女は、何故、そんなに死にそうなんだ」

「ふふっ、死にそうですか？健康体ですよ、わたし」

一層鳴狐さまの顔に陰りが出たので、冗談ですよ、ともう一度笑った。

「霊力、でしょう。わたしは殆ど持っていませんから、死にそうという表現はあながち間違っではないかも知れません。でもなんでわかったんですか？」

「結界が」

その一言で理解した。彼は一度、勝手に外へ出ていたのだ。そして触れた結界に違和感を覚え、この研究記録を懐にしまい、戻ってわたしたちを待った。そうして、わたしにカマをかけたのだ。『許可をくれ』と。まんまとわたしは外に出たことに気付かず、許可を出してしまった。

「結界を自分の霊力を使って張っていけば、まあ触れたものくらいわかるはずですからね」

わかった上でわたしを探るなんて容易いこと。普段みんなが余している霊力を身に纏い利用するその内側に、霊力がないことくらいすぐにわかってしまう。

打って変わって押し黙られる。これは話待ちということか。

バレないように小さくため息をついて、話す覚悟を決めた。

鳴狐さまと過去の話

15歳になり、義務教育である中学を卒業、高校に通いながら、夜間学校の要領で審神者育成所に通い始めた。

「義務教育履修済みが条件のため、わたしは最年少でした」

一瞬眠っている彼が少しだけ顔を歪めた気がした。額のタオルを冷やして絞ってまた乗せる。

鳴狐さまは黙って聞いていた。障子の向こうで物音がしたのには二人とも気づいていたが、話は止めなかった。

「中卒と同時にそこへ入ったのは、過去を合わせて四人目でした。まず精神が持たないんです。もう一つは普通の親が許しません。だから、大人になって仕方がなくか、お金のためか、まあ大体が審神者になるしかなくてなっているんです。まあ当然ですね、霊力は減る一方、つまり寿命を縮める仕事なんですから。ですが、大人が、寿命を縮めて、

ですから、審神者が足りなくなつたんです」

すぐに死んでしまつては意味がなかった。審神者の育成を歴史修正主義者は待つてくれない。1人の審神者が背負える敵の量は、とつくに超えていたのだ。

そこで政府は鈴森の家、その他子飼いの家に命令を下した。『家を継ぐもの以外の義務教育履修済みの者を審神者として召集する』と。もちろん、拒否はできない。一年だけ猶予を与え、悠々と取り立てていった。

「その時わたしは、丁度、中学最後の年でした」

生まれた時から決まっていたわたしの未来。そのため、鈴森の誰も惜しまずわたしを差し出した。

靈力を殆ど持たぬわたしを、迷わず死地に送り込んだ。

「きつと誰も審神者になれるとは思っていなかったのでしょうね。兄がいましたが、彼の家を継ぐため出て行くことはできず、けれど靈力はあり余していました。対してわたしは人間が生きるために必要な分と、少ししか持ち合わせていませんでしたから。けれ

ど、わたしは昔から、一つだけ才能があつたんですよ」

ふふつと微笑む。きつともう分かつてる。わたしは言わないだけで隠したりはしない。

「霊力を自在に操ること。それが自分のであれ他人のものであれ、そこにあればわたしは自由に使うことができました。家では誰にも力を見せませんでしたし、育成所でも殆ど使いませんでしたから、わたしは常に役立たずの烙印を押されていました。座学や必要最低限の実技は好成績だったので、なおさらですね」

初めて清光さまが顕現したとき、この本丸が綺麗だと言っていた理由がこれだ。すぐに死ぬ人間にいい本丸は与えられることはない。無駄だからだ。けれどわたしの場合、すぐというのが近すぎると判断されたため、それほど汚さずに次に回せると思ったんだろう。

成績優秀者の特権でわがままを一つだけ言ったけれど。

「そうしてこの本丸に来ました。一人の審神者として」

浸したタオルをきつく絞る。首回りの汗を拭き取ってから額に戻した。静かに質問を待つてみる。わたしの話は大体終わったと思うけど。

「…この男は」

「ああ、彼の名は教えられません。わたしと違って神隠しにあつては大変なので。ただ、呼び名はシコクと言います」

「シコク？」

「紫と黒と書いて紫黒です。彼はわたしの二つ上で、捨て子でした。政府が霊力の量を買つて拾つてきたのです。わたしは彼の指導役でした。誰もこの子をそばに置きたくなかつたんです」

霊力が大きいということは、それだけで周りに影響を与えてしまう。ただでさえ精神崩壊を起こすような環境に、生まれ持った強大な霊力は恨みや妬みの対象でしかない。そんなのが近くにいては、壊れてしまうことが誰の目から見ても明らかだった。

「どうして、主が？」

「申し出たんです。靈力が制御できていないままずっと放置されていたせいで、それこそ死にかけてでした。靈力の暴走は人格を奪います。政府は機関に丸投げだったので、なんの手助けもしてくれませんでしたし」

暴走するほどに靈力を持っているのはとても珍しいことだ。育成員の手に余るのも仕方がない。だからと言って、無責任に放り出していいものでもない。わたしは同情からか自然と申し出ていた。

育成所はすんなり申し出を受け受け入れた。わたしなら影響されても壊れても大した損害にはならないと思っただろう。

「結果、わたしはこの子を人に戻しました。勿論力も使いました。彼には口止めをし、その代わりに完璧に制御できるようになるまで手伝いました。座学や書類作成のようなことができなかったので審神者にはなれませんが、だから通信役としてわたしの元に来たのでしょうか。上もわたしのところへ通わせるのが一番安全だと考えたのかもしれませんね」

小さく、納得がいけないというふうを残しながら頷いた。なにか気に触るようなこと

を言ったか。

もう一度タオルを変える。顔つきが僅かだが穏やかになった。

「そう、名前と目でしたね。神隠しされる前に、わたしはその力を使わせません。万が一使われても、わたしだけならマシというものです。この子も霊力が大きすぎて並みの刀剣には制御できません。これで質問には全て答えたいと思います」

いかがでしょう、と首をかしげる。瞬間、鳴狐さまが抜刀し、わたしに向けて降り下ろした。

キーンと金属がこすれる音がする。わたしは動いていない。眠っていたはずの紫黒が小手で受けていた。

「紫黒、下ろしてください。鳴狐さまは当てようとはしていませんよ」

「…はな…だ？」

「はい、わたしです。もう少し眠らないと明日が辛いですよ」

ゆっくり二人とも手を下ろす。紫黒は崩れるように倒れ、眠りに落ちた。

布団の真ん中に引きずってタオルケットをかけ直す。

「…すまない」

「いえいえ、殺す気がないのはわかっていましたから」

けれど、刃物を向けられる理由もない。これは聞いてもいいことなのだろうか。

「貴女は、我々が初めて顕現したとき、必ず言うだろう」

自身を向けた理由だろうか。そして、彼が言いたいわたしがいつも言うこととは。

「死ぬなど。刀で替がきく道具なのに、折れたら許さないと。なぜ、替のきかない人間の貴女が、自分を道具のように扱う。死の恐怖はないのか」

つまり、自分を蔑ろにするようなやつに刃生を決められたくないと。

確かにわたしは自分の生に対する欲は少ないけれど、死にたがりなわけではない。まだ死ねないとも思っている。

「…言い方が悪かったですね、謝ります。これは育成所で植え付けられた精神です。言い訳ですが。では言い方を変えましょう」

立ち上がり障子を開ける。柱の陰に鯰尾さまが、こちらを見上げて苦笑いをこぼしていた。

「わたしは、あなたがたに殺されたり隠されるのであれば、甘んじて受け入れましょう。けれど、そうさせない審神者にわたしはなるつもりです。わたしはあなたたちと、友達になるために来たんですから」

ですから、と続ける。

「刀解なんてしませんよ？わたしはなにも知りませんからね」

先に釘を打つと、鯰尾さまは静かに笑い、鳴狐さまは面食らったような顔をして、頭を下げた。

10

「おはようございませす」

夜が明け、見張りに立っていてくれた鳴狐さまに声をかける。わたしの後ろには今日の近侍にした鯰尾さまが控えていた。

「紫黒はもう起きてますか？」

すつと指を示された先、庭の池を囲う一番大きな岩の上に立っていた。日とともに寝入り、日とともに起きる習慣が、今でも続いているのだろう。怪我をしているときくらい寝ていてもいいのに。

「紫黒！体はどうですかー！」

少し声を張って呼ぶ。するとこちらに気づいた彼が、怪我人とは思えない身のこなし

で近くに寄ってきた。

貸した清光さまの浴衣では少し大きかったようだ。

「問題ない。ありがとう、縹」

「いいえ。紫黒こそ、荷物をきちんと届けてくれてありがとうございます。でも、次からは自分の身を優先してくださいね」

「うん」

身をかがめる紫黒の頭を撫でる。家族の愛情に飢えているのか、わたしにはよく甘える人だった。

後ろから遠慮がちに声がした。

「主さんの名前って、このかですよ？ハナダって何ですか？」

「わたしの呼び名ですよ。基本的に刀剣には名を告げないことはいいですよね？話している最中に漏れ聞こえてしまえば意味がないので、普段から呼名は別にあるんです。わたしたちは大体、色の名前ですね。紫黒色、縹色、と」

縹はわたしの髪色のことを指してつけられた。紫黒はわたしがその目の色を取って授けた。

「ですがここでは、わたしには必要ありませんから、紫黒もどちらで呼んでもいいですよ」

「わかった。でも、縹は縹だから。そつちも気に入っている」
「わたしもです」

四人連れ立って広間に行くと、すでにほとんど全員が集まっていた。
いないのは夜番だった太郎さまと国俊さまか。

「おはようございませす。朝ごはん食べたらずし話がありますので、すぐに出て行かないでくださいね」
「わかった。んじや、いただきませす」

清光さまの声に続いて、みんなが思い思いに復唱した。

朝から美味しいご飯を食べた。決して豪華ではないけど、最近清光さまの腕が上がったように見える。平野さまもすごいと言っていたし、青江さまや歌仙さままで教えながらだから相当なものだ。吸収力はさすがというか。

「では少し注目。昨日行わなかった集会をしますよ〜」

ある方は食べながら、ある方はお茶を飲みながら、またある方は片付け始めながらこちらを見た。正確には、わたしの隣に座る紫黒に視線が集まる。

「改めて、昨夜はありがとうございました。おかげで無事、大きな怪我もなく助けることができました。その彼が起きることができましたので、皆さま顔を覚えておいてください」

「私は紫黒。この第一三二支部通信役となりました。おかげさまで生き延びることがで

きました。深く御礼を申し上げます。これからよろしくお願いいたします」

深々と頭を下げ、それからすべてを見据えるように顔を上げる。これでここにいる彼らには認識されただろう。

必要なのは彼がこの本丸に顔パスで入れる環境。そうでなければわたしの不在中、ずっと外で待たせることになってしまう。また、今回のようなことがあつたとき、刀剣たちの判断で彼を救い出してもらわないといけない。

彼自身、一人ならば敵対しても逃げられるだろうけど…。

「さて、もう一つのことを話しましょう。昨夜、この紫黒を襲ったものですが、歴史修正主義者であることは間違いないようです。式を飛ばしたところ、3カ所に痕跡が見つかりました。この時空にも来れることがわかった以上、靈力の溜まった本丸を襲うことも考えられます。現在は結界を張っていますが、今後どのような事態になるかもわかりません。そこで、一応の手段を決めておこうと思います」

口に入っていたものを飲み込み、お茶を机に置き、かすかに姿勢を正す。これを自身たちの問題でもあるということを確認してもらいたい。

「まず第一に、自分の身を守ってください。非情と言われるかもしれませんが、目の前に負傷した仲間がいてもです。速攻で逃げてください。仲間を助けるのは、ある程度の安全が確保されてから。また、けして一人では敵に向かわないように。そして、敵が全ていなくなったのを確認してからこの本丸に戻ってきてください。たとえ…」

一度場を見回す。ありえないことではない。言葉にするのはわたしの義務だ。

「本丸がなくなるとも。わたしが死んでいようとも」

ピリツと空気が張り詰めた音がした。肌が痛い。これは、どう解釈すればいい反応なのか。

緊張か殺気か。ただ殺気ならばわたしに向けられた時点で紫黒が動くはず。ならば、これは…。

清光さまが辺りを見回した。数人が頷く。話し手を譲ったようだ。

「あるじ。悪いけど、その命令には従えない。俺は、故意的に従わない」

「何故ですか？これよりの確なすべき行動がありますか？」
「ないね」

青江さまが即答する。確かに感情的になればいくらでも別の案が出てくる。もちろん、死ぬ可能性は高くなるだろうけど。

しかし、と続けたのは誰だったか。

「それは主命以前の問題です、主君。我々は、貴方を守ることが第一の使命です。自決して尊厳が守られるのでしたらそれは主君の判断に従います。しかし、主君を守らずして逃げるなど、そんな命令には従えません」

言い切る平野さまの目に迷いはない。そうであると信じている。

けれどそれは違った。感情論だった。何故なら彼らの第一の使命は歴史修正主義者の進軍を阻止し、歴史の改変を防ぐこと。審神者とは彼らにその力を与えるだけの存在。審神者が変わったからといって、その力になんら影響は出ない。

それを告げようとすると、待ったがかかった。

「君はすぐに否定しようとするけど、言い分はこうかな？『感情的になつては誰も助からない。わたしには替えがあるから』違うかい？」

殆ど思っていたことを言われ、頷く以外の選択肢を捨てさせられる。

歌仙さまは続けた。

「じゃあ、この歌仙兼定という刀は、今何人顕現していると思う」

「…わかりません。一つの本丸に一人とも限りませんし」

「そうだね。つまり、僕たち刀には全く同じ替えがあるんだよ」

「記憶は無くなります。そんなの嫌です」

「うん。僕も、一緒に思い出がない審神者なんて嫌だよ」

言葉に詰まった。

ああ、最初からわたしは感情的だったんだ。あの教育機関では、刀は使い捨ての道具だと教えていた。審神者も使い捨てにはすぎないが、絶対数が少ないから刀を盾にしても生き伸びろと言われた。

わたしはそれが嫌で、刀が生き残る戦略を立てた。

共存という選択肢を、最初からなくしていたのはわたしだけだったんだ。刀が主を守るのは、使命というよりも…

「…本分、でしたね」

わたしの呟きは誰にも届かなかつたらしい。

「わたしが間違っていました。変えましょう」

俯いて続ける。みんなの顔が見れない。みんなの気持ちなんて考えずに言っていた自分に腹がたつ。

「緊急時は、各自、全員が助かる方法を必死で模索し、行動してください。死んだら、わたしが許しません。生きてさえいれば、わたしが何としても助けますから…」

勢い付けて叫んだ。怖くても、顔はあげなければ…!

「絶対、わたしの元に帰って来てください!!」

目を開ける。これが夢でなければ、わたしは笑顔のみんなに囲まれていた。

第2章

平野さまと秋田さまとお出かけ

紫黒は政府の元へ帰った。注文品を運び終えたのだ、報告へ戻る必要がある。ただ、定期的に支給品や注文品を届けに来るから、またすぐに会えるだろう。とりあえず、食料は確保できた。

*** **

そういえば帰り際、何故殺気に対して動かなかったのかと聞いたら即答された。

「自業自得。あれは、標が悪い」

「…紫黒、成長しましたね」

「さすがに、ね」

嫌味を笑顔で受け流され、わたしはもうなにも言わずに見送ったのだけど。

あの事件以来、すでに2日が経過している。増えた仲間は三人。三条の今剣さま、左文字の小夜さま、虎徹の蜂須賀さまだ。

短刀が二振りも増えて一気に賑やかになった。実際は、今剣さまだけでも賑やかなの
だけだ。

「じゃあ、万屋に行ってきますよ」

両手に刀、なんて物騒だけど、一見すれば仲良く手をつないだ三人が買い物に行くだけだ。

今日の近侍である鳴狐さまに手を振られ、私たちは門の外に出た。

「さ、行きましょう、秋田さま、平野さま」

「はい！」

「楽しみです」

実は給料制にすると決めてから、昨日が初めての支給日だった。

彼らは、前々から最初の使い道を決めていたらしい。

数人はすでに各々で出かけている。

「わたしが一緒によかったんですか？」

にこにこ笑顔の二人に問う。ああ、最初から思っていたけど、この二人はなんて優秀なんだろう。近侍の仕事はきっちりこなし、出陣も内番も手を抜かない。ついでにわた

しを癒してもくれる。

そんな二人たつてのお願いを、無下にできるはずもなく、今日は出陣を夕方のみとしたのだ。

「だって、主君とお出かけがしたかつたんです。平野と前から話してて」

「主君はいつも頑張つていらつしやるので、たまには休んでいただこうと思ひまして」

ぎゅーつと二人の頭を抱え込む。なんていい子。なんて可愛いもの。

「く、苦しいですよー」

「主君?」

照れた二人も可愛い。この子たちがいたら休まなくても癒される。確信しました。

「あ、そうでした。ここでは主君と呼ばないようお願いします。街でそんなように呼ばれたら、変に目立つちやいますからね」

「…ではなんとお呼びすればよろしいですか?」

「名前でいいですよ？」

「このか、さま？」

「えへへ。はい」

えへへと三人で笑い合い、繋ぐ手を軽く振った。

このかさまだって。呼び名や呼び捨てにされることはあれど、敬称をつけて呼ばれることなどほとんどない。主君や主とはまた別。わたしを敬ってくれるのは彼らくらいだ。

主とは、役得なのかもしれない。

「ところで、どこか行きたいところは決まっていますか？」

「甘味処と、小物売りと、あと、このかさまが行きたいところがありましたら」

「荷物お持ちします！」

この子たちに持たせるくらいならもつと大きな人たちを連れてくるわ、とは言わずに、大丈夫ですと返しておいた。

「甘味処と言いましても、なにか食べたいのつてありますか？洋菓子がよければ時空でも飛びますよ〜！」

「実は、よくわかっていないんです。まだ食べたことがないものが多いので、何が美味しいのか…」

「だから、このかさまの好きなものもいいです。何が好きですか？」

わたしの好物はあなたがたですっ！とは言えるわけでもなく。出そうになった涎を飲み込んで居住まいを正す。

あつ、顔が緩む。あー歪んじゃう。

「ええつと、じゃあ、あつ、パフエなんてどうですか？」

「ばあふえ？」

「うぐつ、じゆ、重傷です…」

「えつ、このかさま!?!」

ちよつと尋常じゃない心臓の動きに体が耐えかねたのか、くらつと来た。暑い夏のせいですと言いつつ、できないくらいには、今日は涼しい。

「…いいいえ、なんでもないのですよ。それよりパフエです。お二人とも甘いものは好きでしたよね？」

「はい…あの、本当に大丈夫ですか？」

心配そうに隣に寄り添ってくれる秋田さまに笑顔を向ける。

この時空、都合のいいことに路地に幾つかの抜け道がある。時空の中で生きるものは決して近寄らないし気づかない、二つの空間をつなぐ道。

一つはここ、古き良き日本を象徴したような茶屋や着物がよく似合いそうな通りのある街。

もう一つのこれから行く場所は、2205年現在に相応しい、ビルの立ち並ぶ近未来型都市とでもいうような街。正直、こちらに来れば、お金さえあればなんだって揃うのだ。

適当な細い道を見つけて入り、抜け道を探す。見つけて大通りの影になるところで札で境界を張る。外へ出る時の必需品として持せていたパーカーを取り出して、内番服の上から着せる。パーカーに短パンならどこだって通じるこの容姿が羨ましい。

わたしは諦めて着物のままだ。まあ、女性の着物は物珍しがられるだけだから、うん。

知り合いもいないしいいでしょう。

*** **

現代でチエーン展開している有名な喫茶店に入って、とりあえずメニューを開くと、難しそうな顔をした平野さまが顔を上げた。

「あの…主君。これは食べ物なのですか？キラキラして、まるで作り物のようです」

「ふふ。論より証拠ですね、頼んでみましょう。すみません、注文を」

適当に頼んだ三種類のパフェ。ついでに紅茶も頼んで一息つく。

すぐを持ってこられたパフェを見て、二人は顔を見合わせた。

ちなみに、今回頼んだのはチョコと抹茶とフルーツの三種類だ。

「どうです？初めて見て」

「く、崩れそうです。これなんですか？」

「チョコレートと言います。西洋の菓子ですよ」

「果実がこんなになんだか、食べるのがもったいないです」

パフェに負けないくらいキラキラした目で見つめる二人は、スプーンを手に持ったまましばらく眺めていた。

うーん、こうしておいてあげたいのは山々なのですが。

「食べないと溶けてしまいますよ。その方がもったいないでしょう？」

「あっはい！いただきますっ」

「いただきますっ！」

慌てたように居住まいを正し、両手を合わせる。それから恐る恐るというようにスプーンを突き刺した。

一口すくつて口に運ぶ。すぐにすごくいい笑顔になった。

よかった。お気に召したようだ。桜が舞ってる。

この桜は彼らの体の疲労を表しているらしい。わたしにしか見えないうりだけ、無

理させることがなくなるから正直助かる。

調子のいい時はこのように桜が舞い、悪い時は霊力の波が安定しない。戦場に出してはいけないという警告だ。

「どうですか？」

「とつても美味しいです！」

「今度、本丸で作ってみんなにも食べさせてあげたいです」

これだから、この方々みんな、大好きなんだ。

小夜さまと夢見る話

パフエを堪能して、その後簪をプレゼントされた。平野さまと秋田さまは普段のお礼だというけれど、礼をしたいのはわたしの方だ。

そしてその夕方から翌日の今日まで、わたしの調子も良くて連戦を続けていた。気持的にはまだいけるのだけど、そろそろ夜になってしまう。

「ちよつと清光さま！調子いいですね〜っ」

「ね！ね！褒めて褒めて！」

きやーつと両手を握り合って二人でじゃれ合う。桜を吹雪かせながら誉を取れるだけ取ってきた清光さま。ついでに片っ端から刀をもぎ取ってきてくれた。その上鍛刀でもよい結果を出してくれた。

それというのも、粟田口の刀が一気に4振りも揃ったのだ。

「乱さまと骨喰さまは戦で、葉研さまと厚さまは鍛刀で。ふふっ、これでまた賑やかにな

りますね〜」

挨拶を終えて四人に本丸を案内する。それから一通りの説明を終えて、今日の風呂は、粟田口の貸切の時間を設けてみた。

秋田さまも平野さまもとても嬉しそうに、自分たちが色々教えてあげるんだと張り切っていた。鯨尾さまも一緒にいたけど、変なことを教えないよう釘を刺したほうがよかつただろうか。

「あ、そうだ大将。ここに書庫はあるか？」

「あら、薬研さまは本がお好きですか？なら、お風呂上がりにわたしの部屋にきてください。案内しますよ〜」

わかったと風呂へ向かう薬研さまに、ひらひらと手を振る。本を読みたいだなんて、珍しい。少し片しておいたほうがいいかと思いつながら、後ろを振り返った。

今日の近侍の小夜さまがじつと黙っている。

「書庫、気になりますか？」

「…僕はこの敷地を全部みたりもりだけど、書庫なんて見なかった」
「まあ、普段は隠してありますからね」

知り尽くしたと思っていた場所に知らない場所があったとなると、居心地が悪いんだろう。

確かに鍵をかけているとはいえ、荒らされたり遊びに使われたりするのは困るから隠してはいる。その点、小夜さまなら平気だろう。まあきつとみんな大丈夫なんだろうけど、場所が場所だけに少し抵抗がある。それに聞かれていないことを言わなくてもいいと思っている。

ただ、それら全部、窮屈な思いをさせる原因となるならば隠し通す必要はないとも思っている。

「お掃除手伝ってくれますか？」

「…わかった」

領くのを見て、連れ立って歩き出す。

向かう先は、わたしの部屋だ。

「…あなたの部屋に、入ってもいいの？」

「ええ。というか、お仕事以外でしたらいつでも来ていいですよ。さすがに着替え中は困りますけどね」

「！ ちゃ、ちゃんと聞いてから入るね」

「はい、そうしてくれると助かります」

障子を開ければ普段通りの殺風景な自室。もともと物も少なかったし、身綺麗にするための服も飾りも最小限しか持っていない。もちろん、部屋を飾る物なんて皆無だ。

「実は、この下にあるんですよ」

「書庫が？」

「はい。ちよつと待つてくださいいね」

そう言って部屋の右の壁側、本棚の前に一枚だけ張つてある、正方形の畳をはがした。これはただ乗っているだけ。下には、冷えた鉄板の蓋がはまっている。

首に掛けておいた鍵を取り出し、三つのうち一つを選び取り、鉄板の蓋についている

南京錠を開けた。

「よっしょ、と。わたし先におりますね。はしごですからお気をつけて」

袴のままではおりづらい。普段は誰もこないのをいいことに極端な薄着で入ってるからなあ。キャミワンピースとかもう捨てられない。

充滿した本の匂いが鼻腔をつつく。成績優秀者の特権を使ってわがままを言った甲斐があつた。

「…涼しいね」

「ええ。空調管理も完璧ですから。本は意外とデリケートですからね」

「沢山…こんなにもあるとは思ひもしなかったよ」

たしかに、これだけのスペースが地下にあるとは思わないだろう。蔵書を3000冊まで保管できる。まだ三分の二しか埋まっていないけど。

徐々に買い集めるつもりだから、それはそれで楽しみだ。

「入り口で分かったでしょうが、短刀のみなさまくらいしか入れないんです。出入り口が狭くて。それに、あまり本にも興味がない様子でしたから、伝えていませんでした。すいません」

「いいよ。確かに、遊び場にされたら大変そうだし、普段は僕も入りそうにないし。もう知ったから、大丈夫」

「ありがとうございます。では、本から埃を落としておいてもらえますか？念のために畳を戻してきますから」

わかったとわたしからハタキを受け取る。

はしごを登って、畳もぬるるように重い蓋を閉じた。こうしてしまえば、なかなかに見つかりにくくなる。

自身も乾いた雑巾で空いた棚を拭いていく。そうだ、今度埃取りシートを買いおう。

「小夜さま、大体でいいですよ。なんとなくできたら、床を履いてください」
「うん」

それぞれ掃除を続ける。会話がない、というよりは、ただ静かな時間を楽しんでいる

ようにも見える小夜さまは、見た目相応に見えた。普段の憎悪にまみれた出で立ちも、鳴りを潜めてしまえばただの短刀に変わらない。

「小夜さま」

「なに？」

「復讐って、いつ終わるんですか？」

小夜さまの動きが止まったのがわかった。返事はない。唐突すぎただろうか。わたしの方が手を動かし続けていると、暫くして小夜さまも掃除を再開した。

「あなたも、誰かに復讐を望むの？」

「いいえ。ただ、終わりがあるのなら、終わらせていただきたいな」と

「…人間は、自分勝手だね」

呟いて、それから失敗した、という顔をした。ぱつとこちらに向けられた顔に、焦りが見える。言葉が過ぎたと思ったのか。

わたしは気にせず、言葉を返す。

「それが人間ですから」

面食らったような顔をして、わたしを見つめてきた。

そう、人間なんてみんな自分勝手なものだ。彼らも人の形を得て、人間と同じように過ぐす。自らの意志を持ち、行動するようになった時点で、自分勝手からは逃れられないのだ。

「わたし、夢があるんです」

「…夢？」

「はい。いつかあなた方が全員揃ったとき、みんなに認められる一人であろうと。笑って過ぐせる本丸を作ろうと。だから小夜さま、気の済むまで復讐してください。死ぬまで終わらないのなら、それでも構いません。その代わり、小夜さまの家はここです。帰ってきて、いつか、わたしに笑顔を見せてくださいね」

はいと掃除の終わったハタキを受け取る。

小夜さまは困った顔をして立ち尽くしていた。

「もう…復讐は終わっているのに…」

「小夜さま？」

「いや、なんでもない。…ねえ、僕も夢を見てもいいと思う？」

「当たり前じゃないですか。なにか、したいことが見つかったんですか？」

箒を片しながら、けれど嬉しくて声が弾む。

復讐ばかり望むのではつまらない。せつかく人の身を手に入れたのだから、多少は楽しんでバチは当たらないでしょう？

「…ひみつ」

「あら…ふ…ふつ。じゃあ、いつか叶ったら、わたしにも教えてくださいね」

頬をうつすらと赤く染めて指を口元に当てた小夜さまは、多分今一番の笑顔だったと思う。

「あ、薬研さまが来たようですよ。一度あがりましょうか」

「そうだね」

乱さまと風邪

数日間、負け戦が続いていた。正確には、敵の本陣に辿り着けぬまま一週間が過ぎってしまった。しかも、新しい仲間も見つかっていない。

今日こそは、と二重の意味で意気込む。このままでは良い戦績が報告できない。そして、明後日からは現世へ通わなければならないのだ。

夏期休業の始まりから本丸に来て、もう二学期が明後日からだというのだから、早いものだ。

「さくあ、気張りますよ〜！」

誰にともなく呟いて、さつさと着替えを済ませてしまう。あら、なんだか少し、いつもよりも服が重いような？

きつと気のせいだと思いついて外に出る。今朝は少し寒いくらいに気温が下がっているなあ。もう9月になるのだし、秋に向けて空模様も変わってきているのかもしれない。

普段通りに夜番の後半を守っていた方、今日は清光さまに声をかけ、内番の終了を告げる。眠そうに部屋に帰っていったから、多分今日も昼までは起きてこないだろう。

その後厨へ行き、全員分の朝食の用意を手伝う。歌仙さまと平野さまが昨日の夜から仕込んでいた出汁のいい香りがした。

食器を各盆の上に並べ、長机の数カ所にお吸い物の鍋とご飯を均した桶を置き、焼き鮭と箸を配る。そうしている間に、ばらばらと起きてきたみんなが集まり始めた。

「全員揃いましたか〜？」

はいとどこからかいい返事がくる。

これでいないのは今寝ているであろう夜番だった清光さまと蜂須賀さまだけになった。

「席についてくださいね。ご飯が冷めてしまいますよ〜」

「ボクこのかちやんのとーなり！」

「あーっ、乱ずるい。俺も主さんの隣取った！」

この一週間ですっかり慣れたみんなが、わたしを取り囲む。とつても嬉しいし光栄なことなのだけど、歌仙さまの早くしろという視線が痛いので早々に着席していただく。

「じゃあ、いただきます」

「いただきますーす」

号令とともに二通りに分かれる彼ら。

お吸い物やご飯などをみんなに取り分けてくれる数人。その他はすぐに箸を持って食べ始める。その分かれ方が決まってきた、なんだか面白いことになっていた。

そんな微笑ましい光景を見ながら、もぐもぐと口を動かす。いつでも炊きたてのご飯は美味しい。美味しいのだけ。

どうにも動きが悪くて箸が止まってしまった。まだ善の三分の一も食べていない。

「…このかちゃん、食欲ないの？」

「え？あ、いえ…ちよつと、多分寝不足なだけですよ〜」

「寝不足は美容の大敵だよ！女の子なんだから！」

つんつんと頬をつついてくる。しながら、うん？と首をかしげた。

「ちよつと動かないだよ」

「へ？」

わたしの間の抜けた声を無視して手の甲を頬に添える。それから自分の額をわたしのそれにくつつけてきた。

「ちよつと厚！そこで船漕いでるの叩き起こして！」

「あの、乱さま？」

「あー、どうした乱」

「このこ体が熱すぎるよ。病氣じゃない？とりあえず寝かせてくるから」

急展開に頭が追いつかない。わたしを寝かせる？なんで。寝不足なんていつもよりほんのちよつと短かつただけ。

急遽寝なければいけないなんてことはない。

「ほら、行くよ。このかちゃん立てる？」

「立てますけど、でも、だって、寝ません。今日こそは敵の本陣見つけるんです。寝てる暇なんてないです〜っ」

「だめ。今日はお休みだよ。今日の近侍って秋田だったよね。あとよろしく〜」
「きやあつ」

ひよいとわたしを持ち上げる。わたしと殆ど変わらない身長なのに、何事もないかのように横抱きされてしまった。

そして驚きのあまり反抗するタイミングを逃してしまった。

「えっ、あつ、やだ！下ろしてください乱さま！」

「暴れるとちゅーしちゃうよ？」

「んなっ」

思わぬ反撃に言葉を失う。誰だこんなこと教えたのは。

にこーつと女の子のように笑う乱さまは、有無を言わさずわたしの部屋へと足を向けた。

あつけにとられていたみんなも、考えても仕方がないと思ったのか歌仙さまが声をかけて食事を再開していた。

なんてこと、みんな素晴らしい行動力じゃない。もうわたしがいなくても平気なのね

「はい、おっじゃまっしまーす」

スパアンと勢いよく障子が開く。手を離れたわけではないから、足を使ったのだから。片足でわたしの全体重を支えてしまうなんて、やっぱり男の子だなあと思う。

「乱、はしたねえぞ」

あとから追いついた薬研さまが布団を敷く。

それからはなすがままに、着替えを促され寝転がらされる。ひんやりとしたタオルで頭を冷やされながら、ピピピという無機質な音を聞いていた。

「38. 1、完璧に熱。風邪というやつだな。薬はこれ、一応確認してくれ。飯は少し食べていたようだから薬を飲んでも平気だろう。じゃ、俺たちは内番があるから、乱、あとは頼んだ。なんかあつたら呼んでくれ」

「はい」

二人のやりとりに、どうやら自分の体調は思ったよりも悪いのだとやっと思自覚する。迷惑をかけてしまった。

掛け布団で顔を隠すようにすると、首の後ろに手を回されて、上半身を起こされた。

「はい、お薬。自分で飲める?」

「…はい。すいません、ご迷惑を」

「迷惑? うん、そうかもね」

率直な返事に正直にうなだれる。わかっていたことだけれど、自分以外に言われるとこう、堪えるものがある。

「ふふつ、ごめんね。でも、看病するのが迷惑って言ってるんじゃないよ？倒れられたら困っちゃうから、体調悪い時はちゃんと休んで欲しいの。ボクたちの大事な主さまなんだから。わかってくれる？」

「は、はい」

「よし、いいこ。ま、今日は自分で気づいてなかったみたいだし許してあげる」

「わしゃわしゃと頭を撫でられる。結っていないものだから、いつも以上にぐしゃぐしゃになった。」

薬を水で飲み込んで、再び寝転ぶ。現世の市販の薬だった。それから上からふんわりと掛布を乗せられた。

「なにかして欲しいことある？」

その質問に、反射的にないと答えそうになった。そろそろ誰かに頼ることを覚えよ

う。その必要性は、身にしてみていた。

それに、友達だからわがままも言つて欲しいと清光さまに言われたし…

「あの、じゃあ、寝るまで一緒にいてくれますか？」

しどろもどろ、視線を彷徨わせながら聞く。キョトンとした顔の乱さまがわたしの顔を覗き込んでいた。

「…やっぱり、わがままですよね…」

「…あははっ、こんな可愛いお願い、わがままのうちに入らないよ」

また、今度はそつと撫でられて、それから掛布の上に置いていた手を取られた。ちよつと冷えた、けれど温かい体温を感じる手がわたしのそれを包み、握る。

「大丈夫、今日はずつとここに居てあげるから、安心して眠つてね、お姫様」

なあに、それ…。口を開く前に、この温かな空間に飲み込まれ、微睡みの中に落ちて

い
つ
た。
。

骨喰さまと初めての鍊結

無事学校が始まる前に体調は改善し、久しぶりに学校へきた。審神者業とは全く違う、あの教育機関とも違う、和氣藹々とした普通の学校。少し話のできるクラスメイトくらいはいる。とはいえ、今日は始業式とホームルームだけなので、何事もなく帰路に着いた。もちろん、政府の車でだ。

昨夜は前々から言っていたこととはいえ、朝から数時間わたしが不在ということになり、ちよつとした混乱が生じていた。

ただ午前の出陣がなく、内番だけになるだけなのに。

もういつそその状況を突然作ってしまったと、前日に今日の近侍である骨喰さまに色々任せ、朝早くに出てきてしまったから、顔をあわせるのは昨夜ぶりだ。みんなはどんな反応をするだろうか。

クスと笑いをこぼしそうになるが、政府の人間の前だ。表情を普段の愛想笑いで誤魔化する。

「では、これで失礼いたします」

「ありがとうございました」

運転手と挨拶を交わし、わたしの本丸へとつながるゲートをくぐる。ふわふわとした感覚の中、見覚えのある木の門が見えた。

これは、本丸の門だ。

両手で門の左側を押すと、足が地に着き、いつも眺めている庭が見えた。

「…あ、お、お帰りなさい！主帰ってきたー！」

門から玄関までの道を箒で掃いていた清光さまが、溜めた落ち葉を蹴散らしながら走り寄ってくる。後ろですごい目で睨んでいる正国さまは…見なかったことにしよう。

「ただいま帰りました。えーと」

「つて、あの、あるじ、その格好…」

「…？あ、そういえば洋装を見せるのは初めてでしたっけ。これは学校の制服で、セーラー服といいます」

ちよいとカバンを持っていない方の手でスカート裾をつまんで見せる。現在本丸にいる半数は洋装だから、そんなに物珍しいものでもないと思うのだけど。

「似合いませんか〜?」

「似合うってか、それ、スカート短くない?! 足ほとんど出てるよ! 腕も、髪型違うから首も、うわわ、こんな男所帯でそんな格好しちやだめ!」

怒られた。もう、というかずつと暑かったから、これを機に本丸でも普段は洋装でいようかと思ったのに。でも、露出がだめというならまだ余地はあるのかな。

「おい加州…そろそろ戻って散らかしたモンなんとかしやがれ!」

「ぎやつ、正国?! うわつ、なんでこんなに散らかってんの!」

あなたが蹴散らしたのです、とは言わずに、あとは兩人にお任せする。玄関で靴を脱ぎ、部屋へ戻る間に畑を見たけど、水撒きはもう終わって、草むしりをしてるところのようだった。やつぱり、わたしがいなくともなんとかなっていている。

この分なら、これから通うと言つてもなんとかしてくれるかな〜? その前に黙つてい

たことを何か言われそうだけど。

「このか」

「…は〜い？」

骨喰さまは、多分無意識で言霊に霊力を乗せている。縛りはしないけれど、それでもなにかピリッとくるものがある。

「言われた通り、書類の整理と指示出しはしておいた。加州清光があんたの不在を喚いていたが、それ以外は特に問題なかった。それから今日の出陣だが、兄弟が歌仙兼定を怒らせてバツ掃除をしているから誰か代わりを決めてくれ」

「あらあら、鯰尾さまつたら。じゃあ、骨喰さま出ますか〜？」
「構わない」

任せた仕事はほぼ完璧、指示出しも的確、報告にも無駄がなく、ほかと干渉しすぎず客観的に必要事項だけをまとめている。結果、わたしは大分楽なのだけど…

「ほかに何かすることはあるか？」

「そうですね。じゃあ、ついてきてください」

そういうえばまだ服を着替えていないけど、まあいいか。別に、巫女装束だからといってわたしの霊力が上がるわけでもないし。

骨喰さまを連れて向かう先は倉庫。主に、整理前の一時保管場所になっている。資材は鍛刀所に併設してある倉庫に保管している。

「倉庫？ここは入ったことがないな」

「ええ、普段は入れないようにしてありますから」

胸元に忍ばせている鍵の、三つのうちの二つ目を鍵穴に差し込む。開けて入ると、結界が解け、霊力の渦がわたしたちを取り囲んだ。

「入ってください。扉を閉めますから」

「っ…」

顔をしかめて踏み込んでくる。どうやら気が大きすぎたようだ。

完全に体が入ったのを確認して扉を閉め、開かないように封をする。一瞬とはいえ、その間に邪魔が入るとどうなることか。

「ハハハ。」

「保管場所です」

溜まっている霊力をやりくりしながら答える。

「戦に出たら、刀を拾ってくるでしょう。鍛刀して新しい刀ができるでしょう。そうした刀の中で、すでに本丸にいる刀と同じだった場合にここに保管するんです」

そして、すでに許容量の限界を迎えていた。

一振りずつ傷がつかないよう、布で包んで引き出しにしまう。

「わたしの霊力の足りない分は、ここにある刀からお借りしていました。結果も、ここにある刀と、あなた方の余らせている霊力を使っています。けれど、ついに引き出しが全

て埋まってしまいました。ですから、錬結をしようと思います」

一拍置く。骨喰さまは一言も発さない。

「最初を骨喰さまにしようと思ったことに理由はありません。失敗することもありません。仕組みとしては、あなたにこちらの刀の能力分を上乗せするだけです。今なら辞退することもできますが、これは誰もが通る道です。力を欲するのであれば、お受けください」

出来事は一瞬だ。終わってしまえば自分の能力値が上がるだけ。けれど、人の形を持ち、心情というものに惑わされると、形をもらえぬ刀に同情してしまいかねない。

「ひとつ聞くが、」

「は、」

四方を囲む柵を見回しながら、やっと口を開いた。

「ここにある刀を顕現することはあり得ないのか？」

「そうですね、すでに在る方が折れない限りは。同じ刀の同時顕現は混乱と精神崩壊の原因となりますから」

「ならやってくれ」

唐突にこちらを見つめる目に射抜かれ、動きが鈍くなる。

「俺たちは折れない。ただひとつのあんたとの約束だ。それに、戦えないのにある刀ほど惨めなものはないだろう。俺の力にして、一緒に戦う」

普段、常に冷静で執着がなく、ほかと関わらないようにしている骨喰さまが。客観的に、必要なことだけをこなしている骨喰さまが。ほかを思いやる一面を見せてくれた。

よかった、ちゃんと優しい。これなら人の形を持っていても安心できる。わたしが顕現に失敗したのかとも思っていたから、ちゃんと感情を見られてほっとした。

「わかりました。では、」

選び取った五振りを持ち支えてもらう。

ぱん、と一つ手を打って、刀の魂と呼ばれるそれを、骨喰さまの依り代に押し込んだ。形を失った刀たちが、光となって消えてゆく。

「終わりました。実感はないかもしれませんが、少し早く動けるようになったと思います」

「そうか。それから一つ、あの辺りから、多分まだこの本丸に顕現していない刀の靈力を感ずる」

……………ん？

初めまして前田さま

裸足のまま玄関から駆け出して、石畳を掃いている清光さまの元へ駆け寄る。途中転びそうになりながら、ぶつかるようにして飛びついた。

「あるじ?どしたの」

「ああああの清光さま!?お尋ねしますが、あなた方の意識ってどこからあるんですか!」

「え?えーつと、俺は確か…あ、あの腹立つ狐に名前を呼ばれたときかな?」

「つまり顕現してからですな?」

「でも沖田くんに握られてたときの記憶もあるしなあ…」

血の気が引くのがわかる。抱えていたそれを落としそうになって、慌てて抱きしめ直した。

どうしよう、今焦っても仕方がないけど。でも、だって、

「…わたし、ちょっと切腹してきます。誰か短刀、あと介錯…あ、いつそ包丁で…」

「ちよつとあるじストップ！誰かあるじ止めてー!!」

羽交い締めにあいながら取り押さえられ、今は自室に正座させられている。説明はすでに骨喰さまが終えている。

「つまり、手違いで新しいお仲間さんが保管庫に入っていたと。うん、保管庫なんてのがあったことも俺たちの二振り目以降がそういう風に使われていたこともちよつと言いたいことがあるけど、とりあえず顕現して事情を説明するのがいいんじゃない？」

「あやっ、あやまつ」

「何これ可愛い」

ぎゅーつと頭を抱え込まれて息が詰まる。暫くされるがままになって、ハツと胸を押し距離を取った。

「違います！謝ります、から、清光さま今から歓迎の用意をしてください！出陣は全部無しです！」

「あ、そうなの」

「もう骨喰さまに通達をお願いしています。だから、夕飯は食材何使つてもいいので豪華にしてください！歌仙さまと青江さまと、それから平野さまを手伝いに向かわせませ。今は2時だから…5時半には全ての用意を終えてください。指揮は清光さまと骨喰さまに任せませ」

「わかったー。じゃあ正国あとお願いね」

残りの掃除を半ば押し付ける形で清光さまが部屋を出て行く。正国さまに睨まれるのはわたし。ああ、ごめんなさい、今回は全部わたしのミスです〜っ。

「えっと、正国さまも、今日は適当に袋に詰めていただければいいので、終えてから歓迎の準備を手伝いに行つてください〜」

「あー、わかった。お前はどうぞすんだよ」

「道場で顕現して、準備がてきるまで謝つて、それから案内してきます…ゆ、許していた

だければ」

「それ、栗田口だろ？兄貴たちがこええかもな」

脅すように凄まれて、一瞬たじろぐ。とりあえず起こしてみますとこの場を任せ、道場へ走った。

*** **

「前田藤四郎と申します。末長くお仕えます」

「初めまして、この本丸を任されております審神者のこのかと申します。そして本当に申し訳ありませんでした！」

はじめて清光さまに会った時よりも深く深く頭を下げ、相手の、前田さまの様子を伺った。

人間の体を得て、器に靈力をなじませるのが最初。それから五感を得て周囲の状況を

探る。

彼の最初に得た情報は、わたしの謝罪になってしまった。

「あ、あなたが主君ですよね？」

「はい、現在この本丸にて人間は、そしてあなた方を顕現できるのはわたしだけです」
「顔をあげてください」

言われるままに体を起こす。片膝をついた前田さまが、優しく微笑んでいた。

「主君の謝罪の理由は、なんとなく聞こえていました。ですが、その必要はありません」
「……」

「あの場所にあった刀は、二振り目以降だったのでしよう。だから意識は活動している一振り目にあつたようですが、僕は臆げながらも意識がありましたから覚えていきます。あなたがどれだけ大切に保管していたか。どれだけ尽力して意識をまとめていたか。どれだけ緻密に計算し回復できる程度にしか霊力を持って行かなかったか。全部わかっていきます。僕は、この本丸に来て良かった。手違いでも、あの保管庫に入って実態を中からわかることができて良かった。そう思っています」

立てていた膝を下げ、正座の形をとる。両手を膝に添え、なんとも美しい姿勢をとった。

微笑む顔を引き締めて、すつと息を吸うのがわかった。

「僕は藤四郎の眷属の末席に座するものです。大きな武勲はありませんが、あなたに比べると決めました。ここで、あなたのための刀となりましょう」

「ありがとうございます…」

安心して力が抜ける。実際、座つたまま腰が抜けていた。ほとんど殺される覚悟をしていたから、というのものもある。けれどそれ以上に、わたしのしていたことを、認めてくれたことに驚いていた。

二振り目以降だったからと、あんな扱いをしていいはずがないけれど、あれ以上の案が思いつかなかったのだ。

「主君、僕はこれからどうしたら良いでしょうか。ご命令はございますか？」

「あ、はい、あの。ちよつと待ってください、腰を抜かしちゃって」

「大丈夫ですか？」

そつと手と腰を支えてくれる。びっくりするほど簡単に座り直せてしまった。きちんと座つてしまえば、あとは回復するのを待てばいい。

「ありがとうございます。では、命令ではありませんが、約束をしてください」
「はい、なんなりと」

「決して死なないでください。自分を物だと思わないでください。生に執着し、自分を粗末に扱わず、必ずこの本丸に帰ってきてください」

「はい、わかりました。お約束いたします」

素直な物言いに、他の粟田口兄弟を思い起こす。

みんなが素直で、言いたいことはすぐに口にした。みんながそういう性格なのは、誰の影響なのか。

「それから、お願いがあります」

「なんででしょうか」

「わたしは基本、命令はしません。自由に過ごしてくださって構いません。出陣などの仕事はしてもらわないといけません、それも絶対ではありません。わたしはあなた方と、厚かましいようですが、対等でいたいのです。ですから、わたしと友達になつてくれませんか？」

意表を突かれたかのような顔をして、わたしを見た。この願いには、みんな何かしら言つてくる。とくに正国さまなんかは、意味がわからないと言いながら承諾していた。

「お友達、ですか？それは、対等を示す関係なのですか？」

「わたしはそういう意味で使っています。友達同士なら、気兼ねなく接することもできるでしょう」

「…それはいいですね。じゃあ、ここにいる刀とあなたは、みんなお友達なのですか？」
「はい。気負うことのない友達で、一緒に食卓を囲む家族です」

最近はそのなりつつある。嬉しいことだ。もっと言いたいことを言える、変な我慢をしなくて済む本丸にしたいと思っている。

「そうですか。では、お友達として、家族として、僕をその輪の中に入れてください。これは、僕のお願いです」

こういう返しは初めてだった。今度はこちらが意表を突かれ、言葉に困る。けれどすぐ微笑つて、前田さまの手を取った。

「よろこんで」

*** **

このあと前田さまは時間の許す限り、本丸の間取りと規則を覚え、準備の整った広間で歓迎を受けた。初めての盛大な催しに大食らいたちが食いつき、食事は面白おかしい物となった。

今回の食費と酒代はわたしが持つこととして、仕方がないから新たに発注をお願いしたのだった。

厚さまとお昼寝

前田さまの歓迎会はつづがなく終わった。

翌日には新たに二振りの仲間を迎え、ちよつとした騒ぎはあつたものの、それぞれ一夜明け、すつきりした顔で朝食の席に並んでいる。宗三左文字、並びに大俱利伽羅とは、これからまだ問題が出てきそうな2人がいつぺんに来たものだ。

それから午前で学校から帰宅し、車の中で取つた昼食をならしてから召集をかけた。

「出陣しますよ〜」

わたしの本丸では、近侍を含む第一部隊の出陣はない。ローテーションで組んでいるが、第一部隊には審神者不在の本丸を任せている。いざという時には、近侍主導で第一部隊を中心に対処するようお願い含めてある。だから、近侍選びは毎回慎重に行つていた。

「第二部隊の皆さんは準備できていますか〜？ 出来次第遠征への門を開きますよ〜」

「はい、準備おつけーですよ！馬糞爆弾も……」

「それは捨てていけ、兄弟」

鯨尾さまを隊長にするときはいつもハラハラする。骨喰さまを同じ部隊に組み込むことが多いのはそのせいか。

ただ成果はきちんと上げてくるから、その点では信用しているのだ。

「ではいつてらっしやい。お気をつけて」

「いつてきますー！」

虹色の膜の中を通過して第二部隊が消えていく。それを見送ってから、後ろに控える第三部隊を見やった。

「準備は整いましたか？」

「もういつ出発しても平気だよー、あるじ」

笑顔で手を振る清光さまに頷いて、門から出る行き先を変更する。これで遠征先では

なく、出陣先に行ける。

先頭を切るのは青江さま。それにみんなが続いていき、わたしは最後に近侍である歌仙さまを振り返った。

「では、行ってきます。よろしくお願いしますね」

「うん、無事を祈っているよ」

自分も虹色の膜に身を投じた。

*** **

今日の出陣予定は三回。第二部隊から第四部隊までが遠征も含め一度ずつ出陣する予定だ。これは、学校に通うようになってからの主なメニュー。休日や長期休みには倍の出陣をしていたのだから、楽になったものだ。

まあわたしは、行き帰りの門を開くのと手入れしか仕事がないので霊力も使わない

し、待つばかりなのだけど。

「ーあるじごめん！すぐに帰還しよう！」

「え、早いお帰り、で……」

息を飲む。それ以上の声が出ない。いつもは中傷になるとすぐに帰っていたから、ここまで酷いのは初めて見たのだ。

傷だらけ、血だらけ。

初めて清光さまが単騎出陣したときよりも、もつと酷い。出陣してからの時間的に考えて、一撃で瀕死状態に追い込まれたのだろう。

厚さまの四肢はぐったりとして、太郎さまに抱えられるままとなっていた。

「……帰還します。みなさんゲートへ」

すぐに門を開いて順に返していく。全員戻ったのと忘れ物がないのを確認してわたしも本丸へ帰還した。

厚さまは手入れ部屋へ送られ、かなり長い間手入れを受けていた。わたしは全てを職人に任せ、第四部隊を連れて次の戦場へと向かう。今日のノルマを達成して戻ったときには一応手入れが終わっていた。

「わたしの監督不行き届きです。同室の薬研さまから聞きました、最近調子が悪そうだと。きちんと体調の把握をできなかつたわたしに不備があります。申し訳ありませんでした」

もう土下座が板についてきたような気がする。ここにきてもう何度目か。誠意が薄れてしまいそうだ。

けれど謝らにはいられない。全員の調子を把握できず無理をさせて、なにが主だ。きちんと全員に確認を取るべきだった。遠征に向かった鯨尾さまたちは大丈夫だろうか。

「……ごめんな、大将。俺がちゃんとしてたら進軍できたのに」

「いいえ。責任者はわたしです。あなたの体調に気づかなかつたわたしの責任です。これはまぎれもない事実です。が……」

下唇を噛む。わたしがまだ頼れない小娘だと思われることに腹が立った。努力不足が目に見えた結果の言葉だ、これは。

「出陣が嫌なら、体調が優れないのなら、言ってください。私に言いにくければだれでも構いません。わたしに伝わるようにしてください。あなた方が折れてしまうくらいなら、政府に逆らつたとしても出陣なんてしません」

「大将！」

ぐつと腕を引かれる。厚さまの靈力に直接触れて、また歯噛みしたい思いだった。

「俺、久しぶりの出陣だったから、休むなんて言いたくなくなつたんだ。でもそのせいでみんなに迷惑かけて、資材も使つて、バカなことしたつて思つてる。だから、ごめん。も

うこんなバカなことしないから、そんな泣きそうな顔しないでくれよ」

頬に添えられた手から感じる靈力に乱れはなく、真摯な思いが伝わってくる。

この大きく波が緩い靈力は、わたしに厚さまの体調を勘違いさせた。

靈力の波は人の鼓動のようなものだ。乱れたり薄くなれば悪い。そう単純に判断して出陣を決めてしまったことが今回の原因。今度からは一人一人口頭でも確認しないと。

「迷惑じゃなくて、心配です。約束ですよ」

「おう、男に二言はねーよ」

ニツと笑って小指を絡ませる。なんと古風なお約束。けれどこれ以上はないような気がした。

「ところで、体調不良の原因ってなにか思い当たりますか？食事が合わなかったとか、無理をしすぎたとか、ありますか？」

「……その、実は寝れなくて」

厚さまが初めてきた日を思い起こす。骨喰さまと乱さまが、先に来ていた鯰尾さまと同室となつて先に寝かしつけた。その後、しばらく小夜さまと愛染さまと一緒に寝ていた五虎退さまが戻つた部屋に、厚さまと薬研さまが入つて、それも問題なく寝てくれた。一度靈力を安定させ眠つてしまえば、それ以降は平気だと思つていただけだ。

「人間にも、眠るのが苦手な人はいますからね〜」

「眠れないなんて言うの恥ずかしくてさ。でも薬研にはバレてたみてーだし。大將が最初に手を握つててくれた時は、あんなにすんなり寝れたのになあ」

「そうですね〜。じゃあ、夕食前に一眠りしますか?」

「へ?」

今日の出陣で怪我をしたのは厚さまだけだから、今日もうこの部屋を使うことはない。少しくらい入り浸つても誰の迷惑にもならないはずだ。

髪を解いて床に寝転がった。

「大丈夫ですよ。夕餉の時間になれば、歌仙さまか誰かが起こしに来てくれます」

「大将も寝るのか？」

「嫌なら寝かすつけるだけにしますが？」

ぼかんとした顔のまま少し考えたようで、数秒経過してから自分も布団に寝転がった。そこから少し左にずれる。

「大将も乗れよ。体痛めるぞ」

「ありがとうございます。では、ちよつといじつてみますかね」

向かい合って寝転がったまま、厚さまの右手を両の手で包み込む。それから、大きすぎる靈力を上手く発散できるようにいじる。ついでに簡単に扱えるよう、細く搓つていけば、その過程ですでに寝息が聞こえてきた。

寝息はわたしの睡眠欲をも掻き立てる。

いつのまにか眠っていたようで、目が覚めた時には夕餉のいい匂いがした。

眠ったせいで夜中まで仕事をするようになったのは、厚さまには内緒なのだ。

太郎さまと山伏さまと短刀の話

「おはようございます。よく眠れましたか？」

「これは主殿。おかげで何の問題もなかったのである」

朝早く、と言つてももう厨当番は起きて準備を始めているし、昨日この山伏さまより少し早くに来た堀川さまは、すでにその朝食準備を見に行っている。勉強熱心なことだ。

「拙僧は今しがた風呂をいただいていたところだ。朝の鍛錬を行つてみたところ、体中が熱くじつとりとしてな。人間の体とは面白いものであるな！」

カツカツカ、と大きな笑い声を響かせる。体も声も大きな方だ。

「汗をかいたんですね。お風呂はわたしが入っていないなければいつでも使つて構いませんので、鍛錬もお好きになさってください」

「うむ、ありがたい」

どちらからともなく庭を向く。鹿威しが涼しげな音を立て、少し遠くからは馬の鳴く声が出た。

朝の静かな時間。この本丸に今いる短刀は、普段元気な方たちこそ寝坊助が多いから、この時間は本当に落ち着いている。そろそろ厚さまや平野さまあたりが起きてくる頃だろうか。

「おや主殿。山伏殿も、おはようございます」

「太郎さま。お早いですね」

さつきまでの夜番を任せていたはずだけど、眠らなくて大丈夫なのだろうか。

「私は後半でしたから、そのまま起きていますよ。夜番の次の日は非番ですからね、温かい朝食をいただいてからゆっくり休もうかと」

「それは素敵な非番ですね。そうだ、折角ですから、山伏さまにこの本丸のことをいろいろお伝えしましょう。昨夜は時間がありませんでしたから。わたしはお茶を持って

「こようと思いますが、お二人ともどうですか？」

「かたじけない」

「そうですね、お願いします」

「はい、では少しお待ちくださいね」

一番長い縁側の真ん中。そこから厨までお茶を取りに歩く。

あのお二人は、体が大きいせいとか、柔軟に対応してくれて助かる。この間なんかおやつを食べた後の食器を片付けようとしただけで、

「主君にそんなことはさせられません！」

だったからね。まだ主従関係を保とうとする方が多い。短刀の方がその傾向にあるよう。みんなでいっしょに楽しめたらそれだけでいいのに。

「おはようございます」

「あるじ。おはよ、どした？」

「つまみ食いは許さないよ？」

もうみんなこれくらい軽いノリになってくれたらいいのに。

「しませんよ、と笑いながら戸を開けて、急須と湯飲みを3つ、それから湯冷ましになみなみと湯を張って、それら全てを盆に乗せた。」

「堀川さま、できそうですか？」

「うん。この二人は本当に手さばきが綺麗だからね。多分見ていれば覚えられるんじゃないかな」

「ふふつ、それは頼もしい。頑張ってください。では、また後で」

戸を開けてくれた堀川さまに頭を下げて、来た道に戻っていく。お茶菓子を用意した方が、とも思ったが、すぐに朝食なので控えてみた。

戻つてみると、静かなながらも会話があつた。太郎さまの左隣に腰を下ろし、お茶の準備をする。

「ありがとうございます」

「いえ。それより、なんのお話をしていたんですか？」

「最初は山伏殿の質問から入ったのですが……」

「いつの間にやら短刀の話になつていたのである」

へえ、と相槌を打ちながら考える。はて、この方々と短刀とは関わりがあつただろうか。

「お二人とも長兄の立場だつたはず、ということは覚えている。堀川さまは来たけれど、同じ国広がもう一振り、それから次郎太刀といったか。」

「短刀ですか。栗田口が多いのですが……どうかしましたか？」

「いえ、どうということはないのですが……」

「この体のせいか、怯えられてしまうようだと話していたのである」

なるほど。

昨晚の夕食時の席順を思い出してみる。確かに短刀はほとんど固まっているか、兄弟と並んでいたか。進んで他に座ろうとはしていなかったような。まあ、一部例外はあれど。

新参に人見知りをしているわけではないのは昨日実証済みだ。なんせ堀川さまの周りに、すぐに誰かしらが付いていた。面倒見がいいというのもあるのだろうけど。

「そうですね。わたしも体は短刀のみんなと同じくらいなので、あなた方はちょっと怖いと感じるのかもしれませんがね」

「やはりこの体軀は、戦場でしか…」

「でも、優しくてそばにいと安心します。怖くないって知っていますから。あ、そうですよ、みんな知らないだけなんです。ちゃんと知ったら、きつと怖がらないでくれますよ？」

フォローするように言葉を続ける。どうしたら伝わるのだろうか。短刀たちに、彼らは怖くないのだと。

「ええと、困っているとき助けてあげる、とか。大きな重いものは持つてあげる、とか。そんなことから始めてみては？」

「なるほど、それもまた修行にもなるろう。今日から実践してみるのである」

大きく頷いて応える山伏さまと、それでもまだまだ悩む太郎さま。なにがそんなに引つ掛かるのだろうか。

「いえ…私の場合、近寄るだけで恐れられてしまうのです」

「そうですか…？」

わたしの部隊編成の基準は練度とその土地との因縁、それから刀種。だから短刀が一振だけなんてざらにあるし、仲間を怖がっていたら戦にもならないと思うのだけど…。

なんてもう少し深く思い出してみる。そういえば、太郎さまは練度が高いから大體第四部隊に配属するんだ…。新しい地に一番早く足をつける第四部隊。つまりはこの本丸で練度の高い順に編成する。必然的に一緒になる短刀も練度が高くなってはいない。あー、怖いもの無しの方しか入れてないわ。

「そうですか…」

もう一度呟かざるをえない。わたしが原因の一端を担っているのかも？

「…あら？あの、どこからか泣いてる声が…」

「…そうですね、どこでしょう」

「あちらからのようだが」

山伏さまの指で示される方、庭の池。ただし、そこに人影はない。三人で首を傾げていると、ガサガサとその上にかかる木が揺れ動いた。

「あつ、五虎退さま！」

猫のように丸まって上の方の枝にしがみついている五虎退さまが見えた。慌てて駆け寄ると、その手に子虎を抱えている。

多分、塀の上からか登ってしまった子虎を追いかけて、自分も降りられなくなってしまうのだらう。

「あつ、あるじさまあゝつ」

「落ち着いてください！今梯子を持ってきますから！」

「はっ、はいいゝ！つうわあ！」

子虎が動いて五虎退さまの体が滑った。両手でぶら下がる形でどうにか止まる。子虎は五虎退さまの頭の上で丸くなった。

このままじゃ梯子を持つてくるのを待つてられない！

「飛び降りてください。そのまま手を離して」

「太郎さま！」

「大丈夫、子虎共々絶対に受け止めますよ」

ぐつと五虎退さまが唇を噛む。それから目をぎゅつとつむつて、手を離した。

垂直に落ちてくる体を下で構えていた太郎さまが受け止める。くるくると回りながら落ちてきた子虎は、差し出した山伏さまの腕に着地した。さすがネコ科。

「…大丈夫ですか」

「はい！」

抱えられたままの五虎退さまが元気に返事をする。

「五虎退さま、太郎さまは怖いですか？」

「へっ？いいえ。だつてこんなに大きくて強くて、僕が仕留め損ねた敵も倒してくれるんです。かつこよくて尊敬します！」

降りながらニコニコ顔で言い切る五虎退さま。子虎を受け取つて、礼を言いながら部屋へ戻つていった。

「ね？怖がつてませんでしたよ」

「一件落着であるな」

その日一日中桜を散らしていた太郎さまは、短刀に囲まれて幸せそうな姿を何度もみんなに目撃された。

お互いに知らないだけだったのね。

俱利伽羅さまといっしょの一日

ほんの少し、本当に少しだけ、巫女装束の裾がいつもより長かった。普段は余裕で踏み越えている、襖の溝に注意をしていなかった。近侍と今日の予定を正確に決めるため、話していて気がつかなかった。

多分他にも要因はあったのだろうけど、後悔しても後の祭り。
なんて恥ずかしい。

「…大丈夫か」

「…はい」

なんてことないところで、顔から勢いよく床にぶつかってしまった。裾をふんずけて、受身も取れぬまま転んでしまったのだ。

見ていたのが俱利伽羅さまだけでよかった。言いふらしたりしない方だし、第一大勢に見られていたら恥ずかしくすぎる。

両手を伸ばして上体を起こす。鼻打った。

「うう、涙出てる…」

「……」

おとなしく座って袖で涙を拭う。もうっ、なんの話をしていたか飛んじやったじやない！打った鼻が赤くなってたらやだなく。

「…ほら」

「あ、ありがとうございます〜」

出された手を取って立ち上がる。左足首に痛みが走って、思わずぎゅつと手を握ってしまった。あ、爪たてちやつた…。

「……お前」

「…えへっ」

「どっちだ」

思わず言い淀む。理由を見抜いた上での質問は、言うに苦しい。

ごによごによと小声で言い逃れをしていると、痺れを切らした俱利伽羅さまが片腕でわたしを抱き上げた。

「聞こえない。このまま薬研のところに行くぞ」

「えっ、歩けますよ！そんな大事じゃありません！」

落ちないように暴れながら喚くと、ピタリと動きが止まった。それから巫女装束の裾を掴むと、膝までめくり上げる。

「きゃ!？」

「自分で見てみる。もう赤く腫れてる。立ち上がった時に無理をしたんだ、おとなしくしろ」

細められた目に射抜かれて抵抗を封じられる。

整えられた裾をじっと見つめて黙らざるを得なかった。

薬室までたどり着き戸を叩いてみたが、返事はなかった。

「いないようですね〜」

「鍵を貸せ」

「はい」

懐から三つ目の鍵を出して渡す。ガチャガチャと何度か失敗した後、やっと開いた戸を押した。

「畳に下ろしてください〜」

何も言わずに下ろしてくれる。それから薬や草の匂いにしかめた顔をわたしにみせた。眉間にシワが、と思った時にはもうそこを指でつついていた。

「…おい」

「あつ、すいません。でも、そんなにしかめっ面してたら跡が付いちやいますよ？」

「俺に構うな」

「じゃあわたしにも構わなくていいですよ？」

わたしの一言にさらに眉間のシワを濃くした。知っているのだ、困っていたり自分より小さいものを放っておけないことを。言葉とは裏腹に、とてもみんなのことを想っていることを。

「わたしはこのままでも大丈夫ですから。こんな軽くひねっただけで薬を使うだなんてもつたいたない。多少歩きは遅くなるかもしれないかもしれませんが、然程支障にはなりませんし…」

「…チツ」

盛大な舌打ち。本当に、優しいなあ。

唐突に一つの引き出しを出したかと思ったら、引き出しごと近くの椅子に下ろした。そこからまたガサゴソと漁り、何かを両手に持って近づいてくる。無言の重圧に思わず

たじろいでしまった。

「こつちだったな」

「え、ちよつ！」

再び大きくめくられる裾。そのまま足袋も脱がされ、赤く腫れ上がった患部がさらけ出された。

意外にも手際よく貼られる湿布薬。それから包帯がくるくると巻かれ始めた。

よく湿布薬の場所を知っていたなあと思うけど、そういえばよく短刀を薬研さまと連れていることがあつたような。

「…俱利伽羅さま、モテないでしょう」

「俺は一人でいいから必要ない」

なんて強引で使い勝手のいい言葉なんだ。

無理をしないために足袋は脱いだまま。軽く動きを確認して、処置が終わってしまった。

「おい、立て。仕事に戻るぞ」

道具を片しながら言う。ここまでしといてそれですか！

「足が痛くて立てませくん。責任持って運んでください、なんて」

冗談を言いながら足をつこうとすると、目の前が陰り、温かく大きな体にくつついていた。

「なにが責任だ…」

「えっ、冗談ですよ！なんてって言ったじゃないですか！」

「耳元で叫ぶな。今日は学校とやらないんだろう、ならここにいる間くらい治療に専念したらどうだ」

正論すぎてぐうの音も出ない。また片腕で抱えられながら薬室から出る。いつの間にか鍵も閉めたようで、ホイと渡されてしまった。

前言撤回。こんなに優しくて周りを思いやれるヒトが、モテないわけないじゃない。

「あれっ、大将。どうかしたのか？」

「厚さま。ちよつと捻挫をしまして。それよりあれから眠れるようになりましたか？」

「おう！それどころか戦でも調子よくつて。今度俺も第四部隊に入れてくれよ！」

「ええ、考えておきますね」

抱えられたままだから厚さまを見下ろせた。うーん、たまにはこんなのもいいのかもしれない。

それから一度部屋に戻り、中断してしまつた今日の予定決めを再開する。

「では、こんなところで。うーん、出陣の時はどうしましょうかね」

「どういう意味だ」

「え？ああ、わたしの足の話ですよ。これから戦、今戦から帰って疲れてる、なんて皆さんにおぶつてもらおうわけにはいかないでしょ？」

そう言う、心底わたしの言っていることがわからない、とても言いたげに首を傾げた。

「俺を本陣まで連れて行けばいい」

「んー？ん”っん”」

おつとこの方は近侍の役割をわかってないのかなー？

ここでの近侍は極言、お留守番組の総隊長、なのだ。近侍がいなくてはいざというとき混乱を招きかねない。まあ代行を置いて行けばいいといえだけのだけど…。

「ええと、でも、そのですね？」

「なんだ？」

ちよつ、普段そんなまつすぐに見なくせに！そんな頼れよオーラ出さなくせに！

「…お、お願います」

結局その日一日中、俱利伽羅さまはわたしを抱えて動いた。代行を頼んだ歌仙さまにはすべてお見通しだったようで、なんだか同情のような視線が送られてきた。

薬研さまと宗三さまと喧嘩の話

「こおんの…分からず屋!!」

「あなたには言われたくありません!」

ふんつと二人して背を向け、ずかずかと歩いていく。わたしが大声を出すのは滅多にないことなのだけど、今回ばかりは我慢ならなかった。

わたしの願いは、ただ一つなのに。

遡ること一時間前。第二部隊が本陣に帰還してきた時、薬研さまがとてもいい顔で敵の頭の首を取ったと報告してきた。

薬研さまが隊長のときは、決して無理をさせず、何かあればすぐに帰還、けれど隙の

ない陣形を組み、速やかに敵の本陣を討ち取るとみんなからの評判もいいが、しかし。

あくまで『無理をさせず』なのだ。そこに薬研さま自身は含まれない。

隊長でないときならば指示に従うのに、隊長で命令できる権限を持つてしまうと、途端に無茶をする。味方を庇い、刀装を守り、確実に敵を見定めるために単騎索敵に繰り出す。自分以外が無事で、自らも足が動くのならば、進軍してしまうのだ。

今日だって、誉を得た代わりに左足を膝から下、戦場に落として来たのだ。隊長が隊員に担がれて帰還するだなんて初めてのことだ。

「なんて無茶をするんですか」

「あれだ、肉を切らせて骨を断つてな。ちゃんと生きて帰ってきたじゃねえか」

「五体満足で帰ってからそういうことは言ってくださいね」

わたし直々に手入れをしながら説教をする。第二部隊が最後の出陣でよかった。ここにかまけていられる。

まあ、わたしよりも何百年も生きている彼らに説教だなんておこがましいのだけど。それでも、わたしには通さなければいけない筋があるのだ。

「刀装も大事ですが、それはあなた方の身を守るためなんです。それを守るだなんて矛盾してるじゃないですか」

「刀装だつて資材を消費して作つてんだ、無駄にはできねえだろ」

「無駄にしろなんて言つてませんし、第一あなたの手入れにも資材を使うのはわかつてますか〜?」

「短刀の俺つちの手入れの方が少なく済むだろ?」

お互いに譲らない。顔には笑顔を携えたまま。

手入れが終わるまで続いた静かな口論は、終わった途端、同時に忍耐の限界を超え、冒頭に戻るといふわけだ。

*** **

無心になりたくて雑務に取り掛かったのは、夕餉の時間にはまだ少しある、日が山の

端に差し掛かった頃だった。

書類と報告書の山をこれでもかというスピードで手を入れまとめしていく。たった一日分が山になるのだから審神者とは事務作業の多い職種だ。

あらかたファイリングと提出用をまとめた頃、近侍の蜂須賀さまが夕餉だと呼びに来た。

*** **

「…入りますよ」

「あ、はい。どうぞ〜」

返事を待ってから障子が開けられる、夕食後の私室。片手で盆を持った宗三さまがゆつたりと袈裟を揺らして入ってきた。

「まったく…あなたのせいで小夜が怯えていますよ」

「うつ…すいません」

淡々とお茶の準備をしていく。ただ急須からお茶を注ぐだけなのに、その所作は美しく、見るものを落ち着かせる。

それにしても、小夜さままで怯えてしまうとは。わたしは一体なんなのだ。

「はい、どうぞ」

「いただきます」

手に乗せて温かさを湯呑みに求める。手に伝わる熱は、人のそれより大分熱かった。

「誰かに言われましたか？」

「ええ、まあ。そんなことより、薬研はともかく短刀たちをあんまり恐がらせないでくださいよ。まあ、一部大きい方まで恐れているようでしたけど」

「ああ、だから宗三さまに白羽の矢が立ったんですね」

一口飲んで息を吐く。わたしだって怒りたくて怒っているんじゃないのだ。できる

ことなら心から笑っていたい。

やっぱりわたしは審神者として認めてもらえていないのだろうか。

「…みんなが貴方を慕う理由がわかりましたよ」

「え？」

唐突にかけられた言葉に返事が出来ないでいると、そのまま続けられた。

「僕はついこの間来ましたけどね、それでもわかることはあるんです。貴方はきちんと一人一人と向き合って、どんな言葉にでも耳を貸すでしょう。あの薬研とああまで言い合えるのも、きちんと話を聞いているから。あの子は少し大人び過ぎて、相手を立てる方法をよく知っている。それなのに大声で怒鳴っているものですから、さつきは笑いが堪えられませんでした」

思い出したようにくすくすと笑う。確か宗三さまと薬研さまは主を同じくしたことがあったはずだ。その頃から知っているのならこういう言い方もあるのかもしれない。

「貴方の願い、確かに届いていますよ。あの大俱利伽羅でしたか、いつも一人で居たいとか言つて今日の戦、短刀を庇つて敵の斬撃を受けていましたから。まあ彼は短刀を連れて避難しましたがね」

薬研とは違つて、とまた笑う。

そう、俱利伽羅さまには届いていたの。嬉しいこと。生きることが望んでくれることが一番嬉しい。

確かに刀装よりも、まだそこまで練度の高くない薬研さまの手入れの方が資材を使う量は少ないかもしれない。彼はきちんと計算した上で行動しているのかもしれない。薬草や薬で治癒すれば、時間はかかっても資材は使わなくて済むかもしれない。

でも、わたしが言いたいのはそうではないのだ。正直、資材なんてどうでもいいのだ。「僕が何を言いたいかといえ、貴方の真正面からの言葉はきちんと伝わるということですかね」

「宗三さまは、何故わたしの言葉を聞いてくれるんですか？」

「そんなの、小夜が貴方に心を開いているから、以外に理由が要りますか？」

それ以上ない言葉だ。

一気にお茶を飲み干して立ち上がる。

「薬室ですよ。それから、使いつ走りはこれきりにしてくれと伝えてください」

「はい、ありがとうございます！」

勢いよく部屋を飛び出す。宗三さまは、わざわざわたしをたきつけに来てくれたのだ。

喧嘩は存分にしなさい。けれど、きちんと始末をつけなさい。

いつまでたつても雰囲気が悪くするだけのわたしたちを見かねて、とつと話を付けて来いと、気持ちをつつけて来いと。

最初は頼まれたのだろうけど、きつとあれば、あの言葉は全部宗三さまの本心だ。あそこまで言われたら、わたしだって黙っているわけにはいかないのだ。

ノックも忘れて部屋の戸を開ける。ここの鍵は、わたしと預けた薬研さましか持つていない。三つ目の鍵だ。

「薬研さま！」

「お、おう」

「お話に来ました！」

面食らったような顔で、動かしていた道具を机に置く。それから、座るようにと座布団を差し出してくれた。

お互いが俯きがちに押し黙る。勢いできたものの、どう切り出せばいいかまでは考えていなかった。

「あー、その、な」

「は、はいっ」

先に口を開いたのは薬研さまになってしまった。緊張してか、口が渴く。

「さすがに、言いすぎた。悪かったな」

「…それが本心というなら、もうあなたも無理をせずに帰ってきてくれるんですか？」

「……」

これ、きつと無理だな。自分で理解して、私に嘘をついていいか悩んでいるんだ。

「…わたし、薬研さまに、みんなに、折れて欲しくないんです。できることなら傷もついで欲しくない。戦場にも出たくない。でも、それはできないんです。仕事だから割り切る必要があるのは理解しているんです。だから、もし次こんなことがあつたら…」

「…あつたら？」

「泣きます」

わたしの言葉が届いたとき、彼の顔は歪んだ。驚くほどに。いつもの男前が台無しになるくらい、うつすらと汗をかいて、わたしのことで慌てている。わたしが風邪をひいても怪我をしても、冷静にさらっと流していた薬研さまが。

「な、泣くつて、嘘泣きだろ？そんな簡単に出るもんじゃねえし、な？」

「いいえ、わたし、泣けますよ。心から。泣き止みません、絶対に」

「そんな宣言されたつて…」

言いながら視線が泳ぐ。わたしがまっすぐに言うものだから、当てられたのかもしれない

ない。

「こんなの言う気は無かったですけど、わたし、いつだって泣きそうですよ。怪我も、苦しそうな笑顔も、全部無力なわたしでは泣くのを我慢するのがやつとなんです。心の隙を見せるのは、神隠しされる要因にもなりますからご法度ですが、薬研さまが無茶をやめないと言うのなら、わたしだって」

「あーっ、俺の負けだ！」

どんつと床を殴った拳だけが視界に入る。驚いて顔を上げると、片手で頭をガシガシと搔くのが見えた。

負け、とは。

「大将…俺つちが泣かれるのに弱いつて知ってて言ってるんだろ」

「まあ…この間珍しく慌てているのを見ましたから。でも、本心ですよ？」

「わーっつてゐるって。だからもう無茶はしない。大将に泣かれちゃったら、俺にはどうしようもできんからな」

そんなことないのに、とは言わない。わたしは案外ちよろいのだ。

「約束ですよ」

「男に二言はねえ、約束だ」

ただの口約束。でも、わたしと彼らの間の約束事に、書状なんていらぬ。わたしは彼らを信用するしかないのだから。

*** **

最後に宗三さまからの伝言を伝えと、

「ま、未来のことはわからぬな」

なんて適当に言い放ち、作業に戻ってしまった。

10

もう無茶はしないと約束したのに、すぐ『未来のことはわからんな』だなんて。結局約束を守る気はあるのだろうか。

そんな矢先に出した遠征。薬研さまは約束通り、怪我一つ負わず、しかも仲間の誰も傷つかずに帰ってきた。刀装すら溶かしていない。

「約束は守るって言ったろ？」

「ふふ。ありがとうございます〜」

それから、と薬研さまが身をずらす。影から遠征には出ていない人影が現れた。

「お客人。丁度会ったんで一緒に来たんだ」

「紫黒。ありがとうございます薬研さま」

ひらひらと振られる手に挨拶をして別れる。薬研さまはこれから自室か薬室にこも

るんだらう。少しくらい休んだらいいのに、そうしないのが彼だ。あとでお茶でも誘つてみよう。

背中が消えた頃、わたしたちは連れ立って歩き始めた。

「薬研さまと厚さまはほんと、兄弟ですな〜」

「兄弟刀だらうけど…なにかあつた？」

「ふふつ、二人ともね、約束つて言つたら『男に二言はない』ですつて。本当に守つてくれるんですからかっこよくて」

畑の方から呼ばれる声に手を振つて応える。そろそろ収穫できるものもあるかもしれない。清光さまはどう調理してくれるのか、と思索し始めた頃、部屋の前についてしまった。

カタンと障子を引き、黙つて部屋に入る。私が文机の前に腰を下ろすと、戸を閉めた紫黒も部屋の真ん中に座つた。音を遮断した部屋は気温も下がった気がした。

「さて、要件を聞きましょう」

「審神者会議を行う」

手ぶらで来ていたし、今日は支給品の届く日ではないから、通信役としての仕事できたことはわかっていた。けれど口頭で伝えられるとは。

「会議、ですか。定例の？確か二ヶ月に一度でしたね。けど、なぜそれを通信役を使ってまでわざわざ知らせに来たのですよ？」

「今回に限り、審神者は近侍を伴わずに来いということらしい。代わりに護衛を通信役がする」

続けて、と促す。

「…けど、今回、政府は敏めようとしてる。こうして近侍なしで呼ばれる審神者は数えるくらいだ。だから、俺は来なかったことにして。時空で不具合が起きてたどり着かなかったと。そして通常通り、近侍を連れて出席して」

「…あなたは、危険を知らせるために？」

「そう。…大丈夫、気にしないで。どうせ俺には誰も近づけない。精々謹慎くらいで済むよ」

こういう時、本丸への入退記録が残らなくてよかつたと思う。口を噤めば政府に露見することも無い。けれど、確かに誰も紫黒には近づかないだろうけど、近づかなくとも罰を与える手段はいくらでもあるのだ。私のために、彼が責任を負う必要があるのか？

そもそも何故政府はわたしたちを嵌めようとするのか。審神者を減らすほうが得策でないことはわかりきっている。それとも、刀が近づいてはいけけない理由があるのか。

近侍を連れて行くことは審神者を守ることにある。審神者会議で靈力を持つものが集まれば、自然と歴史修正主義者も集まるだろう。そうなれば会場もろとも破壊されかねない。

さて、ここから導き出される答えとは？

「…わたしたちを囿に敵をおびき出し、生け捕り、もしくは捕獲からの解析が目的ですかねえ」

「俺がいくら頭の出来が悪くてもそれくらいわかつた。本当は逃げてほしい。でも、標はほかの審神者を見捨てられないから」

思わず苦笑する。よくわかつている。わたしは元來他を見捨てられないのだ。多分、

紫黒が一番理解している。

「…では、紫黒。護衛をお願いします」

「どうして」

「近侍は連れて行きません」

紫黒の膝に乗せられた手がぐつと握られる。しかしそれを制して言葉を続けた。

「政府の文言は近侍を連れず、通信役を護衛とする、だけですな？」

頷く。

「なら、第二から第四までの三部隊を隠して会場の近くまで連れて行きましょう。何かあればすぐに呼べるように。決して命令には逆らっていません、言い逃れなど、いくらでもできる。始末書くらい何百枚でも書いてやりますよ」

それどころか、思惑通り敵を、わたしたちの部隊が生け捕りにすればお釣りがくるだ

ろう。今現在他に私たちを囿にする理由が無いから、多分それでここに戻ってこれる。そうと決まれば色々準備が必要ですねえ。

「会議は一週間後ですよね〜？なら、今から取り掛からないと。とりあえず紫黒は何かあれば呼びますのでのんびりしててくださいいね〜」

「…わかった。縹がそういうなら」

どちらからともなく立ち上がり、部屋を出る。前で逆に分かれ、わたしは広間に全員を集めた。

*** ** *

「…という事です。なにか質問はありますか〜？」

手をあげるものはいない。もちろん反論するものもない。理解が早くて助かる。

わたしは幸せ者ね。

では、と続ける。

「これより五日間の出陣は、日に一度とします。体調を万全に整え、万が一が無いように。これから編成を決めますので、みなさんは内番に戻り、また遠征に行っている第二部隊が帰還次第事を伝えてください。∴ではそういうことで、解散」

さあ、大仕事の準備に取り掛かるといいたしましょう。

1
1

あの日からの五日間は目まぐるしく過ぎていった。

大事をとってそう強くない、体の調整ができるような相手に一人一度は出陣し、食事はスタミナをつくような献立に、睡眠不足を防ぐために霊力の安定化を図る調整を、そして刀装の補充を行った。

鍛刀はしなかったものの、戦場でも新しい出会いがなかったのは良いのか悪いのか。練度の低い方の初めての戦がこんな最悪の状況では酷いから良かったのかもしれない、と納得するしかない。

「歌仙さまはお上手ですね〜」

「武具の拵えは得意だね。それより君、ここにいて平気なのかい？」

「ちよつとだけ休憩です〜。みんなわたしに気を使いすぎなんです。おかげで放置してくれる方が少なく、おちおち休めないんですよ〜？」

愛されるのも大変です、と冗談めかして言えば、歌仙さまはのんびりと笑った。

「僕らの主は少し危なっかしいからね、心配になるのも無理はない。が、休むのもままならないとは問題だね。みんなにはもう少し雑に扱うよう言っておこうか」

「雑につて……まあ、その方が楽ですけどね」

くすくすと笑いあう。今わたしをきちんと叱ってくれるのが歌仙さまくらいだから、ついつい甘えたくなくなってしまうのだ。雑に、というのは少し泣けるけど、もう少しラフに接してくれるもいいと思う。

わたしはただの小娘です！って叫んでみようかしら。

「おや、もう行くのかい」

「はい。あとで小夜さまを呼んでみますね。一人ではつまらないでしょうし。すいませんがもう少し頑張ってください」

では、と作成部屋を後にする。小夜さまはどこかしら。

日暮れも近い頃、わたしは一足早く風呂を済ませていた。明日は昼過ぎには出発するから、午前中缶詰をして提出用の資料をまとめなければならぬ。普段からやっているからそう多くはないのだけど、それ以外に、万が一に備えた仕事をしなければならぬ。みんなには万が一がないようになって言ったのはわたしなのに。

「人間は脆いから、」

「それを守るのが俺たちだよ、あるじ」

「清光さま」

障子の向こうから声が飛んでくる。独り言だったつもりだったのに。影が手を振ったので、隣の障子を開いて顔を出した。

「夕飯できたよ。一緒に行こう?」

「はい」

部屋の明かりを消して外に出る。行こうというのに清光さまはなかなか動こうとしなかった。

「…清光さま？」

「…ねえ、お願いがあるんだけど」

「はい」

面と向かって真面目にお願いだなんて珍しい。普段なら前置きのないおねだりなのに。

真面目な交渉ならば、とわたしもそれらしい表情を取り繕った。

「俺さ、本丸待機組にして」

「…いいんですか」

実は、出発前日だというのにまだ迷っていた。戦力として欲しい方、本丸に残す必要がある方、そういう分け方をしていくと、自然と練度の低い最近来た方を残すことにな

る。けれどいざという時統率できる方や守る力のある方がいなければ、本丸は崩壊してしまう。

清光さまは、どちらと言われれば戦力に欲しい方だった。

「俺ね、あるじが大好きだよ。目一杯可愛がってくれて、みんなにも優しくしてくれて、折れないように細心の注意を払って、つて俺たちのためにそこまでしてくれるあるじが大好きで守りたいよ。だから、あるじに迷惑かけたくないんだ」

「迷惑？」

尋ねれば、普段のような可愛らしい笑顔ではなく、痛々しい泣きそうな微笑みが返ってきた。

「こんな顔、いやだ。」

「きつと、殺しちゃうから。あるじを囿にして、死んでもいいなんて思ってる連中を殺さずにいられる自信がない。そんなことしたら、困るでしょ？」

「…そう、ですね」

他に返事ができなかつた。嫌だつて言わなきやいけないのに。言いたいのになんか言えない。

清光さまは初期刀で、この本丸が一番付き合いが長くて、お互いに頼ることを覚えた。同時に、心配かけまいと迷惑になるまいと思うようになった。お互いそれをよく知っている。

「ごはん行く？ お腹減っちゃったよ」

「…はい」

「集会で部隊発表するんでしょ？ ちゃんと言える？」

「…言えますよ」

「…大丈夫。絶対、本丸も、あるじも紫黒さんも守るから。みんな強いよ、絶対誰も欠けず帰ってこれるよ」

夕食の匂いのする大広間の障子を引く。

中で待つみんなはすでに覚悟の決まった顔をしていて、どこに配属されてもきつと文句は言わないだろう。

一歩踏み入れ、顔を上げる。

「はら」

最後の返事をして自分の席に着く。

明日は何もしなくても来てしまう。ならば、足掻いてやろうではないか。

*** **

「では、行つてきます。清光さま、留守をお願いしますね。明後日の夕方には帰り着く予定なので」

「うん。気をつけて」

清光さまを近侍に練度の低い堀川さま、山伏さま、宗三さまの四人が残る。練度が低いとはいへ、この3人は落ち着き払い、きつと清光さまの指示に従つて本丸を守つてくれるだろう。

「小夜を、お願いしますよ」

「もちろんです。決して一人たりとも戦場には残してきませんよ」

氣丈に振る舞い笑顔を見せる。紫黒は心配するそぶりも見せなかつたけど、多分引き止めたい気持ちでいっぱいなんだろう。

「ごめんなさい。でも、いくら同期が嫌いでも、やつぱり見捨てられない。」

ぎゅつと抱きしめられた。よく知ってる香水の匂い。清光さまが、子供をあやすようにわたしを抱きしめていた。

「帰ってきたら、ご馳走作ってあげるからね」

「はい。楽しみにしています」

体を離して手を重ねる。その手に書庫の鍵を預け、背を向けた。

「さあ、戦場に向かいましょうか」

*** **

三つに分けた部隊の総隊長は、第二部隊の部隊長に指名した歌仙さまだ。

その歌仙さま率いる第二部隊が主力。メンバーは同田貫さま、青江さま、鳴狐さま、太郎さま、蜂須賀さま。

第三部隊は国俊さま率いる偵察部隊。乱さま、厚さま、五虎退さま、平野さま、秋田さま。

最後の第四部隊は、遊撃と他の補佐を行う。葉研さまが部隊長で、鯨尾さま、骨喰さま、今剣さま、小夜さま、俱利伽羅さまが編成されている。

作戦としては、わたしが彼らと自分の間に結界を張り、政府に気取られないようにする。何事もなければそのまま帰還、想定通り歴史修正主義者が来たのならば撃破、できれば捕獲。優先すべきはこちら側全ての命。

総勢18名とわたしたち2人で行う大規模作戦は初めてだから、大分頭を使ったけれど、これ以上の策はないように思えた。

*
*
*
*
*
*
*
*
*
*

結果、わたしの策は失敗に終わった。

12

新勢力、検非違使。

その実態は歴史修正主義者たちを敵とし阻止する部隊。しかしそれは同時に、我々審神者の敵ともなった。当然、審神者の命により戦前に入る男士たちは格好の的となる。

他が考えることを放棄して誰一人として男士を連れてこなかったせいで、襲ってきた検非違使を全て相手することになってしまった。

護衛として来ていた通信役など、ただ他より霊力の高い人間に過ぎない。たまに人ではない審神者もいるが、今回は呼ばれていない。彼らがいれば、男士には及ばずとも護衛役など目ではないほどの能力があるのに。やはり、捨て駒にするには惜しいというところか。

目先の利益しか求めぬ政府め。わたしは簡単には屈してやらないから覚悟しなさい。

「紫黒、わたしを抱えて屋根に登って！あれを引きつけます！通信役よ、審神者を守って本丸へ帰りなさい！」

わたしを横抱きにした紫黒が窓から飛び出す。引きつける。わたしは全てをかばいながら戦うだなんて能力はない。せいぜい囿になるのが精一杯だろう。

紫黒の霊力はただ大きいだけでなく、応用に優れていた。そしてそれは、わたしが操れば囿として最高の役割を果たした。

「右から来ます、上に避けて！」

「あれは、なに？」

「詳しくは。さつき更新されたデータでは検非違使という名前だけ！」

政府のハードにアクセスしても、あんな姿形の敵は見たことがない。いくら資料がなくても、あれほど強ければ噂になってもおかしくないのに。

ということは、ここにいる誰も知らなかったということだ。

「後ろ！」

「や、ば…」

紫黒の体で反応が遅れたせいで、一瞬動きが間に合わない。斬撃を食らうことを覚悟

して、結界を張ろうとすると、それより早く軽い衝撃と金属音が響いた。

「だいじょうぶですか!」

「地面、走って…ッ!下に補佐隊が来てるから!」

「今剣さま、小夜さま!」

斬撃を往なす二人に背を向け、すぐさま飛び降りる。着地の衝撃が少ないのはさすがだと思ふ。そのまま前に走り出すと、すぐに鯰尾さまと骨喰さまが並走した。

「無事ですすね!」

「はい!ですが先に、首尾を!」

紫黒に抱えられたまま少し顔を上げる。正面を走る骨喰さまが、わずかに顔をしかめたのがわかった。

近くに薬研さまと俱利伽羅さまの霊力を感じない。正確には、敵か味方か区別のつかない霊力の塊が少し離れたところに行くつもある。きつとみんなが戦闘しているんだろう。

会場にいた他の審神者は逃げられたのだろうか。

「報告、現在重傷者0、中傷者2、軽傷者5。第二部隊が囿になって、その隙第三部隊が他の審神者を逃がしている。…っ、葉研と大俱利伽羅は今手当に向かっている。葉研からの伝言だ、ここにいる四人は護衛につけると。俺たちはどうしたらいい。このかは、どこへ行きたい」

浅い呼吸を繰り返す紫黒に、どこか怪我をしたのだろうと予想がつく。これ以上わたしを抱えて走らせることはできない。だからと言って、わたしが走って逃げられるかといえは全くそんなことはない。即座に斬られてしまうだろう。

「葉研さまたちは今どちらへ？」

「厚と秋田の元へ」

「その二人が中傷なのですね？紫黒、次を右、その先左側に空き地があります、そこで止まって下さい」

四人にも付いてくるように言うと、紫黒が一気に加速して、跳ぶように目的の空き地

にたどり着いた。空き地とは言え、車1台分くらいのスペースしかない。そこに六人が集まると、そこそこの密集になった。大きな靈力に酔いそうだ。

地面に降ろしてもらって、すぐさま紫黒の怪我を手当てする。左肩に打撲の跡ができていた。

「無理しないでください。応急処置はしましたから、なるべく腕を使わないように。式神をつけます、紫黒と骨喰さま、今剣さまはすぐに第三部隊並びに薬研さまと合流し、式神の一つを渡してください」

小声で指示を出す。それを受けた三人がクツと頷いてから人間ではありえない速さで背を向けて走り出した。

「わたしたちは第二部隊に合流します。小夜さまは先導をお願いします。鯨尾さまは……」

「主さんを抱えて走ればいいんですよね？」

任せてください、と簡単に抱き上げられてしまう。

ああこの足手まとい。せめて自分で走れる足があればいいものを。

空き地を出て走り出す。まっすぐに向かう先には大きな霊力の塊が二つ動かずに睨み合っているようだった。

間近までくると、それがより顕著に見えた。睨みあいが続いている。この隙に逃げ帰ることはできないのか。

「とー…つちやくー！」

「ありがとうございます。歌仙さま！」

横並び一番右端に立っていた歌仙さまに走り寄る。よかった、こちらは目立つ怪我はないようだ。

「無事だったんだね。悪いけど状況の報告はできそうにないよ」

「どういうことですか？」

「あれらが一切動かなくなっただ。こちらも下手に手出しができません、身動きが取れないというわけだ」

何故動かないのか。あいつらは敵で、あれらにとつてのこちらは排除すべき対象だといふのに。

それとも根本から読み違えているのか？ けれど新勢力として、歴史修正主義者並びに審神者と対立するものであるというデータを更新したのは政府。

不意にわたしの頭上を踊る式神が目の前まで降りてきた。

『ー聞こえるか大将。三番隊六名、薬研、大俱利伽羅、骨喰、今剣、紫黒殿、総勢十一名揃った。応急処置済み、けど早く手入れしたほうがいい。あれのあと一撃でも食らえばやられちまう』

「薬研さま、身を隠しててください。すぐに指示を出します」

パツと歌仙さまの方を振り返る。わたしは戦術に長けているわけではない。教科書通りの戦術が通用するわけでないのもわかっている。

「歌仙さま、指示を任せます。最優先は全員の帰還、わたしと紫黒は門を開くことができます。あれらが動かないとは限りません。それから、もし門に入つてこられたら終わります」

どうか、と続けようとした時、檢非違使が動いた。なんのために動かずにいたのかわからないが、行動したのも唐突だった。

速攻してくる。人の目では負えなかったが、靈力の動きだけはわかった。が、人間の行動が追いつくわけではない。寸前まで迫られた時には、歌仙さまに抱えられ、鯰尾さまが斬撃を受けているところだった。

「紫黒殿聞こえるか！怪我人と薬研から順に全員本丸へ歸し、貴方も本丸へ歸って待機、襲われそうになったらこちらの方へとにかく逃げるんだ。途中で帰れるなら帰るようにな。なるべく早く！」

『聞こえたか紫黒殿ー了解した。大将、先に手入れ部屋使つてるぜ』
「はい。清光さまに、夕飯の準備をお願いしますとお伝えください！」

ふわりと式神が浮き上がり、また頭上で踊る。通信が切れたようだ。

戦闘を開始して数分。わたしは歌仙さまと鯰尾さまに庇われるようにして門を作り出した。

「なるべく押すんだ！合図を出したら門に飛び込め！」

歌仙さまの一声にみんなが反応を返す。傷は与えられずとも、隙のない剣さばきで押して行く。数はこちらが優勢、力だけなら負けてはいない。

「…今だ！」

大分の距離を押し先から飛ぶように帰ってくる。機動の高い青江さまから順に門に飛び込んで行く。戦っていた全員が入り、鯨尾さまも飛び込む。最後に歌仙さまが手を入れて、わたしの手を引いた。検非違使はあと数十メートルまで迫っている。

「帰ろう」

「はい！」

自分の手が虹色の膜に触れた瞬間、大きな音を立てて電気が走る。歌仙さまの手が緩んで全てが門の向こうに行ってしまう。

強制的に門は閉じた。わたしは締め出された。

「貴方にはこちらに来ていただきます」

暗転。ああ、紫黒は無事にみんなを返せたかしら。

閑話

おまけの話と閑話休題

「いち、にいい、と秋田さまの数を数える声が聞こえる。葉研さま、前田さまを除く短刀たちとかくれんぼだ。いやいや隠蔽の高い短刀たちと混ざってわたしが勝負になるのか。」

「ふっふっふ。ぼくはてんぐですからね、かくれるのだっておてのものですよ！」

「ええつとおくつ、どつ、どこに隠れれば……」

「うーん、わたしはどうしましょうかね〜」

「数がすでに二十を超えたので、慌てて屋敷の中に入る。隠れられる場所があつたかしら。」

「あ、太郎さま」

「おや、主殿。あなたもかくれんぼですか」

「もっ…」

しー、と口元に指を立ててから、それを自分の背中に向ける。少しだけ盛り上がった裾に焦げ茶色が見える。あら、平野さまでしたか。

「内緒ですよ」

「内緒ですわね」

では、とわたしも隠れる場所を探しに行く。いつそ動き回っちゃいましょうか。もうすぐ百数え終わってしまう。うーん。

ごそごそと何か音が聞こえてきた。この先は厨だ。こんな時間に誰がいるのかしら。

「…倶利伽羅さま?」

「……」

珍しいこともあるものだ。当番以外で料理をしている。今日は清光さまと青江さまのはず。

「お腹減ったんですか〜？」

「……」

ふいと顔を背けられる。あら、慌ててる？うーん、別に怒ってるわけではないのだけ
ど……？

「…何でもない、放っておいてくれ」

「まあ、何してようが構いませんが…」

持っているのは牛乳とパン？倶利伽羅さまはパンよりご飯派だと思っていたのだけ
ど。

それ以上お互いに話さず厨を出る。けれど気になったのでついていくことにした。

「…ついてくるな」

「けちー」

それでも尚付いて行こうとすると、振り返って恨めしそうに睨んできた。玄関から出てしまう。この先は馬小屋、何の用があるのかしら。

「…静かにしている。あと、誰にも言うな」

「え？あ、はい」

唐突な言葉に一応返事をする。秘密に…あら、あのシルエットは小夜さま？

「…あなたも来たの」

「あら子猫。お二人が世話を？」

二人しておし黙る。あらあら？

「その…ごめんなさい」

「何がです？」

しゃがむと子猫が寄ってきて、差し出した手にすり寄ってきた。ペロペロと舐めてく

る舌がくすぐつたい。二匹もなんて、迷い込んできたのか。

「だって、勝手に…飼うみたいなことを…」

「そんなこと。別に屋敷にあげてもいいですよ？きちんとお世話と片付けをするのでしたら。五虎退さまだって虎を五匹もお世話していますし。無断で敷地から出て拾ってきたわけではないのでしょうか？」

小さく頷く小夜さまと、座り込んでミルクをあげる俱利伽羅さま。住処にしていたであろうダンボールはだいぶよれているから、暫く二人だけで匿っていたのだろう。

他に関心が少ないように見えていっとう他を思いやっているお二人だ。最後まできちんと世話もできるだろう。

「さあ、そうなれば報告に行かないとですね〜」

「どこへ行く〜」

「清光さまのところですよ。家族が増えましたって。ご飯もちゃんとしたのをあげないと、元気に育ちませんよ〜」

小夜さまの表情がぱあつと明るくなる。俱利伽羅さまは背を向けていてわからないけど。

三人で出て行こうとすると、向こうの方から声がした。そして慌ててかくれる。かくれんぼの最中なのを忘れていた。

「小夜さま、清光さまは多分お部屋だと思えます。隠れながらいきましょ〜」
「そうだね」

ここそこかくれる二人と無表情に子猫を抱える一人。なんて構図だ。
建物の陰に隠れるように、声から遠ざかるように歩いた。

「あれ、主さん」

「わあつ、堀川さま！しーつ、ですよ！」

「おや、小夜も。そういうえば短刀たちでかくれんぼをすると言っていましたねえ」

ばさつとシーツを広げる音が響く。そういうえば今日の洗濯はこのお二人だったか。

…宗三さまはやっていないようだけど。

「また歌仙さまが怒りそう…」

「あなたが僕にこんなことをさせるからですよ」

「もう！じやあ何ならやってくれますか？まあ、夜番はまともによつてくれてるみたいですよ…」

「お酒が飲めますからね」

ははは、と堀川さまと苦笑する。この人の酒豪っぷりはこの間見せられたばかりだ。さすがというか何というか。

空気と化して待つていた俱利伽羅さまが動いたので、わたしたちも二人と別れて目的に戻る。

が、清光さまの部屋にいたのは乱さまだった。

「清光さんだったらボクをここに隠してくれた後、このかちちゃんを探しに行ったよ？」
「すれ違いましたか…」

仕方なしに部屋から出て行く。ここに大勢いては見つかってしまう。忘れがちだが

今はかくれんぼの最中なのだ。

「今日は近侍でしたからね…うーん、どこでしょう?」

「…僕は大浴場の方へ行ってみるよ…。大俱利伽羅は庭を探して」

「では私は色々歩き回ってみますね」

では、と三方向に別れる。見つからないように移動しなければ。霊力の元を見つけても、それが誰だかわからないからかくれる方では役に立たないわ。

トコトコとあてもなく歩く。この本丸は無駄に広い。建物を三階建てとか縦に高くすれば、こんなに廊下が長くなることないのに。

「おや、歩いてていいのかい?」

「青江さま。見つからないように、探し中です。清光さまを見かけませんでしたか?」

「加州くん? うーん、見ていないけど。僕はこれから昼食の準備に行くんだ。歌仙も来るだろうから、聞いてみるかい?」

あてもないのでついて行くことにする。

というわけで再び厨に着くと、すでに歌仙さまと、何故か厚さまが私たちを出迎えた。

「清光さん？ 見てないな。それより聞いてくれよ！ ちよつと余つてたご飯で握り飯を作ろうと思つたら歌仙さんに見つかつてすげー怒られたんだよ」

「君が手も洗わずに手を釜に入れようとしたからだろう」

確かにそれはわたしでも注意しますね。お腹壊して欲しくくないですし。

とりあえずここにもあてはなかつたので、またキヨロキヨロしながら出て行く。すると門の方で複数の霊力を感じたので、そのままそちらへ向かつた。

「主さん！ ただいま戻りました！」

「お帰りなさい。でも、しーっ」

口元に指を立てて、それから現状を説明する。部隊長の鳴狐さまが、というよりお狐様が遠征の報告をしてくれて、その間鯰尾さまが秋田さまが来ないか見張つてくれた。

「正国さま、手洗いしたらすぐ手入れ部屋へ行ってくださいね」

「へいへい」

「山伏さまはこの後山籠りでしたっけ。また出る前に声をかけてくださいね」

「了解いたしました」

一人一人に声をかける。きちんと対話をして体調を見ないと。あのときの二の舞なんて、絶対に嫌だから。

「あつ、こつちくる！」

「わっ、じゃあお疲れ様でした！ゆっくり休んでください、お風呂も沸いてますから！」

タツと駈け出す。いくら遊びとはいえ手は抜かない。全力で楽しまねば楽しくないのだから。

次に向かったのはわたしの部屋。もしかしたらこつちに来ているかと思ったのだが、アテが外れたようだ。

「このか。何をしているんだ？」

「ひやつ、びつくりした。かくれんぼですよ」

いきなり声をかけられてビクツとなるのは、相手が骨喰さまだったからだろう。まだ慣れないなあ。

「清光さまを見ませんでした?」

「いや、見ていない。蜂須賀とならすれ違ったが」

「どちらでしょう」

言われた通りに進むと、蜂須賀さまが前田さまと立ち話をしていた。珍しい組み合わせを見たものだ。

「あつ、主君。ただいま戻りました。薬研兄さんが帰還報告に向かったのですが…」

「あら、またすれ違つちやいましたか。とりあえずお帰りなさい。わたしも探してみます。ところで清光さまは見ませんでした?」

「彼なら向こうでさつき見たよ」

「ありがとうございます、行ってみますね」

先に薬室に向かう。今日は薬の調達に行っていたから、わたしが見つからなかったら先に片付けに行くだろう。清光さまよりは幾分可能性が高いので先にそちらへ向かう。案の定鍵が開いていた。

「おつ、大将の方から来てくれるとは」

「お帰りなさい。予定のものは買えましたか？」

「おう。釣りと、こっちは土産だ。今日の夕飯にでも使ってもらおうと思つてな」

「すごい、立派な鯛ですね。今厨に歌仙さまたちがいますので、渡してください。帰還報告受けましたので、薬研さまも午後の出陣に備えてくださいね」

良い返事を受けて部屋をあとにする。

うーん清光さまはどちらに行つたのかしら。適当に歩いていると、厠から出てきた国俊さまと鉢合わせた。

「清光？うーん…」

これもダメかと諦めかけると、国俊さまがキョロキョロと辺りを見回した。

「多分、こつち」

指差してそのままその方向に進む。その先は鍛刀所。石畳に降りるところまで来ると、清光さまがそこから出てくるところだった。

「すごい、なんでわかったんですか？」

「まあ勘だな。一番付き合い長いし、なんとなくくつてのもあるけど」

「やつと見つけたよあるじく。報告しようと思ったのに」

「わたしも言いたいことが…」

子猫たちのことを口にしようとする。ちょうどその時、とたとたと軽い足音が近づいてきて。

「あつ、主君と国俊くん見つけました！」

…すっかりかくれんぼの最中だったことを忘れてしまっていたわけだ。

*** **

政府付属の監視付きホテルで謹慎一週間。その間に眠る時以外仕事を押し付けられ、本丸にいるみんなのことを思いながら片付けていく。

ようやく謹慎が解かれ本丸に帰る時には、あの胡散臭い狐がゲートまでついてきた。

「検非違使に関するデータは貴方のおかげであらかた取れました。謹慎は命令違反すれすれのことをやってのけたことに対する処罰ですね、これからは慎むように。本丸には通信役を置いてありますので大きく崩れていることはありませんが、まああとは貴方におまかせいたします。どうぞさっさとおかえりください」

お前の長話に付き合っただけだから少しくらい黙ればいいのに、なんて思いながら黙ってゲートをくぐる。本丸の門に直結しているこの道は、今日だけ少し長く感じ

た。

ぎいい、と木の擦れる音がする。最初に目に入ったのは、もう馴染んでしまった形と変わらぬ屋敷と、赤い着物だった。

「…あつ、あ、ある、じ…！」

ぼろつと大きな涙を一瞬にして浮かべてこぼす清光さま。ああ、心配をかけてしまった。でも屋敷の中にちゃんとみんなの数だけの霊力を感じる。紫黒もいる。良かった、ちゃんと帰っていた。

いろいろ言いたいことはあつたけど、安心してわたしも涙が出そうだったけど、ぐつとこらえる。

そうして一言、言わないと。

「…ただいま帰りました」

「…おつ、おかえりっ！あるじ！」

第3章

今剣さまと青江さまと願い事の話

みんなからぎゆうぎゆうに押しつぶされそうになりながらの帰還報告。真つ先に待っていたわたしの仕事は、手入れの間に合わなかった方の対応だった。

「もういつそ手伝い札全部使ってもいいので、とりあえずみんな休んでください！」

泣いてたり離れなかったりとするみんな一人一人に声をかけていく。わたしがいない間ほとんど眠っていない方、そんな彼らの面倒を見ようとしてくれた方、政府に連れて行けと紫黒に食いかかった方までいたらしい。紫黒は大丈夫としか言わないけれど、目の下の隈はくつきりについていて、この一週間のみんなをなんとか抑えてくれたのだらうと想像する。

「清光さま、大丈夫です。もういなくなったりしませんから、眠ってください」

「うん…」

一人一つお願いを聞く、という条件のもと、睡眠不足や興奮状態のひどい状態の方を、少しずるい気もするけど霊力を安定させて寝かしつける。大広間に布団を何枚も敷いたのは、わたしが同じ部屋にいないと寝ないと言った方々の妥協案だった。

「…眠ったかい？」

「青江さまですか。どうぞ、入って平気ですよ」

障子の向こうの人影は、ゆっくりと姿を表す。わたしの背中側に、静かに腰を下ろした。

「ごめんなさい、後回しにしてしまつて」

「いや、僕たちは比較的睡眠をとっていたからね、大丈夫だよ。それより全員のお願いだなんて、そんな条件飲んで良かったのかい？」

「ええ。まあわたしの給料で収まる範疇だといいいのですが…」

ふふふ、と小さく笑いをこぼす。なるべく小声だ。全員が眠っているのは確認済みだ

けど、起こしてしまうのは忍びない。

「じゃあ、ちよつとずるいけど遠慮なく」

「お願いですか？」

うん、と笑う。よもやこの方が最初に来るとは。

「お願いというか、夜のお誘いをね」

につかり、なんてのよりもずっと不気味。なんていったらいけないか。けれど一瞬身を引いてしまった。眠っている清光さまにちよつとぶつかる。

「もちろん、怪談だよ？」

「言い方を…まあいいです。今夜ですか？二人だけで？」

「うん、今夜。今剣もいるんだ」

珍しい組み合わせ…でもないのか？そういえばツーショットをたまに見かける気も

するし。

「夏にホラーの特番がやっていてね、怖い話が集まったら怪談をしようと言っていたんだ。まあ、もう夏も終わってしまったけどね」

「まあ、庭も山も色づく季節ですからね」

まあいいか、と笑う。こんな可愛らしいお願いならば問題ない。怖いものも、まあ、うん。

了承を示そうとすると、清光さまの向こうに寝ていた五虎退さまが起き上がって、布団をかぶったまま蒼白な顔でキョロキョロと辺りを見回した。怖い夢でも見たのだろうか。清光さまの頭上を通ってそばに座り込む。

「五虎退さま、わたしがわかりますか？」

「ある、あるじさま、ふえっ」

大きな光の粒を目に溜めて、瞬きのたびにそれをこぼす。

おいでおいでと手招きすると、倒れこむように抱きついてきた。

「大丈夫、眠ってる間もちゃんとおそばにいますからね〜」

よしよしとあやしなから落ち着かせると、小さく笑ったあとに寢息を立て始めた。

「青江さま、夜、お部屋に伺いますね。それとも今劍さまのお部屋に？」

「そうだね、そつちで。じゃあ、僕は邪魔しないように退散するよ」

ひらひらと振られる手に、五虎退さまの布団を正しながら頷きで応じる。これからこんなお願いが増えるのかしら。

布団をぼんぼんと叩くと、五虎退さまは幸せそうに笑った。

色々していれば夜が来るのはあつという間だった。溜めていた書類の整理、報告書、

それからみんなの体調管理。昼寝という形で休息を取らせたみんなは、やっと落ち着いたように普段の生活を取り戻しつつあった。

「もうっ、お昼寝したからって夜更かししたらダメですからね！」

はいはいと応じるのは宗三さまだ。今は蜂須賀さまとお話ししているけれど、わたしがいない間はずつと眠らず待っている小夜さまを心配して付き添っていたらしい。付け加えるように「まああなたの心配はしていませんでしたが」と言われた時には、赤い顔して何言っただと属性を考察し始めましたがここでは割愛する。

「今日の仕事は終わりですか」

「はい。太郎さまもありがとうございました。突然近侍を任せてしまいまして」「いえ。貴方に役割を他の方と分けていただいたおかげで、私はそれほど……」

これ以上何か言うと話が終わらないので切り上げる。広間で騒いでいるみんなにも「おやすみなさい」と声をかけ、今剣さまの部屋へ急いだ。

くふふつ、と蠟燭の明かりに映し出される影が笑った。うーん、ホラー。存在自体がそれと似たような彼らが、おぼけや幽霊を怖がるのかしら。いや、それらと神様は似て非なるものだけど。人間的には実体がないもの、としてはひとくくりにできるような、できないような。

「それで…おや、そこにいるのは」

「あるじささまですか！」

ふわりと浮き上がった影、多分今剣さまが足音一つで障子に迫り、勢いよくそれを開けた。

「お待ちせしました〜」

「まってましたよ！あれ、あるじさま、まくらはもってこなかったんですか？」

こてんと首をかしげる今剣さまの向こうには、すでに布団が敷かれていた。二つ。

「あのね、きょうは青江とぼくとさんにんでねるんですよ！だから岩融のまくらをかりてしましましょう」

「…青江さまあ？」

「なんだい？」

知らぬ存ぜぬで通すつもりですか。まったく、もう。まあ今剣さまに免じて今日は何も言いませんまい。

そんな感じで苦笑すると、それがわかったのか名前通りの表情で笑った。

「あるじさまはこっち、ぼくがまんなかで、青江がそっちです」

「はあい。それで…いまはどんなお話を？」

もぞもぞと布団の上に座り込む。すでにほんのり温かかったのはこの上に座っていたせいでろう。三人とも寝ると、二人小さいのがいるとはいえだいぶ狭く、距離が近

かった。

「青江がむかしきつたゆうれいのはなしです。そうだ、ぼくもひとつきかせてあげますね！」

えへへ、と如何にも期待してくださいと言わんばかりに笑う。うふふ、嫌だー。

*** **

怪談が続くこと二時間半。ここに来たのは八時過ぎだったはずなのに、もうすっかりいろいろな意味で冷え切ってしまった。

「でもね…あの、そのおんなのひとは…」

「…眠いですか？」

「んん…でもまだ…」

「またいつでもお話ししましょう？体調崩したらつまらないですよ」

「ごごしと目をこすっている手を抑える。そんなにしたら、目が潰れてしまいかねない。」

残念そうに横になるので、上から布団をかけてぽんぽんとリズムをとるように叩いた。

「じゃああるじさま、ぼくもおねがいがあります…あのね」

「はい」

「あなたがしぬまで…ぼくをすてないでくださいね…」

最後は寝息に混じってかき消えてしまったけど、ちゃんと聞こえた。

「ふふ…わたしが捨てられないよう努力するんですよ。捨てるなんて、ありえませんか。ゆつくりお休みなさい…」

さらりと前髪を払う。わたしとは比べ物にならないくらいこの世界を生きている方

の寝顔は、美しく、幼く、あどけないものだった。

「さあ寝ましょく、青江さま。あなたも疲れているでしょう？それとも、寝かしつけてあげましょくか？」

「いや、遠慮しておくよ」

それからね、と彼も布団に潜りながら笑う。

「君はお金を気にしていたけど、きつとみんなのお願いにお金はかからないよ。その分、重荷かもしれないけどね。じゃあ、おやすみ」

「はい、お休みなさい」

大好きなみんなのお願いが、わたしの重荷になんてなるはずがないでしょう？
もう一度お休みなさいとつぶやいて、わたしも布団に潜り込んだ。

鯨尾さまと罰当番

わたしが帰ってから手入れも済んで、だいたい普段の生活を取り戻した時にはそこかしこで宴会が行われていた。安堵、緊張の反動、その他理由があつたりなかつたりだけれど、とりあえず買い置きはとつくに無くなつていた。ちなみに紫黒は昨夜飲まされ潰れてまだ寝ている。

飲みっぱなしなのは、宗三さまと薬研さまだ。ううん、お酒が水のように…。

「大将も飲むかい？」

「いえわたしは…」

「こら薬研、歌仙に怒られます」

「ふふ…自分たちで調達しているようなのでいいですが、ほどほどにしてくださいね。お仕事できないようでは、ちょっと困りますから」

とまあ口ではこんなことを言いつつ、一番困るのはこの二人ではない。滅多に酔わな
いから手もかからないし。

粟田口の短刀はほとんど飲まない。例外がこの薬研さまだ。

歌仙さまと清光さま、蜂須賀さまは、普段は飲まないけれど、飲んで酔うと手がつけられない。説教に始まり泣き上戸と絡み上戸。触らぬ神に祟りなしとは、まさに文字通りこのこと。

そして一番困っているのは、これに絡む方だ。

基本的に短刀たちはその兄たちに言われてここには近づかない。清光さまと付き合いの長い国俊さまはたまに様子を見に来たりもするけれど、それだつて見て、ちよつと会話をする程度。他もほとんど近づかない。あの青江さまでさえ。まあ正国さまや山伏さまは誘われたら飲んでくれるのだけだ。

ではさて、絡むのは？ 答え、鯰尾さまだ。説教を物ともせず往なし他になすりつけ、泣いているのは適当に煽つて、絡んでくるのは面白半分に勝負に持ち込む。いいようにされた彼らは、酔っているから適切な判断ができず、いいように扱われる。その結果、本丸の壁と障子は穴だらけになった。正確には、大広間と彼らの部屋が。

我に返つた彼らのうち、清光さま以外は覚えていないのだからタチが悪い。清光さまは二日酔いが酷い上に覚えているから、本人には大変な罰のような気もするけど。

「と、いうわけで。鯰尾さまは罰当番です。今日は見張りますからね〜?」

「えー。俺、なんにもしてないですよ！ちよつとこの間の青江さんのいたずらチクったり、沖田総司のはなしを振ったり、お酒の度数がほんの少し高いのとすり替えただけですよ」

「度数38がほんの少しですがそうですか。本丸の被害は甚大ですがね〜？」

「げ、主さん本気で怒ってる？」

ふふふ、と笑うだけにして、黙ってやれと道具を投げる。澁々ながらという体を装って、その口元は笑っていた。

ブルル、と王庭が鳴いた。

「…嬉しそうですね？」

「えー、だって、主さんずつといてくれるんでしょう？へへっ、独り占めじゃないですか」

「罰当番ですよ？」

「主さんが付き合ってくれるなら、罰当番も悪くないかなーって」

やりますよー！と元気よくスコップを頭上に持ち上げ、引つかかっていた土を頭に降り注いでいた。…お風呂沸かしておくよう言っておいてよかった。

とりあえず、とわたしも馬小屋に足を踏み入れる。せっかくジャージを着てきたし、少しくらいは手伝つてもいいだろう。骨喰さまはやらせておけと言ったけど、少し離れるだけで何をするか…。普段が普段だけにこの場における信用がない。申し訳ありません、でも、日頃の行いによる自業自得というやつです。

「あ、主さん。汚れちゃいますよ」

「大丈夫ですよ。うんつ、と、これ重い…」

藁の束。すでに括られてて塊になっていて、なかなか掴める引つ掛かりが見つからない。抱えようにも手が回らない。でもこれ、崩しちゃうと運ぶの面倒だし…転がしますかね。

「よつ、と。主さんは三国黒をちよつと出して。その間にちよちよつと藁を変えちやいますからね」

いつの間にか隣に来ていた鯰尾さまが軽々と藁を持ち上げてしまう。ああ、この細腕のどこにこんな力があるのかしら。

言われた通りに三国黒においで、と呼ぶ。すると擦寄るようになってきた。

「あはは、やだ、三国黒、そんなに舐めないでっ」

「あつ、こらバカ！主さんはダメだったらー！」

しきりに頬を舐められて、押さえる間もなく鯰尾さまに引き離される。そのまま抱き寄せられて、今度は鯰尾さまに捕まってしまった。その彼は三国黒と睨み合っている。

これでは甘えたい子供の取り合いみたいではないか。

「ほらほら、お掃除終しないといつまでたつても終わりませんよ」

「でもー」

「わがまま言わない。ね、離してください」

ちえー、と手を離して三国黒に牽制すると、再び藁を持ち上げてしきりの中に放り込んだ。いつの間に古いのをかき出していたのか。

手際よく敷き詰めると、「戻れよー」と三国黒の背を叩き敷居の中に戻した。あつという間、わたしはいらなかったようね。

それから着々と片付けが進み、日が天上の方に見える頃にはすっかり綺麗になった。今回ばかりは端から馬糞は捨てさせた。

「よーし、今日はこれで終わりですよね？ 頑張ったからご褒美下さいよ！」

「これ元々罰なんですけど……」

「気にしない気にしない。一緒にお風呂入りましょうよ。お風呂ー」

ズドン、と。鯰尾さまが言葉を続けようとしたそのときには、その横を通り過ぎた短刀が後ろの柱にまつすぐ刺さっていた。刀は投げるものではないですよ、もう。

「お兄ちゃん？ ふふつ、僕と一緒に乱れてみる？」

「うっわー弟と乱れちゃったら俺世間的に死ぬね？」

自分たちが刀だということを忘れているのだろうか、危うく馬の前で殴り合いになりそうだったので押しとどめると、掴み合っていたお互いの髪をようやくと放した。乱さまが服についた土を払う間に鯰尾さまが柱に刺さったままの刀を抜き取り手渡す。

まったく、仲が良いのか悪いのか。

くすつ、と小さく笑うと乱さまは「仕方がないなあ」というように苦笑して、鯨尾さまは「ちえー」と言いながらもどこか楽しそうだった。

安定さまと昔馴染み

通学と出陣を再開して完璧に日常に戻った。そろそろ、と声をかけたら全員での宴会もお開きになった。まだ個人的に数人でしているのはあるようだけど。来月は少し切り詰めないといけなきかもしれない。

そして何回の出陣を経たか。何度の鍛刀を行ったか。すでにわたしがこの本丸に戻ってから五日経っている。とにかく久方ぶりに新しい仲間がこの本丸に増えた。

ちなみに、清光さまは今わたしの隣で口をあんぐりと開け唾然としている。

「大和守安定。扱いにくいけど、いい剣のつもり」

「初めまして安定さま。でもご挨拶の前に……わたしは出て行ったほうがいいですか？」

「へっ、いや、いいよあるじーごめん！続けて続けて」

再会して積もる話もあるかと思っただけで、余計なお世話だったかしら。

一通り形式的な挨拶と説明、それから恒例のお願いをして、三人で本丸を一周するこ

とにした。清光さまは、少し後ろを黙って付いてくる。

「ここが今清光さまの使っているお部屋です。部屋数の関係で一人部屋にはできないので、安定さまにはここに入っていたきたいのですが…」

「うんわかった。よろしくね、清光」

「あ、おう…」

ごもごもとはつきりしない口調。いつもの清光さまが影も見せない。一体どうしたのかしら。

「あつ、あるじ！俺料理当番手伝う約束してるから、行くね！」

「え、はーい」

慌てた様子で走って行ってしまった。まだ夕食の下ごしらえをするにも早いと思うのだけど。

「いいの？あいつ近侍なのに勝手してて」

「ええ。近侍は本丸を守ることが仕事ですから、わたしに付き従う必要はありませんよ」

腑に落ちないという顔。確かに、本来刀は常に持ち主と在るもの。自ら動ける体を持つたからといって、すぐにはなれないのかもしれない。

とたとたと軽い足音が廊下を曲がってきた。

「大将みつけ。あのさ、裁縫道具貸してくんねえか？うっかり枕破いちやつて…」

「あら厚さまったら。自分でできます？なら、わたしの部屋の机の横に道具一式入った箱がありますから、使ってくださいさ〜い」

「おう、さんきゅー」

またとたとと駆けけて行ってしまふ。枕を破いたのは何度目だったかしら。

「君は…」

「このか！」

「国俊さま？」

慌てるようにして飛び出してきた国俊さまに驚かされ、安定さまが口を閉じる。こんなに慌てるだなんて珍しい。

「今剣がなんか腹抱えて倒れてて！今薬研遠征でいないし！」

「えっ、場所は」

「今剣の部屋！」

言われて慌てて行ってみたら、うんうん唸りながらお腹を抱えている今剣さまが転がっていて、ついでにアイスクャンデーの袋がゴミ箱に二つ入っていた。

「今剣さま……」

「あるじさま、たすけてくださいっ」

「ズルしておやつのお時間でもないのにアイス二つ食べましたね」

ギクツと肩を揺らして転がり背を向ける。凶星か。

はあと安心と呆れからくる息を大きく吐いて、国俊さまに布団を敷くようお願いし

た。

「今剣さまは今日明日おやつ抜きです。それからその腹痛はお腹が冷えたことによる一時的な下痢状態なので、布団にくるまって温かくして耐えてください。薬はありません」

「ううっ、はい…」

もぞもぞと布団に潜り込む今剣さまを国俊さまに任せ、わたしたちは案内に戻る。
ええと、どこまで話したかしら。

「ええと、そう。ここではみんな、少しの決まりを守ってくれば自由に過ごしてくれて構いませんよ」

「あれは自由で片付けていいの？」

安定さまの指差す先、庭の池。

「…（）らー！！！」

「やべつ、見つかった！」

「鯰尾さま！他の方を巻き込まないでください！骨喰さま捕まえて！」

また鯰尾さまは馬糞なんかで遊んで…あとでまた罰掃除ですね。片付けはきちんとさせないと。

弟たちが彼のことは引き受けてくれたので任せて立ち去る。

ああ、落ち着いて案内もできやしない。

「…あなたは どうして笑うの？」

「はい〜？」

唐突な質問に意図が見えない。笑っていたかしら。笑っていたとして、不思議なことがあるかしら。

「君はいま怒っていたのにもう笑ってる。情緒が安定してないの？」

「…ああ。いいえ、そもそも怒っていたわけではありませんから。叱って、けれど兄弟が仲良しなのは微笑ましくて。羨ましいな〜って」

「ふうん……？」

よくわからないという風に首をかしげる。
というか……

「あの、ほんと今更なんですけど、本来はこんなに汚くないですからね？穴とかはちよつと暴れちゃつて、まだ直していかないだけですから……」

「え？そうなの？てつきりこれが当たり前なんだと思つただけけど」

「よし、明日大掃除を決行しましょ」

これはいけない、デフォルトなんかじやないのに、新しい方にこの姿を見せてはいけなかった。やはり片付けてからお喚びするべきだった。

「おままごとみたいだね」

「……そうですね、あなた方に言わせれば、人間ごっこですから。でも今は必要なことなので、安定さまもお手伝いくださいね？」

「それはいいんだけど。でも僕は君を主だとは認めないよ」

最初の会話でわたしが審神者であることを認め、友人という扱いを受けることを了承し、ここで生きることを受け入れた。けれど、それとこれとは別だということか。

「僕の主は沖田くんだけ。彼が死んでも、僕は沖田くんの刀だ。それは譲らない」

「はい、結構です。沖田総司が愛刀、大和守安定。あなたの主の生きた世界を守るため、どうぞご自身を振るってください」

「…言っておいて何だけど、それでいいの？」

「ここがわたしの部屋ですよ、と立ち止まる。頭に入れるように辺りの景色と一緒に眺めている。

「この方は、安定さまは素直だ。思っていることをすぐに口に出す。思っていることをそのまま順番に考えずに喋るから、要領を得ない。」

「…言いたいことはわかりますが少し考えて喋っていただけですか？あなたも人の心を得て思考することができるようになったのですから。徐々に構いませんから、慣れてくださいね」

「…あ、ハイ」

にっこりと見上げると、安定さまは冷や汗を流していた。あらあら、そんなにわたしは怖いのかしら。喧嘩した時もそうだけど、自分では気付かないものね。

「そうそう、書き記してあるものを後で見るとは思いますが、わたしの仕事中に部屋に入ってきてはいけませんよ〜?」

「…君は本当に堅気の人?でも、そういうの、いいね」

「あら褒められた。有難うございます〜」

ふふふと笑うと、安定さまは少し引きつった笑いを返した。

「あるじ〜って安定!?あるじ怒らせたらダメだよ!」

「清光さま。怒ってませんよ、ねえ」

「うん。ちよつと人とはなにかを改めて教えてもらってたところ」

んんん?と首をかしげる清光さま。ねーとこちらの二人で顔を見合わせて笑えば、な

おのこと理解に苦しむようだった。

「清光さまはなにか御用だったのでは？」

「え、あ、小夜が出かけたいからって探してたよ」

「そうでしたか。それはそうと、清光さま。安定さまと相部屋は嫌ですか？」

「……」

パツと顔を背ける。この方に限って本人の前だからと遠慮するようなこともないのはよく知っている。普段から言いたいことは言うのだ、黙っている方がおかしいと考えるべき。

安定さまが「そうなの？」と聞くと、少し罰が悪そうに頬を掻いた。それはほんのり桃色に色づいている。

「…ちよつと、昔馴染みは気恥ずかしいもんだな、って気まずかっただけ。でも、嫌なわけじゃないから。…ん、」

「なに？」

「手！」

ずいっと出された清光さまの手に、同じように、でも首を傾げながら自分のそれを重ねる安定さま。ぎゅつと握って振り回す。

「これ、握手。よろしく、とか、仲間だよ、とか、そういう意味ね!」

これでオツケー!といつもものように笑う。ふふつ、と私も笑うと安心したように微笑んだ。

では、と清光さまに後を任せて背を向けると、安定さまの声に呼び止められた。

「お嬢!」

「…えっ、わたしですか?」

「そう。ああまで言っただけで主呼びもなんか変だし。あの、ありがとう」

「はーい?」

何かお礼を言われるようなことをしたかしら?

「清光とか、ここにいるみんな、お嬢がお嬢だったからこういう性格になったんだよね。元々の個性はあつたとしても、曲がらなかつたのは君のおかげだよ。だから、」

「わたしは何もしていませんよ。だからきつと、みなさんが真つ直ぐなのはそうありたいとご自身が思ったからでしょう。わたしはそう思えるような本丸を作るのもお仕事ですからね」

では、と再び背を向ける。また呼び止められることはなかつたが、背後から聞こえる二人の楽しそうな会話だけで十分だった。

堀川さまとお片づけ

飲み会の残骸の片付けと暴れたりして壊れたものを直すのも含め、今日は一日本丸の大掃除をした。

本当にこういうことが得意らしい堀川さまが先頭に立って働いてくれて、やっと落ちていた頃には本丸中がピカピカになっていた。休日を一日掃除に費やすのも悪くないかもしれない。

ジャージを脱いでワンピースに着替える。日暮れが近いせいかな少しだけ肌寒い。長袖のブラウスを羽織り、夕食の匂いをたどった。今日はカレーな気がする。

厨に向かう途中、何故か一つ離れたところにある霊力を感じて振り返った。視線の先には鍛刀所しかない。誰かいるのだろうか。

石の道をサンダルで進む。中を覗くと職人がいつものように動かず、ただ黙って座っていた。彼らは本丸の不思議の一つである。けれど、それだけだった。

この辺りのはずなのだけど。

一度出て辺りを見渡す。すると、紫煙の匂いが鼻をくすぐった。

「…あれ、見つかつちやつた」

「堀川さまでしたか。それは、煙管？」

建物の裏手、資材を積んだ影。敷地の塀との間に、建物に寄り添う形で置かれているベンチに腰掛けている堀川さまがいた。

邪魔をしたかと一瞬思ったが、隣に座るよう促され、導かれるままに腰を下ろした。
あ、こつち風上だ。

「この間買い出しを任せられたときに見つけてね。もちろん自分の給料で買ったよ？」

「そんな心配はしていませんが…いつもこんなところにいたんですか？」

「一人になりたいときは、かな」

ふうつと煙を吐くと、用意しておいたのだろう灰皿に灰を落としてしまった。

「よかつたんですか？まだ残っていたようですが…」

「こどもの体には悪いからね」

そうやって頭を撫でる。大きくて温かい手が乗せられたまま、反対の手に持たれている煙管を見た。

綺麗な形。わたしの時代ではほとんど見られなくなってしまっている。

冷たい風が吹いた。ひやりと撫でられる感覚に肩を揺らす。思わず腕をさすってしまった。

「戻る？」

「いえ…堀川さまがいいのなら」

「いいよ。じゃあ、これ着ておきなよ」

そうやって自分のジャージを肩にかけてくれる。温くて柔らかい。自分はアンダーウェアとシャツだけだというのに、寒そうな素振りを一切見せなかった。

ここで寒くないかと聞いたり断ったりするのは、多分いけないのだろう。好意に甘えて袖に手を通すことにした。

後ろに手をつきながら足を組む。それだけの動作がどうも男らしい。こんなに線の細い方なのに。

「堀川さまくらいですよ、わたしを子ども扱いするの」
「そうかな」

ええ、と微笑う。

「みんなは審神者としてわたしに接したり、女の子として年下として可愛がったりしますけど、堀川さまは個人としてではなく一般的な子どもとしてしか見ていませんでしょう？」

口元に笑みを浮かべて黙る。流し目が語るのは肯定かしら。

けれど、距離を置いていることに否定はしなかった。審神者と刀という立場を考えれば当たり前のことかもしれないけど、堀川さまだって友達になつてくれるって言ったのに。

「ねえ、主さんも隠し事つてあるでしょ？」

にっこりと笑ってシラを切る。なんのことかしら。

「審神者業のことじゃないよ。機密事項とかそういう話じゃなくて、主さん自身の話。主さん、たまに笑顔を貼り付けたような顔をするから」

「…それは同族だから気がついたということですかね〜」

なんの事かな、と今度は堀川さまがシラを切ろうとする。

こんな応酬、なんて不毛。わたしたちはお互いにバレていると分かっているながら隠し事を続ける。

「…堀川さま、他言無用ですよ」

「僕も秘密にしてくれると助かるな」

これで共犯というわけだ。

こびりつけた笑顔を剥がし、素顔を出す。いつも笑っている堀川さまも笑顔を消して、また煙管にタバコを詰めた。火を擦って差し出す。火を迎えに来る仕草もまた少しガサツで、普段の物腰柔らかなお兄さんは何処へやら。

「政府はまあいいんですよ、皮肉混じりでも基本生活ややり方に干渉しませんから。でも同期の審神者共が五月蠅い。刀剣を蔑にする発言を息を吐くように言い続ける」

「手入れの必要はない、使い捨てにするべきだ、かな」

「ええ。戦場に送り込んで、大して練度もあげていないのに怪我を無視して進んで、折れたら使えないと罵り次を使う。己の浅はかさは柵に上げるんですから巫山戯てる」

ふうと紫煙が上がる。言葉遣いが荒くなったのに咎めないでくれるのはありがたい。実はそう大人しい人間ではないのだ、わたしは。

「…僕はね、贗作かもしれない」

それは事実ではない。けれど偽りだとも言い切れないのが現状だ。

歴史は日々変化する。新たに判明したことによって簡単に塗り替えられる。その中でも文献や記録が見つかっていないものは確信を持たずに世に晒されることがあるからいけない。言うなれば堀川さまもその被害を受けている一つだ。

「でもいいんだ。和泉守兼定と共に土方歳三を主人にしたことは事実だからね。だから

「僕自身のことでは悩むことはない」

けれど、と続ける。

「これはいただけないんだよね」

不意に伸ばされた手に避ける暇もなく捕まる。頬に添えられたそれは、指を伸ばして目の下を擦った。驚きのあまり言葉が出てこない。…バレていたのか。

「審神者ってあんなに仕事あるものなの？」

「…毎日報告書と本丸整備と資材管理、といったところですかね」

「あれはそんなものじゃないよね」

怒ってる。わたしに対して怒っているのか、それとも政府か同期にか。どちらにしても、普段温厚なこの堀川さまが怒りをあらわにするなんて未恐ろしい。

擦られた化粧の下は、きつと隈が見えてしまっているんだらう。最近では学校の宿題と資料整理で睡眠時間を削っていたから、夜短時間の深い睡眠では体力回復に追いつかな

くなってきた。それが一番に現れてしまったのがこれだ。

添えられたままの手に自分のそれを重ねる。温かさを感じるように頬を擦り寄せた。

「…ちよつと無茶しましたからね。ただでさえ学業や処理能力の方でしか成績を出さなかつたから、これぐらいやって当然とでも思っているんでしよう」

この本丸だつてわがままを言った書庫だつて、全部わたしに政府の実務を回すための言い訳になる。報酬を与えたのだからそれに見合う仕事をしろと。実際、そこいらの本丸よりははるかに効率よく実績を上げているし、刀剣回収率だつて決して低くはないのだけだ。

「それに仕事を回してミスをすれば、それを理由に処分できるのでしよう？」
「…主さんは、全部わかつた上で引き受けてるんだ。ほんと、腹立つなあ」

頬に添えられていた手が離れ、その指が髪をすくつて離さない。不意に距離を縮め、至近距離で視線が交差する。

「じゃあ、いま僕が主さんを隠したら、お偉いさんたちは困るかな」

「…どう、でしょう。使い捨ての駒なら、いくらでもいるでしょうし」

「そうだね。なら止めておこうか」

細められた目はまるでわたしを見ていない。わたしの向こうに政府を、敵を見てい
る。

ほんぽんと頭を撫でると、手をわたしから離して立ち上がった。

「戻ろう。そろそろ夕飯の頃合いだ」

引かれる手に冷たさと温かさのどちらもを感じる。次に見せた顔は、すでにいつもの
お兄さんに戻っていた。

「……」

「堀川さま……」

何でもないよ、と振り返る。風が声をかき消そうと必死になったようだった。

「君は僕たちが守るから」

「…はい、ありがとうございます」

うん、と頷き笑ってまた前を向く。手を引かれたままのところを乱さまに見つかって茶化されたけど、彼は笑って受け流してしまった。

『君が本当に、ただの子供だったらよかったのに』

ごめんなさい、本当は聞こえてました。でも、どういう意味ですか？わたしにはわかりません。聞いたら答えてくれたのかな。

歌仙さまとお菓子作り

「じゃあ。縹、何かあつたらすぐ呼んで」

「わかつてます。ほら、他の本丸も待たせているのでしよう？紫黒こそ何かあつたら呼んでくださいよ〜」

片付けまで手伝ってくれた紫黒が政府に呼ばれ帰って行った。彼だつてこの本丸だけを担当しているわけではない。聞いた話、あと二つ掛け持っているらしい。通信役も簡単ではないだろうけど、彼が無事に仕事を行えることを祈るばかりだ。

そうして今日、また新しい仲間が増えた。次郎さまだ。太郎さまはいつも通り涼しげな顔で「よく来ましたね」と言っていたけど、桜が彼を隠すくらいに舞っていたから、本当はとても嬉しかったのだろう。

まあ酒飲みが増えた、という問題は本人に片してもらおう。その分働いて貰えばいいのだ。

そうして本日は秋田さまと乱さまのお願いである『わたしの手作りのお菓子』を作るべく、昼食後にわざわざキッチンにいるというわけだ。明日の月曜日から学校にも復帰

するし、みんなに一日中構えるのはまた暫くお預けになってしまう。

「さて、始めようか」

「はい」

お茶請けが欲しいという歌仙さまと一緒に作ることになったのは成り行きだ。

さて、今回はクッキーとフルーツタルトを焼こうと思う。

「君のお手並み拝見といこうか」

「包丁使わなければそう時間もかかりませんし、そもそもわたしだつてできないわけじゃないですっつ」

もう！と笑いながら並んで作業を始める。先にタルト生地を焼くから、まずは小麦粉です。

このキッチンには色々と器具が充実している。もともとそんなに料理をしないわたしは最低限のものを揃えたただけだ。けれどいつの間にかレンジがオーブン付きに変わっていたり、中華鍋があつたり。さすがに色々な器具を両手に抱えて帰ってきた時は、清

光さまを問い詰めた。

「俺たちってここにきてから初めてご飯ってのを食べたわけだけど、最初は必要だから、って口に入れたんだ。でもそうじゃなくて、今は必要だけど食べたいから、ってなつて。みんなで貯金して買ったの。レパートリーも増やしたかったし」

爪紅も我慢したんだよ、とちよつと自慢そうに笑う。充実させたこのキッチンは満足
のいくものになったようだ。

手を動かしつつ互いの手元を観察する。どうやら歌仙さまは白玉を作るようだ。あ
あ。パフエにしたい。

歌仙さまと小夜さまを筆頭に、数名の方がよくお茶を飲み集まっている。そういう
時は、他のみんなはそう近づかない。何故なら少し騒がしくすれば「万死に値する」か
らだ。まあそこに清光さまが混じっていた時は少し驚いたのだけだ。

「そーいえば君に、ひとつ前から聞いてみたいと思っていたのだけどね」

「はーい？」

「君は僕たちを家族だといいい友人だという。僕はそれで構わないし、他のみんなもそれ

でいいと思つていようだ。けれど、断られたらどうするつもりだったんだい？」

むう、それは考えていなかった。だいぶまとまつてきた生地を型に広げ、空気を逃がすように押し付ける。それを予熱しておいたオーブンに入れながら答えた。

「そうですね。それならそれで放つておきます。仕事だけはしてもらいますけど、わたしと本当に関わりたくないというのなら近侍にはしませんし、他で関与もしません。それだけですな」

「ほう？」

「あなたがたの生懸つてまだ未確認のことが多すぎるので、審神者はその観察の仕事もあるんです。だからブラックと呼ばれるような男士に対してひどいところも、こうして家族のように生活するところもある。そして政府は報告だけさせて他一切に口を出さない。なので、それはそれで報告するだけです」

まあわたしはそれも気にくわないのですが。

クッキー生地を作るべく今度は溶かしておいたバターを崩す。その間に歌仙さまは「そうか」とつぶやきながら白玉を均等に丸めていった。

「そういえば昨日は堀川と一緒にいたようだけど、何かあったのかい？」

意識すると『わたしと戻ってから彼の様子がおかしかったが理由を知っているか』かしら。表面上いつも通りでも、わかる人にはわかつてしまったのだろう、あの押さえ込んでいる霊力が。

これは最近仲間が増えてきて気がついたことだが、この本丸にいる男士のうち、わたしの居た時代まで現存する刀より既に本体失われた口伝や書物にある刀の方が霊力を持つているようだった。例えば加州清光、例えば今剣、例えば葉研藤四郎、例えば堀川国広。霊力を大きく持たないと姿を保っていられないのかもしれないとまではわたしの勝手な推測だが、それを用いた戦闘能力には目を見張るものがあり、成長も目覚ましいものだった。閑話休題。

「ちよつと気が立っていただけですよ。現に今朝は元どおりでしたでしょう？」

小麦粉をさつくり混ぜた生地を絞り出し袋に詰めて、天板に敷いたクッキングペーパーの上に一つずつ可愛らしく絞っていく。ドライフルーツでも飾ろうかしら。

「どうも彼らは少し怖いところがあるからね。まあ主が平気だというならそうなんだろうね」

歌仙さまの言う「彼ら」は現存しない彼らだ。まあそう思うのも仕方がない。浮世離れというか、言い方を変えたと少し戦狂いをしているふう。死に頓着しなさそうで怖い。自身が折れることをなんとも思わない節がある。けれどキチンと帰ってきてきている。

「ふふ。堀川さまは、ちよつと照れますけど実の兄よりお兄ちゃんって感じですよ」
「それは嬉しいなあ」

おや、と歌仙さまが振り返る。わたしは振り返る前にびつたりと後ろにつかれ、覗き込んでくる目に見つめられた。

「クツキー？」

「はい。堀川さまは？」

「手合わせが白熱してたから水分補給が必要かな、と」

「ああ、今日は同田貫と小夜だったか。小夜はあんなに小さな体だけど、太刀にだって負けていないからね」

昔馴染みだからか自慢げに言う歌仙さまに二人して小さく笑をこぼす。そうして堀川さまは大きめのペットボトルに水を入れて持つて行った。よく周りを見ている方だ、本当に頼れる。

しばらくはぐつぐつとお湯が沸く音だけが響いた。たまに白玉が落ちる音もする。

やっと焼きあがったタルト生地を出し、温度を設定し直してクツキーを入れた。タルトを冷ます間に乗せるフルーツを用意しましょう。

「僕は作り終えたから手伝うよ。缶を開ければいいのかい？」

「はい。あ、手を切りませんよう」

言う前に手慣れた手つきで開けてしまうから、多分なんでもやったことがあるのだろう。我が本丸のキッチンを任せている彼らは頼もしく、おかげで美味しい食事を毎日食べることができる。もっとみんなが色々とできるようになるよう、わたしがしなければ

ならないことは多そうね。

* * * * *

「さあ、できたかな？」

「はい。どうですか？」

フルーツをふんだんに使ったタルトとドライフルーツを散らしたクッキー。作りすぎた気もするけど、彼らが喜んでくれたらいいな。

山姥切さまと本音の話

堀川さまが興奮のあまり固まって動けなくなつたのは、この日の夕方の特筆すべき出来事の一つだ。なぜなら山姥切さまに続き和泉守さまがいらつしやつたからだ。これは堀川さまにお知らせしなければと二人の元へ呼んだところ、どちらを先に喜べばいいかと固まり、動かなくなつてしまった。結局、二人まとめて抱きしめた堀川さまの目には涙が浮かんでいたと思う。抱きしめられた二人がムスツと頬を染めたのは記憶に新しい。

それが一昨日のこと。今日の和泉守さまは歌仙さまと堀川さまに任せて遠征に行つてもらつてゐる。無事に帰つてきてくれるといいのだけど。そして山姥切さまは、学校から帰つてきたわたしと畑に向かつてゐる。

「じゃあ、頑張りましょ〜」

「ふん、写しには土いじりがお似合いか…」

「もう…」

言いながらもしやがんで雑草を抜いていく。因みにその背に白い布はない。引っぺがして代わりに麦わら帽子をかぶせてある。基本は好きにすればいいから、せめて部屋に汚れを散らす可能性を減らしてくれと頼んだのだ。問題は頭と顔を隠したいということだから、渋々ながらも了承してくれた。綺麗な顔なのに、というのが禁句なのも理解した。

「山姥切さま、少しは人の体に慣れましたか？」

「…写しに何を期待しているのやら」

「確認事項です」

はい、とゴミ袋を差し出す。片手を突き出すようにして抜いた草をそれに放るとまた下を向いて作業を再開した。

「…悪くない。箸はまだ使えないが…よく文字など書こうと思うものだ」

「ああ、歌仙さまですね〜？でもそれも慣れですよ。文字は読めるようですよ、時間の問題でしょう」

そういうあなたも書こうとはしてみたのですね。左手に墨の跡。先に鉛筆をお貸しした方がよかつたかしら？

特に会話もなく黙々と作業を続ける。合間に見た横顔は土に汚れながらもまんざらでもないようだった。

黙々と作業を続けること一時間。まだ体に慣れていないからなのか、山姥切さまが足を煩わしそうにさすり始めた。痺れたのかしら？

「少し休憩しましょう。あそこで手を洗って、縁側で待っていてくださーい」

頷くのを見て背を向ける。あ、蛇口のひねり方って誰か教えてただろうか。

大福とお茶を持って縁側に戻ると、白いお化けのようなシルエットが座っていた。

「お待たせしました。やつぱりそっちの方が落ち着きますか？」

「ああ…。やはり一番しつくりくる」

「衛生面だけ考慮していただければまあ構いませんから」

間にお盆を置いて座る。湯呑みを手渡すと、恐る恐るというように両手で受け取った。わたしが口をつけると真似をする。どうやら熱かったようで、慌てて口を離した。

「お部屋は窮屈ではありませんか？」

「別に。元々広めの部屋ではあるし、兄弟たちも持ち物が少ない。布団を敷いて寝るだけなら支障はない」

ただ、とぎゆつと湯呑みを持つ手に力が入る。

「俺なんかと同じ部屋でいいのか…と、思ってしまった。所詮俺は写し、彼らが気まづくないかと、そう…」

「うーん、この本丸の彼らに限って言えば、ないでしょうね」
「なぜ言い切れる」

眩くように、半ば懇願のように言う。優しい彼らのことを疑うことすら、彼にとつては苦痛なのかもしれない。優しいが故の脆さ。やはり、山姥切さまを先に内番に回しておいてよかった。

「堀川さまは、自分を贗作だと言いました。山伏さまはそれには何も口出ししません。言い方が悪いかもしれませんが、彼らにとつてどうでも良いことなのです。模造であれ贗作であれ他の写しであれ、同じ堀川派と呼ばれる刀を兄弟と呼ぶ。人間だったらこう簡単にはいきませんが、あなたたちは刀なのですから。それに思いやる気持ちがあるとすることは、少なからず彼らに好感を持ったということでしょう？」

「……」

あら、黙られてしまった。私の推測は間違っていたかしら？よりうつむいてしまう。風が庭の松を揺らし、池では鯉が顔を出す。鹿おどしの音がやけに大きく響いた。

「それでは不満か」

山姥切さまが勢いよく振り返る。手元のお茶が少し土の上に落ちた。

「主殿は正しい。堀川は真作とも贋作とも言い切れないが、拙僧はそれでいいと思つて
いる。それはさて置き、だ兄弟。拙僧はお主を兄弟と呼びたい。国広の第一の傑作を、
兄弟と呼ばせて欲しいのである。拙僧たちの気持ちは言った。後は、お主の気持ちだけ
なのだ」

微かに震える手から湯呑みを受け取ると、驚いた顔をした後何とも言えない、叫びた
ような顔になり、それから口を一文字に結んで拳を握りしめた。

「お、俺は…」

小さな声。けれどきちんと届く声。わたしたちはおし黙る。

「俺は…写しだし、彼らのように明るくもないし、…けれど」

立っている山伏さまを見上げるように顔を上げると、頭に深くかぶっていた布がふわ

りと落ちた。

金色が、波を打った。

「初めて来たとき、会ったとき、二人に兄弟と呼ばれて嬉しかった……泣いて喜びながら抱きしめてくれたとき、よく来たとき髪をかき混ぜられたとき、温かくて、初めて喜びを感じた。だか、だから、俺も……」

ぼろつと、涙がこぼれた。それに気づいてか気づかずか言葉が止まった。

それはぼろぼろととめどなく溢れ続ける。やっと気がついたのか片手を頬に伸ばし、首の後ろの布を引いた。顔はすっかり隠れてしまったが、嗚咽だけが漏れ聞こえてきた。

その白い頭を優しく両腕で包み込む。幼子をあやすように撫でていけば、座る背中側からわたしたちを包むように手が回された。山伏さまの逞しい腕を感じて、山姥切さまは小さく、けれど確かに笑った。

「疲れてしまったのかな」

「ふふ、よく働いてくれましたからね」

蜂須賀さまが持つてきてくれたブランケットを、わたしの膝の上で眠る山姥切さまにかける。布が落ちた頭を撫でると一瞬眉をしかめてまた穏やかな寝息を立て始めた。

「山姥切は少し考えすぎだろう。国広一の傑作だと自負しているのなら胸を張っていればいいんだ」

「そうですね。でも、本音が聞けたので結果オーライというやつです」

「…兄弟とは、」

何かを言いかけてやめてしまったが、それ以上追求することはしなかった。

彼は虎徹、贋作や写しなどというのに思うところがあるのだろうと勝手に思った。

和泉守さまと大事なこと

「あーるーじー!!」

「わわっ、駄目ですよ、主さん工作中!ちよっ、こら和泉守さん!!」

パンツと大きな音が響く。

ここはわたしの執務室兼私室。1日のうち数時間だけ集中して仕事を行うため、そのときだけ近侍に全権を託し外の壁に『執務中』の掛札をかけた上で部屋にこもる。そうすることによって集中力が増し、短時間で処理を終えることができるからだ。何故短時間で終わらせたいかって、そんなのみんなとの時間を長く取りたいからに決まっている。

そういうわけでこの本丸十ヶ条にも『執務中の審神者の部屋への近侍以外の立ち入りを禁ず』としたのだけれど、見ていないのかしら??

ちなみに大きな音は、わたしが勢いよく開けた襖が立てた音だ。

「…今、忙しいのですが近侍も通さず制止も聞かずわたしの仕事を邪魔してまでいう必

要のある用件がもちろんあるということでもよろしいですね第一もうすでに早い方は寝ている時間でしあなたも勝手に起きているのも夜更かしするのも構いませんが騒いで他に迷惑をかけるのもここまで起きていたでいてる鯰尾さまの手を煩わせるのも喜ばしいことではないことを当然理解した上での行動ですよね？」

それでも言いたいことがあるのなら言ってみろ、と微笑む。随分引きつっているだろうけど。

「へっ、あつ、の、…(うお)」

ひゅーんと廊下の向こうから飛んできた何かがまつすぐ和泉守さまの頭に命中する。おやあれは…

「いーずーみーのーかーみー!？」

「げっ、二代目!」

やはり歌仙さまか。あの巾着には見覚えがあった。お気に入りを投げさせて申し訳

ないことをしたかしら？」

ズンズンと、けれど決して走らずに近寄ってきた歌仙さまは、もう一度今度は自分の拳で和泉守さまの頭を殴った。結構いい音がした。

「悪いね主。暇で仕方なくて戦に出すよう直談判しに来たようなんだ。止めたんだけど聞かなくてね。まだ遠征で体を慣らすべきなのに……」

「だって加州は最初つから出陣したんだろ！俺だっていいじゃねーか」

「彼はまだ遠征がなかったから仕方がなかったんだ、和泉守とはちがうんだよ」

もう一度謝った歌仙さまは、和泉守さまの耳を引っ張って連れて行こうとした。暴れる和泉守さまも、歌仙さまの睨みにはかなわなかったようだ。

「……はあ。歌仙さま、明日の近侍ですが、和泉守さまと交代してもいいですか？」

「……まあ、君が決めているのだからそこは何も言わないが。いいのかい？」

「はい。暇つぶしついでにちよつとわたしも体を慣らしておきます。一度薬研さまと喧嘩もしてしまいましたし、いいでしょ。あ、鯰尾さまもありがとうございました。今日は諦めますのでもう休んでいいですよ」

「はーい」

とんとん拍子に自分を置いて進む話を聞いていた和泉守さまが、歌仙さまの手を振り払って詰め寄ってきた。

大きな犬みたい…なんて言ったら怒られそうね。

「いいのか!？」

「ええ。それで賭けをしましょう。内容はまた明日です」

「わかった!」

とても良いお返事。

それを横目に、歌仙さまと鯰尾さまはなんとも言えないように苦笑していた。あらあらまつたく、勘のよろしいことで。

そうして翌日、日の出とともに和泉守さまはわたしの部屋にやってきた。予想して早く着替えておいてよかった。

「俺はなにをすればいいんだ？」

「おはようございます。まあ落ち着いてください」

言いながら部屋を出てキッチンへ向かう。今日の食事当番は青江さまと安定さまと清光さまだ。

「おはようございます。お三方にお願いがあるのですが…」

「なあにーあるじ。珍しいね」

「はい。証人になっていただきたくて」

こてんと首をかしげる清光さまと安定さま、それからなんとなく察したような顔つきで微笑する青江さま。それらを前に、わたしは和泉守さまに向き直った。

「都合のいいことに今日は土曜ですから、この一日で、わたしにこれを当てられたら第三部隊に組み入れましょう。わたしにすら勝てないようなら死に行くようなものです、わたしの采配に従ってもらいます。いいですか?」

「ちよつ、あるじ?!」

「おう分かった!」

渡した小さな巾着を受け取ると、和泉守さまは嬉しそうに中身を見た。わたしはそれにビー玉を十だけ詰めておいた。

「打撃などは禁止、わたしに触れるのも禁止、防御はカウントしない、他に迷惑をかけない、ビー玉は一つ一度までの使用でなくなったらその時点で終了、時間は三分後の六時半から今夜七時まで、よろしいですか?」

「わかった。首洗って待つてろよ!」

ふはははと高らかに笑いながらキッチンを出て行く和泉守さま。それを見送るわたし。

「では、そういうことで」

「お嬢平気なの？」

「ふふ。これでも紫黒より道具の扱いには長けているんですよ」

それをどういように取ったか知らないが、三者三様に笑ってそれ以上はなにも言わなかった。

*** **

わたしと和泉守さまの勝負はたちまち本丸の全員の知るところとなり、必要以上にみんなが近づいてくることはなかった。

一投目は開始五秒後、縁側を歩くわたしの目の前からまっすぐ投げられた。こうも隠れず隠そうともしないのだから避けるのは簡単だった。

二投目は背後からだったが、これも躲した。

三投目からは少し策を練ってきたようで、時に何かに隠れて、時に二つを一度にとし

てきたが、それも角を曲がって外させた。

「主は背中に目でもあんのかよ！」

「まさかく。ほら、着物でハンデもあげてるんですから頑張つて下さ〜い」

ひらひらと挑発すれば、簡単に怒つて一つ投げってくる。これで、あと四つ。

途中昼餉を取ったが、その間に投げられた一つは箸の後ろで打ち上げた。睨んだらそっぽを向いて冷や汗を流していたから、食事中はもうやってこないだろう。

「だいぶ頑張るね、あいつも」

出陣を終えての帰り道、隣を歩く清光さまが呟いた。昔馴染みだから言いたいこともあるのだろう。

「でもあれ当たつたら結構痛いと思うよ？」

「まああれくらいで仕事の邪魔をしないでくれるのならそれくらいは」

「おう、当たる気無いね」

ふふ、と笑う。だってこんなにわたしに有利なゲームはありませんもん。

帰還後、待ち構えていたように和泉守さまは詰め寄ってきた。出陣あとは疲れているとも思ったのか、また後ろからまっすぐ投げってくる。それを、懐から取り出した扇子の親骨で打ち返した。それが床に落ちて転がる。

「あと二つ。時間もそんなにありませんよ」

「チツクシヨー！」

でたらめに一つ投げられた。それはわたしの方ではなくて、広間でお茶を飲んでいた数人の方へ。

「前田さま！」

咄嗟に名前を呼んで間に入る。その直後、ガツツと木がえぐられるような音がした。

当然痛みも無い。どういふことかと振り向くと、乱さまが鞘ごと自身を構え立っていた。

「あんのねえ…黙って見てればばつかじやないの!?! 本来審神者に食って掛かれば謀反となり処分されてもおかしくないのに、このかちやんは優しいからそんなことしないでくださいよ! あとねえ、最初は遠征ばかりなのは和泉守さんだけじゃないし、それはボクらが戦闘するための体慣らしでもあるから必要なことなの! それを自分のわがままで出陣させるとか、ちよつとはこのかちやんの思いを考えた!?! ボクたちに折れてほしくないんだよ、少しは考えてから行動しなよね!」

ツカツカと詰め寄りながらの言葉の猛攻に、後ずさりながら頷くしかできない和泉守さま。最後には首が折れるんじゃないかってくらい勢いで頷き続けていた。

「それからこのかちやん!」
「はいっ」

クルツと振り返った乱さまに、今度はわたしが睨まれる。初めてこんなに怒っているところを見たかもしれない。

「前田を守ってくれてありがとう。でもね、こうなった原因は、一割くらいはこのかちやんにもあるんだよ。それと、こんな危険なゲームはしないで。たかがビー玉でもボクたちが投げたら威力がおかしなことになる。当たり前どころが悪かったら本当に大変なことになっちゃうかもしれない。もつと自分を大事にして」

「…はい、すいませんでした」

神妙に頭をさげる。これは全面的に乱さまが正しい。決して負ける気も当たる気もなかったけど、万が一もあるのだ、考えておかなければならないことだった。

「よし。じゃあこの勝敗はボクが持つからね。和泉守さんは文句があるなら本丸の全員が相手になるから覚悟しておいて。このかちちゃんはお仕事。誰にも邪魔させないから終わらしておいで。はい解散！」

全員が相手に、と言われて疎んだのか、和泉守さまはそれからだいぶ大人しくなった。けれど出陣させるようになると、大人しかったのが嘘のように連日戦場に意気揚々と向かうようになった。

次郎さまと五虎退さまとおめかし

急に冷えこんだ金曜日。冬の訪れを告げるかのように冷たい風が縁側を歩くわたしたちの横を通り過ぎていった。

「さ、寒いですね〜」

「そろそろコートやら発注しますかね〜」

きや〜とくつつきながら暖かい広間に五虎退さまと入る。珍しいことに静かで、今日は新しく来た陸奥守さまと盛り上がり上がっていたから、そっちに行っているのかもしれない。とはいえ今日はもう仕事も予定もないので、好きにしてくれたらいい。

「おや、寒そうだねえ。ほらこつちに来てあつたまんな」

「次郎さま〜」

来い来いと呼ぶ次郎さまさまの前にはストーブ。その上には徳利が置かれているか

ら、一人で熱燗でも楽しんでたのだろう。

ぱつとわたしから離れた五虎退さまが走ってそちらへ行くと、後ろから次郎さまに捕まってその膝の上に収まってしまった。

「お一人ですか？」

「今はねえ。さつきみーんな道場に行つちやつたよ。アタシはお酒がまだ残つてたから遠慮したのさ」

「ふふ。お酌いたしましょう」

「ありがたいねえ」

袖で包んだ徳利を傾ける。五虎退さまは手を温めるように体を小さくして手をこすり合わせていた。

「ここはいいところだね。ちよつと働けば美味しい酒が飲める。審神者も可愛いしさあ」
「あら、有難うございます」

酒飲みの戯言にはつつこまないのが吉。余計に絡まれてはたまらない。

暫く三人で雑談をしていると、この場のお酒が切れてしまった。

「もう少し持つてきましようか?」

「ん、今日はいいや。それよりちよいと、付き合つてくれないかい?」

「はい?」

トラちゃんもおいで、と五虎退さまも立たされる。手を引かれて連れて行かれる五虎退さまにわたしもついていく。行き先はどこだろうかと考えるまでもなく、次郎さまたちの部屋に着いた。

どぞ、と通される部屋。中までは関知していないから初めて内装を見るわけだけど、すぐにどちらがどちらを使っているかわかった。笑えるほどに一目瞭然だった。

かたや整理された文机と桐タンス、かたやきらびやかな鏡台に化粧ケースと大きなタンス。まず色から違って面白い。二人を同じ部屋に入れたのはさすがに狭いかとも思ったけれど、この広めの部屋をうまく使っているようだった。

「トラちゃん、主さまは可愛いよねえ」

「へう、は、はい!だって、いつもにこにこしてるし、そのう…」

「そうよねえ。な・の・で、そんなアンタに次郎ちゃんがプレゼントをしちゃいまーす！」
さあ座りなさいと押さえつけられ、座らされる。そうして目の前に出されたのは、色とりどりの着物だった。

「兄貴がねえ、ぜーんぜん給料使わないで溜めてたから、だつたらつて買ってみたんだ。聞けばアンタ、全然着飾らないんだって？折角素材がいいんだから勿体無いって」

なのにね、と続く。

「兄貴つたら自分では渡せないなんていうからさ、アタシが代わり。ついだから飾つてやろうと思って」

「は、はあ」

「どの色がいいかねえ」

そうなつたらわたしは置いてきぼり。五虎退さまと次郎さまは目移りするように着

物を見ていく。

これは話の通じない、諦めたほうがいい事柄の一つ。おしやれとか自分を着飾るとか、確かに見栄を張ったり他人に見せるために必要なことなのだとは思うけど、まだ高校生だからと敬遠していた。そのため全然その手の知識がない。たまに友人が髪をいじってくれたけど、可愛いとは思っても正直全然わからない。

やっと決まったのか五虎退さまが淡い亜麻色の着物を両手に持つて差し出してきた。裾の方に様々な色の花が散りばめられている。

「主さま、これ、どうですか？」

「五虎退さまも選んでくれたんですか？嬉しいです〜」

受け取れば期待の眼差し。都合のいいことに仕切りまで用意されていて。まあもちろん断ることなんてできないわけで。

「…き、着替えてきます」

そさくさと仕切りの向こうに身を移したわけだ。

大きすぎず柔らかいそれは、抵抗なくわたしの体を包み込んだ。黄色によく映える黒い帯。帯にも花の模様が施されていて、大きな花束にでもなった気分だった。きつちりした着物を着るのは久しぶりで、なんだか少し気恥ずかしい。

「あの、一応着たのですが…」

「わあっ」

「ばあつと明るくなる、と言うか少し頬を赤らめる五虎退さまと、うんうん頷く次郎さま。これは、似合っているのか？」

「主さまは髪が綺麗な水色だから、この色が合うと思ったんです！」

そんな笑顔で言われたら嫌とは言えない。いや、嫌ではないのですが。

「着付けは完璧じゃないか。おいで、仕上げしたげる」

鏡台の前に座るよう促され、抵抗せず従う。

着付ける時に邪魔で適当に結った髪を解かれ、優しく梳かれた。

「ほんと、綺麗な色だね。自前かい？」

「いえ。髪は神に通じます。黒は他に埋もれてしまいますから、目立って見つけてもらえるように、だそうです。水色なのは、瞳の色に似せたんです。こちらは元々なんですよ」

くるくるとまとめられていく髪。この天然パーマは結う時にはやりやすいらしい。いつもと違うやり方で上げられた髪は垂れることなく、簪でお団子に収まっていた。横には編上げがされている。いつの間に。

驚くのもつかの間、今度は鏡台とわたしの間に次郎さまが割って入ってきた。

「さ、目をつむってておくれよ。動かないでね」

「主さま、どんどん綺麗になつてきますー!」

白粉は薄く、目元や頬にも薄く、最後に紅を引かれる。次郎さまが小指を離すと、漸く目を開ける許可が下りた。

鏡に映るはわたしであつてわたしでない。身綺麗に整えられたお嬢さんがおとなしく座つていた。

「どうだい? 見違えただろう」

ひひつ、と悪戯つぽく笑う次郎さまに反応できない。化粧や服装でこんなにも変わるものなのか。

こんな姿を知り合いに見せてもきつと気づかれないだろう。それくらい変わつて、もう化けたと言つても過言ではない。

「主さま、みんなに見せに行きましよう?」

「行つといでー。ほら、しゃんとしてみんなのハートを掴んどいで!」

言われるがままに向かった大広間。歓迎会の二次会と称した飲み会に突然入ったわたしを見て、加州さまは驚いて石化した。でもそのあと触れない程度に近寄ってきたみんなに褒められて、絶賛され、たまにはこういうこともしたほうがいいかと思っただけ自分ではできそうにない。

五虎退さまと笑いあう。もし必要な時があつたら、また次郎さまに頼もうか。

鶴丸さまとさぶらいず

「よっ。鶴丸国永だ。俺みたいのが突然来て驚いたか？」

「わ、わあ〜…」

驚きすぎて間の抜けた声が出る。午前の出陣をすべて終えた日曜日の昼下がりに。いつもの通り朝に頼んでおいた鍛刀の終了を確認すべく来たら見たことのない太刀が出て来ていて、顕現したら鶴丸さまだったというわけだ。

「おや、驚きが薄いな」

「いえ、そんなことは。驚きすぎて声が出ないのですよ〜」

とりあえず、と恒例のお願いとルールの確認をして一通りの案内を終える。今日の近侍が薬研さまで助かった。この皇室御物を前にしても物怖じしない方はそう多くないだろう。まあ物怖じしないのと怖いもの知らずは紙一重なところがあるけれど。

それに、どうやら顔見知りであるようだし。

「ほんの一時だったが覚えてる。綺麗な顔して黙って座ってるだけの人形だったがな。まさかこんなにも面白い奴だとは」

「そうだったか。俺たちはあんま覚えてねえからなあ。ま、仲良くやろうや鶴丸の旦那」

互いの背を叩いて笑いあう。賑やかになりそうだわ。

「ところで審神者殿？ いや、君が審神者なんだよな？」

「ええ。なにか不都合がありましたか？」

「いやあ…うんうん、まあこの方が面白いよな」

はて、と首をかしげる。何を一人で納得しているのかしら。

「では鶴丸さまはとりあえず一人部屋でお願いますね。何かありましたら誰にでも聞いてください。わたしはちよつと約束がありますので…」

「あ、ちよつと待った」

「は？」

むにつ、と。伸ばされた手がわたしの体に。正確には胸に。

「やっぱり女だよなあ」

ニヤツと面白そうに笑った顔が見えた瞬間。

ドスツと大きな音がして。

鶴丸さまの後ろの柱が小刻みに揺れた。

「…あ、やだ、わたしったら…」

両手で振り下ろした短刀は紛れもなく薬研さまの本体で。つまりはわたしが刃を抜いたというわけで。

「ご、ごめんなさい薬研さま。貴方を勝手に…ああ、怪我とか、傷とかできていませんか？無意識で、こんな、」

「落ちて着け大将。大丈夫だ。かすり傷一つ負ってない」

ぼんぼんと背中を叩かれあやされる。ああ涙が出そうだ。びっくりした。まあ、と薬研さまがわたしを庇うように続ける。

「大将がやらなきや俺がやってたがな」

「そうやって抱擁するのがよくて俺は怒られるのか」

柱から引き抜いた本体を鞘に戻しながら薬研さまがニヤリと笑う。余裕の笑み。

「この審神者殿は俺たちの姉でもあり妹でもあり、友人でもある。家族だからと言ってやっていいこととやっちゃいけないことくらいあんだよ」

分かったら解散だ、と薬研さまがわたしの背を押す。その背中にかかった声は、とても楽しそうな色を含んでいて、つまり。

「……りゃあ、驚いたなあ」

それからの数日、鶴丸さまのサプライズはひっきりなしに行われた。いくつ引き出しがあるのかというくらい。それから質問が多く、日常のいろんなことに驚き、また感動していた。

蛇口をひねれば水が出て、陽の光は暖かく、中でも一番気に入ったのは食事という行為だったようだ。初日にはしやぎまわった鶴丸さまが、動けないと訴えてきたのは半日後。疲れることや休憩が必要なこと、食事が必要なことは自身で学んでもらおうと思っていたのだが、こんなにギリギリまで遊ぶとは思いもしなかった。そうして差し出したお団子はまた新しい驚きだったようだ。その日の夜も

「眠るとは！人間は大層面倒で面白いな！」

と子供のように目を輝かせながら床に就き、目を瞑るよう言えばわたしがどうするまでもなく寝息が聞こえてきた。どれだけ消耗していたのか。隣にいてくれた薬研さま

と苦笑したものだ。

そうして今日まで、ありとあらゆる驚きを本丸にもたらした鶴丸さまは、毎日楽しんで笑っていた。怒られるのも、ふざけるのも、話をするのもみんな楽しいらしい。歌仙さまも最初は控えていたが、今ではすっかり説教役だ。鯨尾さまと鶴丸さまが並んで怒られている図はすでに何度見たことか。

「今日はどんな驚きを届けようかな？」

「もう、また怒られますよ」

「君は初日以来怒らないな？」

「怒られたいんですか？」

「いやいや、と首を振る。できればわたしもあんなことはもう遠慮したいものだ。まさか神様に傷をつけるなんてこと、したくはないもの。」

「今日の俺は馬の世話だったな。行ってくるぜ！」

「はい。乱さまが一緒ですから、わからないことは聞いてくださいね」

と、送り出した朝。ぷりぷりと怒りながらわたしの元へ乱さまが抗議に来たのはその数時間後だ。なんと鶴丸さまが馬小屋へ現れなかったらしい。

あらあらこれはお説教案件ですねえ。

「鶴丸さま、今ならお説教とおやつ抜きでおさめますから出てきてください」

「鶴丸さんのおやつボクが貰うからねー！」

二人で探し回るも見つからず。実は馬小屋に隠れているのではないかと一人で向かったものの、誰かが隠れている様子はなかった。ううん、本丸内では靈力が充満してどこにいるかまではわからないし。一人で外れにいればまだしも…。

そうこうして蜂須賀さまから昼の支度ができたと呼ばれた。これで席についていなければ本気で探しにかからなければならぬ。念のために結界も調べてみたが、やはり誰かが触れた形跡はなかった。

「もう、鶴丸さまついたらー！こはん食べないんですか？」

人間の体には食事と睡眠が不可欠だと言ったのに！

しかし昼ごはん、これはいい機会かもしれない。みんなそろそろ大広間に集まる頃だろう。なら、霊力が分かるかもしれない。

そうして待つこと数分。うーん、ここはさつき通ったのだけど。それに、なんでこんな道の真ん中に…？

畑に向かうその途中。隠れる場所なんてない。けれど一つだけある霊力はここから感じるのだけど…。

「っ…?!」

落ちた。物の見事に落ちた。暗闇に真つ逆さま。

どうしてこんなところに穴が、とか、落ちて怪我したら、とかそんなことを思う前に、鶴丸さま見つけたら説教だけじゃ済まさないって誓ったから、わたしもたいした度胸だと思う。

どこまで穴が続いているのかわからなかった。どれくらいの時間落ちていたのか。衝撃に備えて頭をかばっていたけれど、来るはずの痛みはほとんどなかった。

「…つとつ、ふう」

砂利を踏みしめる音と人の温もり。まさかまさかときゅつと瞑っていた目を開くと、薄暗い中、わたしを見下ろす鶴丸さまが見えた。

「おっと、とりあえず君、怪我はないかい？痛いところは」
「…ありません」

そりやよかったと降ろされる。狭くてほとんど密着しているが、彼から触れてくることはなかった。

「よく受け止められましたね」

「そりやお待ち構えていたからな」

「はあ？」

両手を顔の横にあげて苦笑い。なにをしていたんだこのレア太刀は。

「落とし穴を掘ったことなんてすっかり忘れていてなあ」

「なにやっつてんですか、まったく」

「いやかしな、深く掘り過ぎたせいでこれは誰かが落ちたら大変だと思つてな。助けを呼ぶ前に落ちてきても平気なよう、待ち構えていたというわけさ」

「まず落とし穴なんて掘らないでください」

睨みあげれば竦める肩。これは反省しているのかしていないのか。

しかしお腹が減ってきた。探し回って疲れたのかもしれない。

仕方がなしに、鶴丸さまの外気に晒された両腕を弄つた。

「お？こんな狭い場所できやに積極的だな」

「顕現したばかりで何を言いますか。こんなことを神様にお願ひするのは申し訳ありませんが、ここから出るために手を貸していただけますか？」

「原因は俺だからな、やれることはやろう」

それでは、と両手を組ませる。その平を上に向けて、少ししやがむように促した。

「すみませんが足を掛けますね。合図したら上に思い切り投げてください」

「おいおいそんなことが出来るのか？」

「まあ、余程のことがなければ壁にしがみつくくらいはできますよ。幸い今日は洋装ですしね。」

鶴丸さまはそれ以上の言及を避け、足を掛けやすいように手を下げてくれた。もしかして、見付け出される前に自首しようというのかしら。わたしが居なくなったらみんな探してくれるだろうし…。自首の方が罪が軽くなるかはさて置くが。

「じゃ、せーので行きますよ…せー、のっ」

「とうっ」

力を入れた瞬間、タイミングよく押し上げられ、文字通り放り投げられたわたしは空中でバランスを崩し尻餅をついてしまった。まあ、地上に出られたからよしとしよう。

それにしても、よくあの細腕でこんなに投げられたものだ。さすが太刀というべきか？

「おーい、怪我はないかー？」

「つてて…はい。ロープ持つてきますのでちよつと待つててくださいね〜」

その後無事地上に出てきた鶴丸さまは、食事をしながら歌仙さまの説教を受け乱さまの文句を聞き、二度と落とし穴は掘らないと誓わされていた。わたしももう落ちたくないなので口を出さず見守る。

「なあ審神者殿」

「はい」

振り返るとそこには反省のかけらもない無邪気な笑顔。

「落とし穴、まだまだあるつて言ったら、怒るか？」

「〜っ?!全部埋めてくださーい!!」

こうしてイタズラが過ぎる鶴丸さまには、昔馴染みの薬研さまにお願いして同室になつてもらい、ストッパーを引き受けてもらった。現在では持ちっ持たれっ、仲良くやっているようだ。

蜂須賀さまと検非違使の話

燭台切さまが来て二日目。食卓が変わった。

来て早々、真つ先に興味を持ったのが料理だったらしく、今まで厨を任せていた加州さまや堀川さま、青江さまたちについて料理を練習していた。二時間で箸をマスターしたのはこの本丸での最短記録を塗り替える速さだ。

「ただいま。今から昼の準備するからね」

「お疲れでは?ご希望ですから出陣してもらってますが…」

「粟田口の子はスパルタだね。負けていられないよ」

ははっ、と笑う。まあいいならいいんですけど…。

その日の夕食も、贅沢しすぎない豪華な食事だった。満足して部屋に戻ろうとした頃、門の方から式神が飛んでくる。訪問者がわたしを訪ねて来た時のみ呼びに来てくれるできた子だ。

まあわたしを訪ねてくるのなんて一人しかいないのだけど。

紫黒が一通の封書を持ってきた。用件はそれだけのようで、まだ他にも行かなければならないらしく、門の前で少し言葉を交わしただけで次へ行ってしまった。

部屋に戻って封を開ける。明らかに政府からの通知であったが、いつもの定時連絡とは違って号外のような扱ひであった。

ざっと一読して立ち上がる。居ても立つても居られず、上に羽織るものも忘れて走り出し、一つの部屋を目指した。

「蜂須賀さまー！」

小声で、でも届くように。ただ一回の声で蜂須賀さまは障子を開けてくれた。

「どうしたんだこんな夜に。ああまたそんな格好で。寒いだろうから早くお入り」「すいません、失礼します」

まだ布団は敷かれておらず、文机に本が置かれ蝋燭の灯りがついていたから、きつとまた勉強でもしていたのだろう。最近本を借りることが多かつたし。

そんなことは置いといて、と差し出された座布団に座る。それから封書が届いたこと

を最初に伝えた。

「先に貴方には話しておいたほうがいいと思ひまして」

部屋につけておいた電子ケトルを蜂須賀さまがいじる。この間コートとや防寒具と一緒に発注したものだ。やはり部屋に一つ置いてよかった。差し出されたお茶は温かく、梅の香りがした。

「話すことはまとまったかな？」

「はい。蜂須賀さま、わたしが謹慎になったときのこと、覚えていますか？」

「まあ、本丸中がひどい有様だったからね。それがどうかしたのか？」

「そのとき出現した検非違使から、虎徹が入手できることが確認されました」

息を飲む音が聞こえる。わたしは続ける。

「報告書によれば一週間前、ある本丸の部隊が行き慣れた戦場にて検非違使と遭遇。戦闘へとなだれ込みぎりぎりまで敵部隊全てを破壊したそうです。敵部隊を倒した時に稀

に刀剣を入手できることはすでに周知の事実ですが、検非違使からも普段は出会いやすい短刀が多かったようですね。しかしこの件では明らかに短刀ではなく、記録にもなかつたので持ち帰つて顕現したところ、それは浦島虎徹だったそうです」

浦島虎徹。虎徹の真作にして脇差。名称は刀身に浦島太郎が掘られていることに由来する。

正真正銘、蜂須賀さまの兄弟刀である。

「検非違使、は、あの時押すのが精一杯だったあの部隊のことかな？あれを倒せば……」
「もう一つ、これは三日前のことです。同じような状況で入手した刀。こちらは打刀だったそうです。長曾祢……」

バンツと文机が大きな音を立て、湯呑みがカタカタと揺れた。

「その名は聞きたくない」

「……すいません」

沈黙。けれど黙っているわけにも行かない。いただいたお茶を飲み干して、もう一度面と向かいあつた。

「わたしは、多くの種類の刀剣を集めるという仕事があります。ですから、どれはいらないなどということは言えません。いつかは彼もここに来るでしょう。そのとき貴方は、この本丸に彼が来たとき、」

「俺は刀だ。主人がどのような他の道具を持っていようが、使つてさえくれるのならば文句はないよ。ただあいつと俺とは違うんだ、一緒にしないでくれ」

「はい。みんな違います。わたしは特に流派だからと括つたり差別することはしませんよ。部屋割りはご希望と利便性、相性ですからなるべく意に沿うようにしましょう」

ありがとう、と聞こえた気がした。俯いて手を下ろした蜂須賀さまの表情は読み取れない。喜びとともに別な感情もあるのだろう。贋作の多い虎徹では、本人にしかわからない感情もあるのだろう。これはわたしが容易に聞き出そうとしてはいけないことなのだ。

二杯目のお茶を、今度はわたしが注ぐ。梅の香りがまたたつた。

「そしてその検非違使ですが…」

言うか言うまいか悩んだ。けれど、早く兄弟に会いたいだろう蜂須賀さまには、酷かもしれないけど言わなければならぬ。

「同じ時代に繰り返し何度も行き、敵の本陣を何度も倒すと出てくるようです。そしてその部隊は、こちらの部隊の最高練度に匹敵します。わたしたち審神者にはあなた方の練度が数値として見えますが、敵が合わせてきているようですね。これは全589戦全戦で同じ結果が出ています。つまり、こちらは練度の差を少なくした部隊で行かないと敵しいというわけです」

つまり、と先を続けたのは蜂須賀さまだった。

「いま他と練度の差がどちらにも大きい僕は、しばらく検非違使対策として出陣できないというわけだね」

「…はい。検非違使が一度現れた時代では、ずっと検非違使の巡回が続くようですよ。そうなれば暫く練度の差をなくした部隊でしか出陣できません。遠征先で出たという話

はありませんので、基本遠征で練度を上げることになるでしょう。わたしの力が足りず、思うように動けず、申し訳ありません」

どうしても早く来た方の方が練度は高い。慣れている方々に新参の方を混ぜて今まで出陣していたのだ、経験はやはり多く積むことになる。幸い敵の本陣を倒した後に次回から検非違使が出る可能性がある場合、政府のシステムによつてアラームが鳴るようになったようだ。それを目安にすればいい。まあどこまで当てになるかわからないが。でも、逆を言えば敵の本陣まで踏み込まなければ検非違使にも察知されないということだ。

「あなたを鼻肩するわけにはいきません。ですが努力次第で誰かと並ぶこともできるでしょう。きょうはこれだけを伝えに来ました」

「…そうか。ありがとう。弟は誰とでも仲良くなれる可愛いやつだよ。だから、早く君にも会わせたい」

「ええ、わたしも早く会いたいです」

借りたブランケットを羽織つて部屋に帰る。やはり贋作である長曾祢虎徹のことに

ついてはほとんど口にしなかった。部屋を一緒にするのは得策でないかもしれないけど、まあ取らぬ狸の皮算用という。来てから考えることにしよう。

しかし検非違使。厄介なものが出てきてしまった。本当はあまりあの場には行きたくないのだけど、そろそろそうも言ってられないかしら。

11

検非違使対策も含め、今日は練度の高い方がうまくバラけるように、五つの部隊を組んだ。

「昨日言いました通り、今日の出陣はお休みします。そのかわり全員別の場所へわたしについてきてもらいます。近侍は清光さま、各部隊長は国俊さま、歌仙さま、葉研さま、蜂須賀さまです。各部隊2名ずつ経験の浅い方を配属しています。三人一組でフォローしあってください。指示は部隊長に任せます」

全員の顔を見回すと、硬い顔をした数名と首をかしげる数名、あとは普段通り。ここまではつきり分かれるのだから面白いものだ。

わたしは「大丈夫ですよ」と笑いかけ続ける。

「今日は政府が運営する施設に行きます。往復にはゲートが使えますので、部隊は一つずつ連れて行きます。残りは内番をこなしながら待機です。演練ですよ」

「あるじ、演練つて？」

「演習ですね。簡単に言ったら対刀剣勇士で行う模擬戦です。どこかの本丸の部隊と試合を行い、経験を積む場として政府が作りました。これを利用しない手はないですからね。」

「ここまで言うときちんと理解したのか、硬い表情もほぐれてくる。」

「ちなみに、演練ではいくら怪我をしても直ぐに治りますので、刀装なんかも気にせず思いつきりやつちやつてくださいね。ただし、模擬戦闘であることを忘れませんように。歴史修正主義者、あるいは検非違使を想定した陣形を組み、かつ挑むように。」

この本丸に来てはや四ヶ月。総勢30の刀を集めたのはわたしとあと数名。一つは例外だけれど、新人としてはいい方だ。

正直全員を一度に連れて歩いてやりたいくらいだけれど、悪目立ちはしたくないしはぐれたら困る。第一、わたしたちは演練に行くことが目的であって、他はどうでもいいのだ。…と、言い聞かせておく。

「じゃあ第一部隊の皆さま、準備が出来次第行きます。30分後に門の前に集合ですよ」

各々戦の準備に取り掛かる。腹ごしらえに向かう方や、準備運動をしに道場へ走る方、内番に向かう方。その中で清光さまだけがわたしの元に残り、歩くわたしについてきた。

これは、何かを言いたそうな顔。主を疑えば謀反になるという洗脳はどうやらまだ解けないらしい。わたしがそう簡単に刀解するはずがないことをどうしたら伝えられるのだろう。

部屋の前まで来てしまつて障子に手をかける。それを引く前に肩越しに振り返ると、清光さまは慌てて顔をそらしてしまつた。

「清光さま、わたしはあなたが大好きでとても大事です。みんな大好きで大事なんです。神さまに嘘をつけないことは知っていますでしよ〜?」

「…うん。知ってる」

「だからね、清光さま。そんなあなたが悲しそうにしていたら、困っていたら、わたしも悲しくなつちゃうんですよ〜」

ね？と彼の両手を取る。朝の片付けをしてくれたからか冷えているそれは、きゅつと握り返してきた。

「聞きたいことがあるならどうぞ。知りたいことがあるなら、わたしが知っていることなら教えましょう。疑問と疑いとは全く違うのですよ」

どうぞ、と部屋に引き入れる。暖房を切っていたから冷え切っていたが、それでも風の通る廊下よりは幾分ましだった。

「あの…その施設って、いつからあるの？」

「作られて百年は経っていますね」

「…なんで今まで、使わなかったの？」

恐る恐る、震える声を抑えるように。予想通りの質問に、わたしは端的に結論だけを笑顔で答えた。

「行きたくなかったからです」

理由は幾つかある。けれどそれは行かない理由にはならない。

清光さまは唇を噛み締め、少しだけ俯いた。ああ、それでは表情が見えない。そう隠さないで。

身を乗り出して顔を覗き込もうとすると、ぎゅつと頭を抱え込まれた。まるで、駄々をこねる子供が人形を抱きしめるように。

「えっ、ちよっ」

「行きたくないなら、行かなくていいよ。練度の低いやつが折れるのが怖いなら、いくらでも弱い敵に向かっていくし俺が守る。嫌なことを俺たちのために我慢しないでよ」

「…あの、」

そつと身じろぐと抱える手が緩んだ。やつとの事で顔を上げると、辛そうに唇を噛む清光さまと目があつた。

「大丈夫です。わたしは我慢も無理もしていませんよ。ただ、皆さまに嫌な思いをさ

せてしまうかもしれない。でもごめんなさい、そうも言っていられないんです。だから、ね。わたしは平気です」

ぽんぽんと背中を優しくさする。ぐすつと鼻を鳴らすとようやく体を離れた。目元を袖口で拭う。せつかく綺麗なお顔なのに、赤くなってしまった。

「じゃあ清光さま。わたし今から着替えますから、そうしたら髪を結ってもらえますか？」

「…俺が？」

「はい。演練の施設では他の審神者が多くいます。ですから、みんながすぐにわたしを見つけれられるよう、うんと可愛く結ってください」

ふふつと微笑むと清光さまもやつと笑ってくれた。よかった。悲しい顔は似合わない。そうさせたのは、わたしなのだけど。

準備が整ったと光忠さまが清光さまとわたしを呼びに来た。

門の前まで行くとすでに第一部隊の全員と各部隊の隊長が揃っていて、今か今かと待ちわびていた。

「では行きますが、その前に約束してください。何があっても、模擬合戦場以外で抜刀しないこと。他の本丸の審神者や刀剣と揉め事を起こさないこと。何を言われても、我慢してください。こちらが大人しくしていれば何ともありません。各部隊長は隊員に伝えてから内番に行ってください」

応、と良い返事。それから、と続ける。

「国俊さま。最初だけ近侍としてついてきてもらえますか？ 清光さまが試合中、一応誰かについていて欲しいので」

「わかった。薬研、第二部隊の連中も任せていいか？」

「問題ない。ほとんど兄弟だしな」

さあ準備は整った。彼らを信じ、強くなるために前に進もう。わたし自身も進まなければならぬのだ。

順繰りに門を通り、最後に挨拶をして国俊さまと膜の中に入る。

皆さまに嫌な思いを？そんなの、わたしがさせなければいい話だったんだから。

12

演練場はとても賑やかだった。

まずエントランスに着いたわたしたちは、想像以上の活気に気圧された。まあショッティングモールもある施設だから当たり前前といえれば当たり前なのだけど。わたしも初めて来たから一瞬言葉が出てこなかった。

それから気を取り直し、国俊さまと受付に行く。演練受付には四、五人の審神者とその近侍が並んでいた。ちなみに受け付けは他に入場受付（審神者を含む入場）刀剣入場受付（刀剣のみの入場）があり、つまりは買い物のためでもここを通らねばならない。刀剣だけでも買い物に来れるショッピングモールだから、一度は連れて来たいと思っただけだ。

「第一三二支部です」

「はい、予約を受けております。本日は五戦のご希望ですね。試合時間はこちらのシートに記載されていますので、五分前には控え室に刀剣を預けてください。また、刀剣の区別をつけるために入場パスを兼ねたバンドをつけていただく決まりとなっています。

これは支部として登録していますので刀剣を変えても有効です。審神者、近侍を含め何本必要ですか？」

「八本でお願いします」

「かしこまりました。ではこちらを。一日有効ですので、最後に帰還する際返却をお願いします」

事務的な作業を終えみんなの元へ戻る。言われたことをそのまま伝えてバンドをつけてもらい、入場ゲートをくぐった。

まずはじめに、と案内版の前に行く。案の定マップの掲載されたパンフレットが置いてあり、一部貰って空いている場所に移動した。

「ここは見ての通りショッピングモールが併設されています。普段自分たちで生活に必要なものなどを買うときはいつもの町で十分ですが、ここではいろいろな時代のも物が揃っていますからね。今日はゆっくりと見て回れませんが、来たければ外出許可を出しますので申し出てくださいね」

「きらびやかである。しかし少しばかり寂しい」

「兄弟は滝や山の方が好きなだけだろう」

「うむ、その通りである」

カツカツカといつものように笑う。ここでその大きな笑い声を咎めるものは殆どいない。審神者と刀剣しかいないから、結構自由に振る舞えるのだ。

ウインドウショッピングをしながら控え室を目指す。まだ大分時間はあるが、初めてなので控え室や合戦場を一応確認しておきたかった。

控え室は六人分の椅子と長机、壁側にロッカーが置いてあるだけの簡素な部屋だった。ロッカーは買い物をした後の荷物を置くための措置だろう。これだけでもだいたい行き届いた配慮だと言える。これから戦う刀剣は、基本荷物など持たないのだから。

「皆様の試合は十時四十五分から開始です。あと…三十分はありますね、わたし何か買ってくださいませうか」

「ううん、平気。なんか欲しいのあるやついるー?」

「僕は大丈夫だよ。準備もできてる」

光忠さまの声に数人が頷く。うーん、この部隊は物静かな方を一緒にしすぎたかしら。

まあいらぬというのならいいだろう。間に合うよう行動することを約束してもらつて、わたしと国俊さまは控え室をあとにした。

向かつた先は観戦室。当事の審神者並びに近侍のみが入れる。他の観客はモニターで見れるようになってゐるようだ。

こんなに早く来たのには訳があつた。いままで避けていた理由がここにある。しかし来てしまつた以上、避けては通れない。

途中、隣に並ぶ国俊さまがこちらの顔を覗き込んだ。

「なあ。その服、俺と出かけた時に買ったやつだよな」

「ええ。髪は次郎さまにやつてもらいました。：へん、ですか？」

「いいや、すつげー似合つてるぜ！」

でも、と言葉が続く。前を向いて、少し眉を寄せて。

「周りの連中、お前のことへんに見るから。なんか腹立つ。っつーかムカつく」
 「まあ…この髪は目立ちますからね〜」

ちよいちよいとおろしてある髪を引く。一言で言えば水色。いかに他の審神者も髪を染めているからとは言え、ここまで目立つ色にするものは少ない。確かに神に見つけてもらいやすくする意味合いもあるが、理由はそれだけではないのだ。

いやに視線を集める理由もそれだけではないだろう。顔には布をかけるのが一般的だが、わたしは面をつけている。赤い化粧の狐の面。面をつける審神者は限られているのだ。

他の本丸の刀剣に名や素顔を晒すわけにはいかない。さすがに隠されそうになってもうこう周りに大勢がいては対処ができない。だから面をつけるしみんなに名を呼ばぬようにも言った。

「放っておけばいいんですよ。見ているだけで害はありませんから〜」

「…そうだな。んじゃ、とつとと行こーぜ！戦つてるとこ横から見ただけなんてつまん

ねーけど、オレ清光の戦ってる姿は好きなんだよなー」
「へえ。それは楽しみですね〜」

やはり最初に二人だけで出陣したこともあったからか、お互いのことをよく知っている。素敵な関係、少しだけ羨ましく思ってしまう。

「ここが観戦室のようですね」

ようやく着いた部屋に、先ほどの控え室と同じ番号が振ってある。ロック解除のセンサーにバンドをかざそうとして、途中で止めた。

「国俊さま。入りますが、今から会う相手に絶対口ごたえをしないでください。それから、ここでの会話などは誰にも言わないでください。わたしのお願いです。約束を」
「…わかった。でも、なんかあったらお前の命を最優先にするからな」

今のわたしは笑えているだろうか。ゆっくり頷いてロックを解除する。自動的に開かれるドアの向こうには、やはりすでに先客がいた。

先客は振り返らない。代わりに、側に仕える白髪がゆるりと振り返った。

「おや、これは懐かしい」